



ORACLE E-BUSINESS SUITE RELEASE CONTENT DOCUMENT

アプリケーション・テクノロジー
リリース12.1および12.2 (12.0.2 - 12.2.6を含む)

作成: Oracle E-Business Suite製品開発

最終更新日: 2016年9月15日

目次

1.	免責事項	1
2.	はじめに	2
2.1.	ドキュメントの目的	2
3.	テクノロジー・スタック	3
3.1.	リリース12.2の概要	3
3.2.	リリース12.2のテクノロジー・コンポーネント	3
3.3.	テクノロジーの構成	5
3.3.1.	概要	5
3.3.2.	リリース12.0.2 (RUP2)	5
3.3.2.1.	テクノロジー・インベントリ・レポート	5
3.3.2.2.	OC4Jのロード・バランシング	5
3.3.3.	リリース12.0.6 (RUP6)	5
3.3.3.1.	AutoConfigのパフォーマンスの機能拡張	5
3.3.4.	リリース12.1.1	6
3.3.4.1.	AutoConfigプロファイラ	6
3.3.4.2.	ノード間でのAutoConfigの並列化	6
3.3.4.3.	AutoConfigサービス制御の依存関係の管理	6
3.3.4.4.	AutoConfig構成チェック・ユーティリティ	6
3.3.4.5.	Oracle Database 11gでのAutoConfigのサポート	6
3.3.4.6.	プラットフォーム間での移行のためのコンテキストXML作成ユーティリティ	6
3.3.4.7.	AutoConfig検索ユーティリティ	6
3.3.4.8.	テクノロジー・スタック・インベントリ検証レポート	7
3.3.4.9.	拡張されたアプリケーション層ファイル・システムの共有のサポート	7
3.3.4.10.	拡張されたアプリケーション層のロード・バランシングのサポート	7
3.3.4.11.	拡張されたDMZ配置のサポート	7
3.3.4.12.	ネットワーク・トラフィック暗号化機能	7
3.3.4.13.	拡張構成ウィザード	7
3.3.4.14.	Oracle Connection Managerテクノロジーの統合	7
3.3.4.15.	統合SOAゲートウェイのサポート	8
3.3.5.	リリース12.1.3	8
3.3.5.1.	AutoConfigのパフォーマンスの改善	8
3.3.5.2.	11g SCANリスナー機能でのAutoConfigのサポート	8
3.3.5.3.	Forms earファイルの自動配置	8
3.3.6.	リリース12.2	8
3.3.6.1.	インストール	8
3.3.6.2.	オンライン・パッチ適用	8
3.3.6.3.	複製	9
3.3.6.4.	アプリケーション層	9
3.3.6.5.	外部統合	9
3.3.6.6.	セキュアな構成のための診断	9
3.3.6.7.	WLSデータソース接続プール	9
3.3.6.8.	64ビットのJavaのサポート	9
3.3.7.	リリース12.2.5	10
3.3.7.1.	管理対象サーバー情報の簡略化された構成	10
3.3.7.2.	EBSインストール・セントラル・インベントリ	10
3.3.7.3.	Oracle WebLogic Serverの管理ユーザー・パスワードを変更するための簡略化されたメカニズム	10
3.3.7.4.	中間層Oracle E-Business Suiteテクノロジーのコードレベル・チェッカ	10
3.3.7.5.	Oracle Unified Directoryとの外部統合	10
3.4.	国際化	11
3.4.1.	リリース12.1.1	11
3.4.1.1.	Hijrahカレンダーおよびタイ仏暦のサポート	11

3.4.1.2.	コンカレント処理での複数言語/各国語サポート(MLS/NLS)の機能拡張	11
3.4.2.	リリース12.1.2	11
3.4.2.1.	リトアニア語、インドネシア語およびウクライナ語のサポート	11
3.4.2.2.	数字グループ区切り文字としてのスペースおよび単一引用符のサポート	11
3.4.2.3.	週の最初の日のサポート	11
3.4.2.4.	ガント・チャートおよびインライン(埋込み)日付ピッカーでのタイ・カレンダーおよびHijrahカレンダーのサポート	11
3.4.3.	リリース12.1.3	12
3.4.3.1.	Oracle iSetup MLS	12
3.4.3.2.	Lightweight MLS	12
3.4.3.3.	Oracle Application Frameworkでの改善されたMLSエクスポート機能	12
3.4.3.4.	Oracle Application FrameworkでのリッチUI双方向サポート	13
3.4.3.5.	セルビア語のサポート	13
3.4.4.	リリース12.2	13
3.4.4.1.	Lightweight MLSの拡張されたサポート	13
3.4.4.2.	言語ソートのサポート	13
3.4.4.3.	文字日付の各国カレンダーのサポートの機能拡張	13
3.4.4.4.	拡張された数字スペルのサポート	13
3.4.4.5.	Oracle Databaseのすべての地域のサポート	13
3.4.4.6.	セルビア語のサポート	13
3.4.4.7.	Forms UIエクスポート機能の機能拡張	13
3.4.4.8.	Oracle WorkflowのEメールの文字エンコードの構成	14
3.4.4.9.	Oracle Diagnosticsの国際化のための機能拡張	14
3.4.4.10.	Oracle Diagnosticsの国際化テスト	14
3.4.4.11.	国際化ライブラリのバージョンの表示のサポート	14
3.4.5.	リリース12.2.5	14
3.4.5.1.	軽量のみの言語サポート	14
3.4.5.2.	言語ソートでのコンカレント・プログラムのサポート	15
3.4.5.3.	Oracle iSetupの国際化のための機能拡張	15
3.4.5.4.	Oracle Report Managerの国際化のための機能拡張	15
3.4.6.	リリース12.2.6	16
3.4.6.1.	改善された言語判別	16
3.4.6.2.	フル・モードの言語のみのためのTranslation Synchronization patchのマニフェスト・ファイル	16
3.4.6.3.	Lightweight MLSのためのOracle Applications Managerのライセンス	16
3.4.6.4.	Oracle iSetupでの言語データの合理化された移行	17
3.4.6.5.	Oracle Web Applications Desktop Integratorの国際化のための機能拡張	17
4.	アプリケーション・テクノロジー	18
4.1.	Oracle Application Framework	18
4.1.1.	リリース12.0.3 (RUP3)	18
4.1.1.1.	管理者のパーソナライズのためのHGridのレコード・セット・サイズの公開	18
4.1.2.	リリース12.0.6 (RUP6)	18
4.1.2.1.	レコード履歴	18
4.1.2.2.	フレックスフィールド参照フィールド	18
4.1.3.	リリース12.1.1	19
4.1.3.1.	レコード履歴	19
4.1.3.2.	添付のバルク・アップロード	19
4.1.3.3.	ホーム・ページのお気に入りリンクで新しいウィンドウを開く	19
4.1.3.4.	JavaのBigDecimalデータ型のサポート	19
4.1.3.5.	拡張された検索リージョンのパーソナライズ	19
4.1.3.6.	アプリケーション層でのデータ・ソート	19
4.1.3.7.	添付のウィルス・スキャンのサポート	19
4.1.3.8.	フレックスフィールド参照フィールド	20
4.1.3.9.	Hijrahカレンダーおよびタイ仏暦のサポート	20
4.1.4.	リリース12.1.2	20
4.1.4.1.	ユーザー・インタフェースの機能拡張	20
4.1.4.2.	Oracle E-Business Suite Business Intelligence (OBIEE)の統合	21
4.1.4.3.	ポートレット・ジェネレータ	21
4.1.4.4.	RESTインタフェース	21
4.1.5.	リリース12.1.3	21

4.1.5.1.	ユーザー・インタフェースの改善	21
4.1.5.2.	新しいウィンドウでポートレット・リンクを開く	22
4.1.5.3.	ADFの統合	22
4.1.6.	リリース12.2	22
4.1.6.1.	操作性の改善	22
4.1.6.2.	AutoVueの統合	23
4.1.6.3.	パーソナライズの改善	24
4.1.6.4.	拡張されたOracle JDeveloper OA Extension	24
4.1.6.5.	iPadの動作保証	24
4.1.6.6.	拡張されたキー・フレックスフィールドの終了日検証	25
4.1.6.7.	添付のコピーのサポート	25
4.1.6.8.	ファイル・アップロードでのアンチウイルス・スキャンのサポート	25
4.1.6.9.	「作業環境」ページへの配信マネージャの統合	25
4.1.6.10.	拡張された情報ページ	25
4.1.6.11.	改善された外部アプリケーション統合	25
4.1.6.12.	ポートレット・ジェネレータの変更	25
4.1.6.13.	アクセス・キーの無効化	25
4.1.6.14.	新しいレート用バー	25
4.1.6.15.	モーダル・ポップアップ	26
4.1.6.16.	長いテキストの添付	26
4.1.6.17.	改善された「レコード履歴」	26
4.1.6.18.	メッセージ・リッチ・テキスト・エディタでのAntiSamyのサポート	26
4.1.6.19.	複合表列での改善されたソートのサポート	26
4.1.6.20.	検証プロファイルの廃止	26
4.1.6.21.	改善された従来表および拡張表のアクセシビリティのサポート	26
4.1.7.	リリース12.2.3	26
4.1.7.1.	新しいSkyrosスキン	26
4.1.7.2.	リッチ表インタラクション	27
4.1.7.3.	動的ビュー	27
4.1.8.	リリース12.2.4	27
4.1.8.1.	モーダル・ポップアップとしてのダイアログ・ページ	27
4.1.8.2.	リッチ表インタラクション	27
4.1.8.3.	リッチHGridインタラクション	27
4.1.8.4.	日付ピッカーでの時刻のサポート	27
4.1.8.5.	新しいメニュー・コンポーネント	27
4.1.8.6.	新しいスピン・ボックス・コンポーネント	28
4.1.8.7.	モバイル・デバイスでのジェスチャのサポート	28
4.1.8.8.	ユニバーサル・グローバル・ヘッダー	28
4.1.8.9.	簡略化されたホーム・ページ	28
4.1.8.10.	Chromeブラウザの動作保証	28
4.1.8.11.	HTML5の動作保証	28
4.1.8.12.	添付表での列の非表示のサポート	28
4.1.8.13.	新しい拡張検索基準	28
4.1.9.	リリース12.2.5	29
4.1.9.1.	Oracle Alta UIのルック・アンド・フィールのアップグレード	29
4.1.9.2.	リッチ表インタラクション	29
4.1.9.3.	簡略されたページUI	29
4.1.9.4.	ポップアップとしての付加フレックスフィールドのサポート	29
4.1.9.5.	インライン添付の機能拡張	29
4.1.9.6.	ポップアップの機能拡張	30
4.1.9.7.	ボタンのアイコンのサポート	30
4.1.9.8.	キー・フレックスフィールドでのWHERE句のサポート	30
4.1.10.	リリース12.2.6	30
4.1.10.1.	添付のタイプに関する開発者の制御	30
4.1.10.2.	Oracle AutoVueリリース20.2.3と添付の統合	30
4.1.10.3.	新しい印刷APIに関するOracle AutoVue Libraryのアップデート	30
4.1.10.4.	URL添付の検証のサポート	30
4.1.10.5.	ホーム・ページおよびグローバル・ヘッダーの改善	31
4.1.10.6.	検索リージョンの操作性の改善	31
4.1.10.7.	フレックスフィールドの特殊値セット	31

4.1.10.8.	スプリッタ・コンポーネント	31
4.1.10.9.	階層化レイアウト	31
4.1.10.10.	Oracle Web Applications Desktop Integratorと表の統合	31
4.1.10.11.	非EOベースのビュー・オブジェクトのレコード履歴のサポート	31
4.1.10.12.	複数選択表での3つの状態を持つチェック・ボックスのサポート	32
4.1.10.13.	iOSでコンテンツの非表示/表示を行うためのヘッダー・テキスト選択のサポート	32
4.1.10.14.	日付フィールドのヒント・テキストの再配置	32
4.1.10.15.	テキスト・フィールド、LOV入力フィールドおよびスピン・ボックスでのヒントのサポート	32
4.2.	Oracle Application Object Library	32
4.2.1.	リリース12.0.3 (RUP3)	32
4.2.1.1.	カスタム・ディレクトリ情報ツリー(DIT)	32
4.2.2.	リリース12.1.1	32
4.2.2.1.	一般データ・ローダー(FNDLOAD)のデータ型サポートの機能拡張	32
4.2.2.2.	XML定義ファイル(XDF)のデータ型サポートの機能拡張	32
4.2.2.3.	コンカレント処理での統合ビジネス・イベント	33
4.2.2.4.	コンカレント処理でのマネージャと要求インスタンスのアフィニティ	33
4.2.2.5.	コンカレント処理でのマネージャの起動しきい値	33
4.2.3.	リリース12.1.2	33
4.2.3.1.	Oracle Access Manager の統合	33
4.2.3.2.	Oracle Application Object Library Java API	33
4.2.3.3.	Oracle E-Business Suiteのデータソース(AppsDataSource)	34
4.2.3.4.	JAAS for Oracle E-Business Suite	34
4.2.3.5.	予定作成チャートのユーザー・インタフェースの機能拡張	34
4.2.4.	リリース12.1.3	34
4.2.4.1.	キー・フレックスフィールドの相互検証ルール・レポートの機能拡張	34
4.2.4.2.	フレックスフィールドのセグメント名の検証	35
4.2.4.3.	Oracle Business Intelligence Publisher配信マネージャとコンカレント処理の統合	35
4.2.4.4.	11gの大文字と小文字が区別されたデータベース・パスワードに対するOracle E-Business Suiteのサポート	35
4.2.4.5.	FNDMENU診断メニューのセキュリティの改善	35
4.2.4.6.	データベース接続のタグ付け	35
4.2.5.	リリース12.2	36
4.2.5.1.	プロファイルのためのOracle Database 11g リリース2のネイティブなキャッシング	36
4.2.5.2.	Oracle Database 11g リリース1のAUTOサンプリング統計収集機能の活用	36
4.2.5.3.	Oracle Application Framework UIでの添付のコピーのサポート	36
4.2.5.4.	フレックスフィールドの値セット・セキュリティ	36
4.2.5.5.	ブラウザ・クッキーのスコープ	36
4.2.5.6.	許容されるJSPのリスト	37
4.2.5.7.	Oracle Application Object Library RESTサービス	37
4.2.6.	リリース12.2.3	37
4.2.6.1.	拡張パスワード・ハッシング	37
4.2.7.	リリース12.2.4	38
4.2.7.1.	標準要求発行の動的デフォルト・パラメータの再計算	38
4.2.7.2.	キー・フレックスフィールド・ウィンドウをデフォルトで開くことを制御するためのプロファイル・オプション	38
4.2.7.3.	サービスごとの環境値およびパラメータの設定	38
4.2.7.4.	承認されたリダイレクト	38
4.2.8.	リリース12.2.5	39
4.2.8.1.	ログイン・ページの機能拡張	39
4.2.8.2.	「検索」ウィンドウでの問合せで付加フレックスフィールドにNull値が許可される	39
4.2.8.3.	フレックスフィールドの相互検証ルール違反レポートの機能拡張	39
4.2.8.4.	フレックスフィールド・テスト・ページ	39
4.2.8.5.	コンカレント処理のコマンドライン・ユーティリティ	39
4.2.8.6.	ファイル・ストリーミングのためのJSPおよびJava API	39
4.2.9.	リリース12.2.6	39
4.2.9.1.	フレックスフィールド値セット・セキュリティのセットアップ・ウィザード	39
4.2.9.2.	フレックスフィールド登録HTML UI	39
4.2.9.3.	職責レベルまたはユーザー・レベルの読取り専用モードのOracle E-Business Suite Forms	40
4.2.9.4.	コンカレント処理のログ・ファイルおよび出力ファイルを格納するための新しいスキーム	40
4.2.9.5.	監査証跡検索HTML UI	40
4.2.9.6.	デフォルトでの許可済JSPホワイトリストの有効化	40

4.2.9.7.	デフォルトでの許可済リダイレクトの有効化	40
4.2.9.8.	セキュア構成コンソール	40
4.3.	Oracle Applications Manager (OAM)	40
4.3.1.	リリース12.1.3	40
4.3.1.1.	アプリケーション・モジュールごとのタイミング・レポートのサポート	40
4.3.2.	リリース12.2	41
4.3.2.1.	Oracle Applications ManagerとOracle Enterprise Manager 11g Fusion Middleware Controlの統合	41
4.3.3.	リリース12.2.2	41
4.3.3.1.	パッチ・ウィザードの詳細ページでのすべてのボタンの表示	41
4.3.4.	リリース12.2.4	41
4.3.4.1.	コードレベルの要約ページのライセンス済製品との同期ボタン	41
4.3.5.	リリース12.2.5	41
4.3.5.1.	パッチ・ウィザードの合理化された推奨パッチ・リスト	41
4.3.5.2.	パッチ・ウィザードの「推奨パッチ」ページのエクスポート機能	41
4.3.6.	リリース12.2.6	41
4.3.6.1.	ライセンス・マネージャの言語モードの選択	41
4.4.	Oracle Diagnostics Framework	42
4.4.1.	概要	42
4.4.2.	リリース12.0.3 (RUP3)	42
4.4.2.1.	診断実行エンジンおよびユーザー・インタフェースの機能拡張	42
4.4.3.	リリース12.0.4 (RUP4)	42
4.4.3.1.	新しい改訂された診断テスト	42
4.4.4.	リリース12.0.6 (RUP6)	44
4.4.4.1.	診断の機能拡張	44
4.4.5.	リリース12.1.1	44
4.4.5.1.	パフォーマンスの改善	44
4.4.5.2.	ロール・ベースのアクセス制御の活用	44
4.4.5.3.	テスト・レベルのセンシティブティ	44
4.4.5.4.	Oracle XML Publisherの統合	45
4.4.5.5.	UIの機能拡張	45
4.4.5.6.	カスタマイズのサポート	45
4.4.5.7.	ロール・ベースのアクセス制御および有効なアプリケーション	45
4.4.5.8.	テスト・セットのスケジューリング	45
4.4.5.9.	優先されるプロファイル・オプション	45
4.4.5.10.	パフォーマンス・プロファイル・オプション	46
4.4.6.	リリース12.1.2	46
4.4.6.1.	XMLファイル・タイプの認識	46
4.4.7.	リリース12.1.3	46
4.4.7.1.	インコンテキスト診断	46
4.5.	Oracle E-Business Suite Applications DBA	46
4.5.1.	リリース12.0.2 (RUP2)	46
4.5.1.1.	ベース言語スクリプトの変更	46
4.5.2.	リリース12.2	47
4.5.2.1.	オンライン・パッチ適用	47
4.5.3.	リリース12.2.4	47
4.5.3.1.	オンライン・パッチ適用のログ・アナライザ	47
4.5.3.2.	新しいオンライン・パッチ適用クリーン・アップ・モード	47
4.5.4.	リリース12.2.5	47
4.5.4.1.	単一ファイル・システム開発環境でのパッチ適用のサポート	47
4.5.4.2.	EBS Technology Codelevel Checker (ETCC)とadopの統合	47
4.5.4.3.	拡張されたadopコンソール・メッセージ	48
4.5.4.4.	新しいadop監視ツール	48
4.5.4.5.	adop操作のパフォーマンスの改善	48
4.5.4.6.	オンライン・パッチ適用のログ・アナライザ・ユーティリティによって改善された Oracle WebLogic Serverエラー・レポート	48
4.5.4.7.	カスタム・アプリケーションを登録解除する機能	48
4.5.5.	リリース12.2.6	48
4.5.5.1.	ログ・ファイルの構造	48
4.5.5.2.	シード・データの変更の処理	48

4.5.5.3.	デルタ同期方法	49
4.5.5.4.	欠落しているアプリケーション層パッチの警告	49
4.6.	Oracle E- Business Suite Information Discovery	49
4.6.1.	概要	49
4.6.2.	リリース12.2 V7	49
4.6.2.1.	Oracle Endeca Information Discovery 3.2へのアップグレード	49
4.6.2.2.	新しいレイアウト・テンプレート	49
4.6.2.3.	サマリー・バーのメトリックの絞込み	50
4.6.2.4.	拡張されたOracle E-Business Suiteの結果グリッド機能	50
4.6.2.5.	拡張された言語サポート	50
4.6.2.6.	EndecaServer.propertiesファイルの変更	50
4.6.2.7.	ホスト名解決の改善	51
4.6.2.8.	新しいデータ・ドメインに作成されるプロファイル・ファイル	51
4.6.2.9.	クラスタ・コーディネータによる自動ログ・クリーン・アップ	51
4.6.2.10.	アプリケーション層配置の最適化	52
4.6.2.11.	診断の機能拡張	52
4.6.2.12.	改善されたバルク・ロード・インタフェースによる無効なレコードの処理	52
4.6.2.13.	新しいEQL関数	52
4.6.2.14.	ジオコードに基づくレコードのソート	52
4.6.2.15.	同時ETLの機能拡張	53
4.7.	Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイ	53
4.7.1.	ビジネス・ケース	53
4.7.2.	概要	53
4.7.3.	リリース12.1.1	54
4.7.3.1.	統合リポジトリ	54
4.7.3.2.	SOAプロバイダ	54
4.7.3.3.	サービス起動フレームワーク	55
4.7.3.4.	SOAモニター	55
4.7.4.	リリース12.1.2	55
4.7.4.1.	拡張されたSOA診断	55
4.7.4.2.	統合インタフェース・タイプとしてのフォーム用Java APIの導入	55
4.7.4.3.	Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイのカスタマイズ (統合リポジトリ・パーサー)	55
4.7.5.	リリース12.1.3	56
4.7.5.1.	統一された静的なXSDスキーマ・ファイルの命名法およびスキーマ構造	56
4.7.5.2.	拡張されたロギング/監査および監視	56
4.7.5.3.	SAMLトークンのサポート	56
4.7.6.	リリース12.1.3+	56
4.7.6.1.	RESTサービスのサポート	56
4.7.6.2.	セキュリティ・サービス	57
4.7.6.3.	Java Beanサービスのアノテーション	57
4.7.7.	リリース12.2	57
4.7.7.1.	Oracle WebLogic Server 11gとOracle SOA Suite 11gの統合	57
4.7.7.2.	非同期Webサービスのサポート	58
4.7.7.3.	Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイの診断およびデザイナ・スクリプト	58
4.7.7.4.	エラーおよび例外の処理	59
4.7.8.	リリース12.2.3	59
4.7.8.1.	RESTサービスとしてのPL/SQL APIのサポート	59
4.7.8.2.	セキュリティ・サービス	59
4.7.9.	リリース12.2.4	59
4.7.9.1.	RESTサービスとしてのJava APIのサポート	59
4.7.9.2.	Java Beanサービスのアノテーション	60
4.7.10.	リリース12.2.5	60
4.7.10.1.	アプリケーション・モジュール・サービスのサポート	60
4.7.10.2.	拡張された言語タグのサポート	60
4.8.	Oracle E-Business Suite Mobile Foundation	60
4.8.1.	概要	60
4.8.2.	Mobileリリース1.0	61
4.8.2.1.	モバイル・アプリ・サービス	61
4.8.2.2.	モバイル・アプリケーション・マネージャのユーザー・インタフェース	61

4.8.2.3. ユーザー・ログインおよび構成フロー	61
4.8.3. Mobileリリース2.0	61
4.8.3.1. 改善されたログイン・フロー	61
4.8.3.2. 診断の改善	61
4.8.4. Mobileリリース2.1	61
4.8.4.1. ログインおよび構成フローの改善	61
4.8.4.2. アプリを再インストールすることなくサーバーURLを変更する機能	62
4.8.4.3. 診断の改善	62
4.8.4.4. アプリの構成および管理の改善	62
4.8.5. Mobileリリース3.0	62
4.8.5.1. iOSおよびAndroidを同じクライアント・コードでサポートするように変更	62
4.8.5.2. 「接続詳細」ページからサーバーURLを更新する機能	62
4.8.5.3. 構成UIの更新	62
4.8.6. Mobileリリース4.0	63
4.8.6.1. 企業での配布のサポート	63
4.8.6.2. 企業ブランドのカスタマイズのサポート	63
4.8.6.3. Web SSO認証のサポート	63
4.8.6.4. 拡張されたモバイル・アプリ・セットアップ・ページ	63
4.8.7. Mobileリリース4.1	63
4.8.7.1. カスタム・アプリ開発のサポート	63
4.8.8. Mobileリリース5.0	64
4.8.8.1. 管理者のためのユーザー・インストールおよび使用状況のメトリック	64
4.8.8.2. 選択したアプリ操作のアップデートされたルック・アンド・フィール	64
4.8.8.3. Oracle Mobile Application Framework (MAF) 2.2.2の活用	64
4.8.8.4. アプリ内で外部Webサイトへのリンクを開く	64
4.8.9. Mobileリリース6.0	64
4.8.9.1. Androidデバイスのアプリ内で外部Webサイトへのリンクを開く	64
4.8.9.2. 選択したアプリ操作のアップデートされたルック・アンド・フィール	64
4.8.9.3. ユーザー資格証明フィールドのクリア	64
4.8.9.4. Oracle Mobile Application Framework (MAF) 2.3.1の活用	65
4.8.9.5. UIでの開発者および管理者の別々の権限	65
4.9. Oracle E-Business Suite Secure Enterprise Search	65
4.9.1. 概要	65
4.9.2. リリース12.0.6 (RUP6)	66
4.9.2.1. 検索モデラー	66
4.9.3. リリース12.1.1	66
4.9.3.1. 検索モデラー	66
4.9.3.2. そのまま使える検索可能なビジネス・オブジェクト	66
4.9.4. リリース12.1.2	67
4.9.4.1. UIの改善	67
4.9.4.2. 設計時の検索セキュリティ・プラグイン	67
4.9.5. リリース12.1.3	67
4.9.5.1. Excelへの検索結果のエクスポート	67
4.9.5.2. Oracle E-Business SuiteからのOracle Secure Enterprise Searchユーザー・インタフェースの起動	68
4.10. Oracle Functional Testing Suite Advanced Pack for Oracle E-Business Suite	68
4.10.1. 概要	68
4.10.2. V1.0	69
4.10.2.1. Oracle E-Business SuiteのOracle Flow Builder用の事前作成済テスト・コンテンツ	69
4.11. Oracle iSetup	69
4.11.1. 概要	69
4.11.2. リリース12.1.1	69
4.11.2.1. Oracle iSetup移行パッケージ・タクソノミ	69
4.11.2.2. Oracle iSetupへのサービスBean APIの登録	69
4.11.2.3. レポートの設定	70
4.11.3. リリース12.1.3	70
4.11.3.1. Oracle iSetup MLS	70
4.11.4. リリース12.2.5	70
4.11.4.1. Oracle iSetupの国際化のための機能拡張	70
4.11.5. リリース12.2.6	70

4.11.5.1. 言語データの合理化された移行	70
4.11.6. Oracle iSetupの製品カバレッジ	71
4.12. Oracle Report Manager	72
4.12.1. 概要	72
4.12.2. リリース12.0.6 (RUP6)	72
4.12.2.1. 複数のワークシートのサポート	72
4.12.3. リリース12.1.1	72
4.12.3.1. 複雑な内容セット	72
4.12.3.2. 複数のワークシートのサポート	73
4.12.4. リリース12.1.2	73
4.12.4.1. 拡張スケジューリング・オプション	73
4.12.5. リリース12.1.3	73
4.12.5.1. リポジトリ管理のセキュリティ	73
4.12.6. リリース12.2	73
4.12.6.1. Microsoft Officeの動作保証	73
4.12.6.2. 「レポート・マネージャ・ホーム」 ページ	73
4.12.6.3. レポート・セットの発行	74
4.12.6.4. レポートの配信	74
4.12.6.5. FirefoxからのMicrosoft Excelレポートの生成	74
4.12.6.6. デジタル署名のサポート	74
4.12.6.7. Microsoft Excelでの行見出しおよび列見出し	74
4.12.7. リリース12.2.4	74
4.12.7.1. Microsoft Excelのリボンとして表示されるOracleメニュー	74
4.12.8. リリース12.2.5	75
4.12.8.1. Office Open XMLのサポート	75
4.12.8.2. 簡略化されたレポートの発行	75
4.12.8.3. 並行内容セットのサポート	75
4.12.8.4. 簡略化されたレポート・マネージャのホームおよびメニュー	75
4.13. Oracleユーザー管理(UMX)	75
4.13.1. 概要 – SOX準拠RBACレポート	75
4.13.2. リリース12.1.1	76
4.13.2.1. カテゴリ化された検索	76
4.13.2.2. 360度ビュー	76
4.13.2.3. レポート	76
4.13.2.4. クイック検索	76
4.13.2.5. スナップショット	76
4.13.2.6. ロール階層の出力	77
4.13.3. リリース12.2.4	77
4.13.3.1. プロキシ・ユーザーのアクセス制御	77
4.13.4. リリース12.2.6	77
4.13.4.1. プロキシの監査	77
4.13.4.2. ユーザー登録HTML UI	77
4.13.4.3. 職責HTML UI	77
4.14. Oracle Web Applications Desktop Integrator	77
4.14.1. 概要	77
4.14.2. リリース12.1.2	78
4.14.2.1. Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワーク	78
4.14.3. リリース12.1.3	78
4.14.3.1. デジタル署名のサポート	78
4.14.3.2. Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワークの機能拡張	79
4.14.4. リリース12.2	79
4.14.4.1. Microsoft Officeの動作保証	79
4.14.4.2. 操作性の機能拡張	79
4.14.4.3. 職責の切替えオプション	79
4.14.4.4. 行のコミットパラメータ	79
4.14.4.5. アップロードのためのデータの圧縮	79
4.14.4.6. Oracle Web Applications Desktop Integratorの診断	80
4.14.5. リリース12.2.4	80
4.14.5.1. Microsoft Excelのリボンとして表示されるOracleメニュー	80

4.14.6. リリース12.2.5	80
4.14.6.1. Office Open XMLのサポート	80
4.14.6.2. フレックスフィールドの機能拡張	80
4.14.6.3. インタフェース属性の依存する値リスト	80
4.14.7. リリース12.2.6	80
4.14.7.1. 簡略化された「文書の作成」ページ	81
4.14.7.2. 簡略化された「レイアウトの定義」ページ	81
4.14.7.3. インタフェース属性のリフレッシュ	81
4.14.7.4. Oracle Web Applications Desktop Integratorを使用したOracle Application Frameworkの表データのエクスポート	81
4.15. Oracle Workflow	81
4.15.1. リリース12.1.1	81
4.15.1.1. ワークリスト - バルク通知応答およびバルク通知クローズ	81
4.15.1.2. Hijrahカレンダー/タイ・カレンダーのサポート	82
4.15.2. リリース12.1.3	82
4.15.2.1. 通知メーラー - SMTP認証	82
4.15.3. リリース12.2	82
4.15.3.1. Eメールの文字エンコードの構成	82
4.15.3.2. ワークリスト応答処理の遅延	82
4.15.3.3. ワークフローのためのOracle RACのアフィニティ	82
4.15.3.4. ワークリストの操作性の機能拡張	83
4.15.3.5. 使用不能通知作業環境のバルク・リセット	84
4.15.3.6. 通知の再割当の機能拡張	84
4.15.3.7. 相関IDによるサービス・コンポーネント処理の機能拡張	84
4.15.4. リリース12.2.3	84
4.15.4.1. ワークリスト・ヘッダー・アイコン	84
4.15.5. リリース12.2.4	85
4.15.5.1. プロキシ・ユーザーのアクセス制御	85
4.15.6. リリース12.2.5	85
4.15.6.1. Eメール通知でのOracle E-Business Suite添付のサポート	85
4.15.6.2. ユーザーまたはロールの複数のEメール・アドレスのサポート	85
4.15.7. リリース12.2.6	85
4.15.7.1. Eメール通知内のOracle E-Business Suiteへの外部リンク	85
4.15.7.2. メーラーのセキュリティ・プロトコルを指定する機能	85
4.16. Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business Suite	86
4.16.1. 概要	86
4.16.2. Mobileリリース1.0 - クライアント・バージョン1.0.0	86
4.16.2.1. 承認要求の処理	86
4.16.3. Mobileリリース2.1 - クライアント・バージョン1.1.0	86
4.16.3.1. Mobile Foundationリリース2.1のアップデート	86
4.16.4. Mobileリリース3.0 - クライアント・バージョン1.2.0	86
4.16.4.1. Androidのサポート	86
4.16.4.2. Mobile Foundationリリース3.0のアップデート	86
4.16.5. Mobileリリース4.0 - クライアント・バージョン1.3.0	87
4.16.5.1. 新しい承認タイプ	87
4.16.5.2. 拡張されたデータ・レイアウト	87
4.16.5.3. 改善された承認のフィルタリング	87
4.16.5.4. 翻訳のサポート	87
4.16.5.5. Mobile Foundationリリース4.0のアップデート	87
4.16.6. Mobileリリース5.0 - クライアント・バージョン1.4.0	87
4.16.6.1. 新しい承認タイプ	87
4.16.6.2. 添付	87
4.16.6.3. カスタム・ワークフローの追加	87
4.16.6.4. 拡張されたタイプ・ページによる承認保留	88
4.16.6.5. 拡張された「詳細」ページ	88
4.16.6.6. 拡張されたリフレッシュ操作	88
4.16.6.7. Mobile Foundationリリース5.0のアップデート	88
4.16.7. Mobileリリース5.0 - クライアント・バージョン1.4.2	88
4.16.7.1. Mobile Foundationリリース5.0のアップデート	88

4.16.8. Mobileリリース6.0 – クライアント・バージョン1.5.0	88
4.16.8.1. 新しい承認	88
4.16.8.2. シードのメタデータをカスタマイズする機能	88
4.16.8.3. カスタマイズをサポートするための見積承認の機能拡張	88
4.16.8.4. 技術的なアップデート	88
4.16.8.5. Mobile Foundation リリース6.0のアップデート	89
4.17. Oracle XML Gateway	89
4.17.1. リリース12.0.3 (RUP3)	89
4.17.1.1. Oracle XML Gatewayからのエラー通知の改善	89
4.17.2. リリース12.2	89
4.17.2.1. JavaでのOracle XML Gatewayのインバウンド処理	89
4.17.2.2. 拡張されたOracle XML Gateway診断	89
4.17.3. リリース12.2.6	90
4.17.3.1. 取引先を管理するためのAPI	90

1. 免責事項

このRelease Content Document (RCD)は、指定されたリリースのOracle E-Business Suiteに提供されている製品機能について説明しています。このドキュメントでは、新機能または変更された機能についてのみ説明します。以前のリリースからの既存の機能については説明しません。指定されているリリースのOracle E-Business Suiteにアップグレードするビジネス上の利点の評価に役立てることのみが意図されています。

このドキュメントには、ソフトウェアまたは印刷物などの形式を問わず、オラクルが独占的な権利を有する財産的情報が含まれています。この機密資料へのアクセスと使用は、お客様とオラクルとの間で締結され、お客様が遵守に同意した、Oracle Master Agreement、Oracle License and Oracle Services Agreement(オラクル・ライセンスおよびサービスに関する契約書)、Oracle PartnerNetwork Agreement、Oracle Distribution Agreementまたはその他のライセンス契約の条件に従うものとします。このドキュメントとその内容の開示、コピー、複製および配布には、オラクルによる事前の承諾を必要とします。このドキュメントはライセンス契約の一部となるものではなく、オラクルおよびその子会社や関連会社との契約を構成するものではありません。

このドキュメントは情報提供を目的としており、説明されている製品機能の実装およびアップグレードの計画を支援することのみが意図されています。マテリアル、コード、または機能の提供をお約束するものではなく、購入決定を行う際の判断材料とすべきではありません。このドキュメントに記載されている特徴または機能の開発、リリースおよび時期については、オラクルの裁量により決定されます。

製品アーキテクチャの性質により、コードが大幅に不安定になる危険を冒すことなく、このドキュメントに記述されているすべての機能を安全に含めることができない場合があります。

2. はじめに

2.1. ドキュメントの目的

このRelease Content Document (RCD)では、Oracle E-Business Suiteリリース12.1と12.2、および以降のRelease Update Pack (RUP)やオフサイクル・パッチで導入された新機能および変更された機能に関する情報を提供します。読者の便益のために、リリース12のRUP (12.0.2から12.0.7を含む)で導入された新機能および変更された機能も含まれています。

このドキュメントで説明する機能および機能拡張は、製品でグループ化されてからリリースでグループ化され、それらが最初に使用可能になります。たとえば、リリース12.1.1です。オフサイクル・パッチでリリースされる機能には、特殊な指定があります。たとえば、12.1.1の後、かつ12.1.2の前にリリースされる機能は、リリース12.1.1+として指定されます。

3. テクノロジ・スタック

3.1. リリース12.2の概要

Oracle E-Business Suiteリリース12.2のテクノロジ・スタックは、データベース層、アプリケーション層およびJavaにOracleとサードパーティのテクノロジを活用しています。

Oracle E-Business Suiteリリース12.2は、Oracle Enterprise Edition 11gリリース2(11.2)およびOracle Enterprise Edition 12c リリース1(12.1)データベース・リリースで動作保証されています。アプリケーション層では、Oracle E-Business Suiteリリース12.2は、Oracle Fusion Middleware 11g リリース1(11.1.1.9)およびJava SE Development Kit (JDK) 7.0で動作保証されています。クライアントでは、Oracle E-Business Suiteリリース12.2は、バージョン6.0、7.0および8.0のJavaプラグインと互換性があります。

注意: WebベースのOracle Application Frameworkアプリケーションを開発する場合、Oracle E-Business Suiteリリース12.2はOracle JDeveloper OA Extensionで必要なバージョンであるOracle JDeveloper 10.1.3で動作保証されています。Oracle JDeveloper OA Extensionによって使用されるテクノロジ・コンポーネントの詳細は、4.1.6.4項を参照してください。

3.2. リリース12.2のテクノロジ・コンポーネント

Oracle E-Business Suiteは、リリース12.2で次の主要なテクノロジ・コンポーネントを使用します。リリース12.1.xの情報も比較のために提供されます。

Oracleテクノロジ	12.1.xの動作保証された最新バージョン(*)	12.2に含まれているバージョン、または必要なバージョン	12.2の動作保証された最新バージョン
Oracle Database 11g	11.2.0.4	11.2.0.3	11.2.0.4
Oracle Database 12c	12.1.0.2	該当なし	12.1.0.2
データベース層のXDK	データベース・バージョンと同じ	データベース・バージョンと同じ	データベース・バージョンと同じ
Oracle Application Server (アプリケーション層のフォームおよびレポート用)	10.1.2.3	10.1.2.3	10.1.2.3
Oracle Application Server / Oracle Fusion Middleware (アプリケーション層のJavaコードおよびOracle Application Framework用)	10.1.3.5	11.1.1.6	11.1.1.9
Oracle Java Required Files (JRF)	該当なし	11.1.1.6	11.1.1.9
アプリケーション層のXDK	10.1.3.5	11.1.1.6	11.1.1.9
Oracle HTTP Server	10.1.3.5	11.1.1.6	11.1.1.9

Oracle WebLogic Server	該当なし	Oracle Fusion Middleware 11g リリース 1(11.1.1.6)のOracle WebLogic Server 10.3.6	Oracle Fusion Middleware 11g リリース 1(11.1.1.9)のOracle WebLogic Server 10.3.6
JSPコンパイラ	OJSP 10.1.3.5	WebLogic JSP Compiler 11.1.1.6 (weblogic.appc)	WebLogic JSP Compiler 11.1.1.9 (weblogic.appc)
JSPエンジン	OJSP 10.1.3.5 (JSP 2.0 仕様に基づく)	WebLogic JSP Engine 11.1.1.6 (weblogic.appc)	WebLogic JSP Engine 11.1.1.9 (weblogic.appc)
Javaテクノロジー	12.1.xの動作保証された最新バージョン(*)	12.2に含まれているバージョン、または必要なバージョン	12.2の動作保証された最新バージョン
Java SE Development Kit - JDK (アプリケーション層のJavaコードおよび Oracle Application Framework用)	7.0	6.0	7.0
Java SE Development Kit - JDK (コンカレント処理層用)	7.0	6.0	7.0
ネイティブなJavaプラグイン (ブラウザで実行されるクライアント側のJava コード用)	8.0	6.0	8.0
APPL_TOPによって配布されるテクノロジー・コンポーネント	12.1.xの動作保証された最新バージョン(*)	12.2に含まれているバージョン、または必要なバージョン	12.2の動作保証された最新バージョン
Oracle JDeveloperランタイム・ライブラリ	10.1.3	10.1.3	10.1.3
Oracle BI Beans	3.1.1.11	3.1.1.11	3.1.1.12
Oracle Thin JDBCドライバ (アプリケーション層のJavaコード用)	11.2	11.2	11.2
外部にインストールされるOracleテクノロジー	12.1.xの動作保証された最新バージョン(*)	12.2によって使用される最小バージョン	12.2の動作保証された最新バージョン
Oracle Internet Directory	11.1.1.9.0	該当なし	11.1.1.9.0
Oracle Unified Directory	該当なし	該当なし	11.1.2.3
Oracle Access Manager	11.1.2.3	該当なし	11.1.2.3
Oracle Business Intelligence Enterprise Edition	11.1.1.7	該当なし	11.1.1.9、12.2.1
Oracle Discoverer	11.1.1.7	該当なし	11.1.1.7

Oracle WebCenter Portal	11.1.1.9	該当なし	11.1.1.9、12.2.1
Oracle Portal	11.1.1.6	該当なし	11.1.1.6
Oracle BPEL Process Manager	11.1.1.9	該当なし	12.1.3、12.2.1
Oracle Enterprise Manager	12.1.0.5	該当なし	13.1.0.0.0

* これらの一部のテクノロジーの実際の動作保証日は、特に特定のプラットフォームではOracle E-Business Suiteのリリースと完全に一致していないことがあります。Oracle E-Business Suiteインスタンスをそのようなテクノロジーの新しいバージョンにアップグレードすることを計画する前に、使用しているプラットフォームでそのテクノロジーが動作保証されて使用可能であることをMy Oracle Supportの「動作保証システム」で参照できる情報で確認してください。

3.3. テクノロジーの構成

3.3.1. 概要

この項では、Oracle E-Business Suiteおよびそのテクノロジー・スタックをインストールおよび構成するために提供されているツールの新機能を示します。パッチ適用および複製の機能拡張についても説明します。

3.3.2. リリース12.0.2 (RUP2)

3.3.2.1. テクノロジー・インベントリ・レポート

この新しいテクノロジー・インベントリ・レポートは、Oracle E-Business Suiteのテクノロジー・スタックに関する標準化された正確なバージョン情報を提供します。Oracle E-Business Suiteの管理者がインストールされているテクノロジーのバージョンを取得する場合、このレポートをコマンドライン・ユーティリティとして実行します。これは管理機能であり、ユーザーの実装、ビジネス・プロセスまたはユーザーの操作に影響しません。

3.3.2.2. OC4Jのロード・バランシング

この新機能は、ロード・バランシングのためにOracle Application Server 10gのネイティブな機能を活用しており、複数のアプリケーション層をサポートするためにユーザーがサードパーティのハードウェアを購入する必要がなくなります。詳細は、My Oracle Supportのドキュメント380489.1を参照してください。これは管理/技術構成機能であり、ユーザーの実装、ビジネス・プロセスまたはユーザーの操作に直接影響しません。

3.3.3. リリース12.0.6 (RUP6)

3.3.3.1. AutoConfigのパフォーマンスの機能拡張

リリース12.1.1で導入されたいくつかの機能は、リリース12.0ラインのリリース12.0.6で使用可能になりました。AutoConfigは、Oracle E-Business Suiteのインストール環境で使用されるテクノロジー・コンポーネントを自動的に構成するユーティリティであり、パフォーマンスが向上するように拡張されました。他の機能拡張には、プロファイラ・モードで実行するオプション、複数のOracle E-Business Suiteノードの並列化、構成チェック・ユーティリティのデータベース構成レポート、Oracle Database 11gのサポート、およびアクセス制御リストのサポートが含まれます。

3.3.4. リリース12.1.1

このリリースではAutoConfig (Oracle E-Business Suiteのインストール環境で使用されるテクノロジー・コンポーネントを自動的に構成するユーティリティ)にいくつかの機能拡張が加えられました。

3.3.4.1. AutoConfigプロファイラ

リリース12.1.1のAutoConfigには、プロファイル・モードで実行するオプションが含まれています。このモードでAutoConfigを実行すると、AutoConfigによって開始および実行された各スクリプトに関するタイミング詳細を含むパフォーマンス・レポートが生成されます。

3.3.4.2. ノード間でのAutoConfigの並列化

リリース12.1.1では、AutoConfigはOracle E-Business Suiteシステムの各ノードで並列で実行できます。これにより、Oracle E-Business SuiteインスタンスのすべてのノードでAutoConfigを実行するために必要な全体的な時間が短縮され、パッチ適用のための停止時間が短くなります。

3.3.4.3. AutoConfigサービス制御の依存関係の管理

テクノロジー・スタック・サービス制御インフラストラクチャは、サーバーでOracleプロセスを開始および停止するスクリプトによって使用されます。リリース12.1.1には、AutoConfigコンテキスト・ファイルに再設計されたサービスおよびサービス・グループの定義が含まれており、同じサービスを異なるサービス・グループに配置でき、新しいサービスの追加が簡単になります。また、サービス・グループ間の依存関係のための追加のサポートが、リリース12.1.1で実装されました。

3.3.4.4. AutoConfig構成チェック・ユーティリティ

リリース12.1.1のテクノロジー・スタック構成チェック・ユーティリティ(adchkcfg)は、AutoConfigを実行する前に、関連するファイル・システムおよびデータベースの変更点を報告するように拡張されました。adchkcfgユーティリティへの機能拡張には、結果のレポート・ドキュメントへのリリース12のルック・アンド・フィールの適用、およびアプリケーション・データベース・プロファイルの相違点レポートの改善が含まれます。

3.3.4.5. Oracle Database 11gでのAutoConfigのサポート

リリース12.1.1では、AutoConfigはOracle 11gデータベースで実行および構成できるように拡張されました。これは、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.1でOracle Database 11gを使用する新しいユーザーおよびアップグレードしたユーザーの役に立ちます。

3.3.4.6. プラットフォーム間での移行のためのコンテキストXML作成ユーティリティ

リリース12.1.1では、新しいadblxml AutoConfigユーティリティを使用して、データベース層に新しいコンテキスト・ファイルを作成できます。このユーティリティによって、データベースのアップグレードおよびプラットフォーム間の移行が容易になり、簡略化されます。

3.3.4.7. AutoConfig検索ユーティリティ

新しいAutoConfig検索ユーティリティは、コマンドラインから実行され、コンテキスト変数およびそれらを使用するテンプレートに関する詳細情報を取得するために使用できます。このユーティリティは、すべてまたは一部のコンテキスト変数名を受け取り、一致したコンテキスト変数に関する詳細な情報を含むレポートを生成します。

3.3.4.8. テクノロジ・スタック・インベントリ検証レポート

リリース12.1.1には、Oracle E-Business Suiteリリース12.1のテクノロジ・スタックに使用するテクノロジ・スタック・インベントリ検証ユーティリティが含まれています(Oracle E-Business Suiteリリース11iのテクノロジ・スタック検証ユーティリティと似ています)。このレポートを使用すると、管理者はインストールされている様々なテクノロジ・コンポーネント、パッチ・セットおよび個別のパッチのバージョンを確認できます。

3.3.4.9. 拡張されたアプリケーション層ファイル・システムの共有のサポート

この機能を使用すると、複数のOracle E-Business Suiteインスタンス(たとえば、PRODとPROD_BACKUP、またはTESTとDEV)でアプリケーション層ファイル・システムを共有できます。これにより、そのようなインスタンスが常に同じパッチ・レベルにあり、パッチ適用の停止時間が短縮され、保守が簡略化されることが保証されます。共有できるのは、アプリケーション層のファイル・システムのみです。データベース層のファイル・システムは共有できません。詳細は、My Oracle Supportの[ドキュメント384248.1](#)「Sharing the Application Tier File System in Oracle E-Business Suite Release 12.」の付録Bを参照してください。

3.3.4.10. 拡張されたアプリケーション層のロード・バランシングのサポート

この機能は、主要なロード・バランシング・カテゴリ(DNS、OC4Jネイティブ、HTTP層(ハードウェア/ソフトウェア))の構成のサポートを提供します。詳細は、My Oracle Supportの[ドキュメント380489.1](#)「Using Load-Balancers with Oracle E-Business Suite Release 12」を参照してください。

3.3.4.11. 拡張されたDMZ配置のサポート

リリース12.1.1では、Oracle E-Business SuiteをDMZ (De-Militarized Zones)で使用するためのサポートが拡張されています。詳細は、My Oracle Supportの[ドキュメント380490.1](#)「Oracle E-Business Suite R12 Configuration in a DMZ」を参照してください。

3.3.4.12. ネットワーク・トラフィック暗号化機能

この機能は、SSLを使用した主要な通信ルートを保護するためのAutoConfigのサポートを提供します。これらのルートとしては、デスクトップのブラウザからWebサーバー(HTTPS)、WebサーバーからJVM (AJPS)、JVMおよび他のOracle E-Business Suite/テクノロジ・プロセスからデータベース(拡張セキュリティ/暗号化SQL*Net)があります。詳細は、My Oracle Supportの[ドキュメント376700.1](#)「Enabling SSL in Oracle Applications Release 12.」を参照してください。

3.3.4.13. 拡張構成ウィザード

これらのウィザードは、管理者が拡張構成の変更を一貫性を持って簡単に実行できるように設計された一連のコマンドライン・ユーティリティおよびOracle Application Manager (OAM)ページで構成されます。

そのような拡張構成の例には、DNSロード・バランシング、OC4Jロード・バランシング、HTTPロード・バランシング、WebサーバーでのSSLのセットアップ、SSLアクセラレータのセットアップ、およびフォーム・ソケット・モードの有効化と無効化が含まれます。詳細は、My Oracle Supportを参照してください。

3.3.4.14. Oracle Connection Managerテクノロジの統合

リリース12.1.1には、Oracle E-Business Suiteリリース12でのOracle Connection Managerに対するAutoConfigのサポートが含まれています。Oracle Connection Managerは、プロキシ・サーバーと

して動作する軽量で拡張性の高いプログラムであり、接続要求をデータベース・サーバーまたは他のプロキシ・サーバーに転送します。詳細は、My Oracle Supportの[ドキュメント558959.1](#)「*Configuring Oracle Connection Manager with Oracle E-Business Suite Release 12*」を参照してください。

3.3.4.15. 統合SOAゲートウェイのサポート

リリース12.1.1は、サービス指向アーキテクチャ(SOA)の原則に基づいた同時使用可能な標準化されたWebサービス・プラットフォームである統合SOAゲートウェイ(ISG)をサポートしています。インストールおよびアップグレードの詳細は、My Oracle Supportの[ドキュメント556540.1](#)「*Oracle E-Business Suite Integrated SOA Gateway Release Notes, Release 12.1.1*」を参照してください。

3.3.5. リリース12.1.3

3.3.5.1. AutoConfigのパフォーマンスの改善

製品内で実行されるジョブの並列化を実装することによって、AutoConfigのパフォーマンスが大幅に向上しました。また、最も長く実行されるスクリプトが変更され、実行のパフォーマンスが大幅に向上しました。

3.3.5.2. 11g SCANリスナー機能でのAutoConfigのサポート

この機能を使用すると、ユーザーは、tns/dbcファイルを手動で変更することなく、Oracle Database 11g リリース2のSCANリスナー機能を活用できます。

3.3.5.3. Forms earファイルの自動配置

以前は、10.1.2のOracleホームでforms earファイルにパッチ適用した場合、ユーザーは10.1.3のOracleホームに手動で再配置する必要がありました。リリース12.1.3では、このプロセスは自動化され、廃止されたFormsの実行可能ファイルが原因であるFormsの実行の問題が発生しなくなりました。

3.3.6. リリース12.2

3.3.6.1. インストール

リリース12.2のインストール処理は、以前のリリースと比べて大幅に拡張されました。これらの機能拡張には、アプリケーション層ノード・サービスのプロビジョニング、Oracle DatabaseおよびOracle Fusion Middlewareのネイティブなインストール・ツールを使用したこれらのテクノロジー・スタック・コンポーネントのインストールおよび構成、Oracle E-Business Suiteと既存のOracle Database 11g リリース2ホームおよびOracle Fusion Middleware 11g リリース1ホームの統合のサポートが含まれます。また、Rapid InstallではGrid Infrastructure (Oracle RAC/ASM)環境へのOracle E-Business Suiteのインストールがサポートされるようになりました。

3.3.6.2. オンライン・パッチ適用

リリース12.2の主な機能の1つは、オンライン・パッチ適用への切替えです。これは、Oracle Database 11g リリース11.2.0.2の機能であるエディションベースの再定義を使用し、従来、パッチ適用および関連する保守アクティビティに必要であった停止時間が大幅に短縮されます。

エディションは、データベース・オブジェクトを再定義できるプライベート環境です。オンライン・パッチ適用では、ユーザーは元のエディションに対して作業しますが、パッチは分離されたエ

ディクショに適用されます。結果として、システムはパッチ・エディションが新しい本番エディションとなるように切り替えられます。リリース12.2にアップグレードすると、以降のすべてのパッチおよびメンテナンス・パックはオンラインで適用され、新しい機能をアクティブにするための切替え期間が短くなります。

3.3.6.3. 複製

リリース12.2では、複製処理(たとえば、ノード数を増やすためにシステムをスケールアップする場合)が簡略化および拡張されています。また、Oracle E-Business SuiteのFusion Middlewareコンポーネントを複製するためのサポートが提供されるようになりました。

3.3.6.4. アプリケーション層

Oracle E-Business Suiteテクノロジ・スタックへの重要な変更点は、Oracle HTTP Serverコンポーネントに関連したOracle Fusion MiddlewareのOracle WebLogic Serverコンポーネントの採用です。対応する変更が、様々なアプリケーション層サービスに対して行われました。

また、Oracle E-Business Suiteリリース12.2にはアプリケーション層のための2番目のファイル・システムがあります。2番目のファイル・システムはOracle E-Business Suiteパッチのオンライン・パッチ適用機能を促進し、パッチ適用のための中断を最小にするためのOracleテクノロジのベスト・プラクティスの推奨に従っています。

3.3.6.5. 外部統合

リリース12.2には、アプリケーション層の新しいテクノロジ・スタック・コンポーネントを使用してOracle WebCenter PortalおよびOracle BPEL Process Managerとの統合をサポートするための機能拡張が含まれています。

また、Oracle Application FrameworkはAutoVue文書印刷サービスと統合されるようになりました。詳細は、4.1.6.2項を参照してください。

3.3.6.6. セキュアな構成のための診断

リリース12.2では、Oracle E-Business Suiteシステムが適切に保護されていることを確認するために提供されているテストが拡張されました。これらのテストが正常に実行されると、様々なアカウント、プロファイル、パラメータおよび構成の設定がセキュリティのためのOracleのベスト・プラクティスの推奨に従ってセットアップされていることが検証されます。

3.3.6.7. WLSデータソース接続プール

AOL/J接続プールの実装は、WLSデータソース接続プールの実装に置き換えられました。

3.3.6.8. 64ビットのJavaのサポート

Oracle E-Business Suiteは、Javaの64ビット実装をサポートするようになりました。64ビット実装は、32ビット実装よりも大量のデータをよりよく処理できます。

3.3.7. リリース12.2.5

3.3.7.1. 管理対象サーバー情報の簡略化された構成

コンテキスト変数の`s_<servicetype>_nodes`クラス(`s_oacore_nodes`など)は、構成管理で使用されなくなりました。以前は、これらのコンテキスト変数には、すべてのアプリケーション層ノードにおける特定のタイプのすべての管理対象サーバーのホスト値およびポート値が含まれていました。これらの変数は`txkSetAppsConf.pl`スクリプトによって使用され、Oracle HTTP Serverの構成ファイル`mod_wl_ohs.conf`および`apps.conf`が管理対象サーバーの情報で更新されました。

これらのコンテキスト変数を使用するかわりに、新しい管理対象サーバーまたはノードを追加または削除するときに、管理対象サーバーのホスト値およびポート値のリストをそれぞれ`addMS`オプションまたは`removeMS`オプションを付けて`txkSetAppsConf.pl`スクリプトに明示的に渡します。この機能拡張を使用すると、管理対象サーバーまたはノードを追加または削除した後に、`AutoConfig`を実行して各アプリケーション層の変数値を同期する必要がなくなります。また、DMZなどのより複雑なシナリオでノードまたは管理対象サーバーをグループ化するために、`mod_wl_ohs.conf`ファイルおよび`apps.conf`ファイルを手動で編集する必要がなくなります。

3.3.7.2. EBSインストール・セントラル・インベントリ

UNIXプラットフォームのアプリケーション層で、インスタンス固有のEBSインストール・セントラル・インベントリを必要に応じて使用できます。このセントラル・インベントリは、同じホストに複数のOracle E-Business Suiteのインストール環境がある場合に役に立ちます。

3.3.7.3. Oracle WebLogic Serverの管理ユーザー・パスワードを変更するための簡略化されたメカニズム

Oracle WebLogic Serverの管理ユーザー・パスワードの変更を使用される方法が、以前は手動で行われていた手順を実行する新しいユーティリティを導入することによって簡略化され、大幅に自動化されました。

3.3.7.4. 中間層Oracle E-Business Suiteテクノロジーのコードレベル・チェッカ

新しい中間層Oracle E-Business Suiteテクノロジーのコードレベル・チェッカ(MT-ETCC)スクリプトは、データベース層のための元のETCCスクリプト(DB-ETCCと呼ばれるようになりました)を補完しています。MT-ETCCスクリプトおよびDB-ETCCスクリプトは、欠落している中間層、およびリリース12.2で必要なデータベース層のバグ・フィックスとパッチをそれぞれ報告します。

3.3.7.5. Oracle Unified Directoryとの外部統合

リリース12.2には、Oracle Internet Directoryの代替としてOracle Unified Directoryとの統合をサポートするための機能拡張が含まれています。Oracle Unified Directoryは、包括的な次世代のディレクトリ・サービスであり、大規模な配置への対応、高パフォーマンス、高度な拡張性、簡単な配置、管理および監視を実現するために設計されています。これには、データの格納に使用されるLDAPディレクトリ・サーバー、データが含まれているディレクトリ・サーバーとクライアントのインタフェースとして機能するプロキシ・サーバー、およびOracle Unified DirectoryとOracle Directory Server Enterprise Editionの間のレプリケーション・ゲートウェイが含まれます。

3.4. 国際化

3.4.1. リリース12.1.1

3.4.1.1. Hijrahカレンダーおよびタイ仏暦のサポート

この機能拡張により、すべてのOracle Formsベースの製品にHijrahカレンダーおよびタイ仏暦のサポートが追加されます。このサポートは出力(表示)形式としてのみ追加されます。内部日付オブジェクトの表現はグレゴリオ暦のままです。ユーザーは、プロファイル・オプションを設定することによって、優先されるカレンダーを選択できます。コンカレント処理および付加フレックスフィールドも、ユーザー作業環境に基づくカレンダーでの日付の表示をサポートしています。

3.4.1.2. コンカレント処理での複数言語/各国語サポート(MLS/NLS)の機能拡張

次の機能拡張は、MLS/NLSの領域に対して行われています。

- 言語に加えて他のNLSパラメータ(地域、数字およびロケール)を返すようにMLS関数を拡張
- 要求セットの定義時にNLSオプションを指定するように拡張
- Oracle Application Framework UIでNLSオプション(言語、地域、数字)を指定できる

3.4.2. リリース12.1.2

Oracle E-Business Suiteリリース12.1.2では、リトアニア語、インドネシア語およびウクライナ語がサポートされる言語のリストに追加されました。スペースおよび単一引用符の数字グループ区切り文字も、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.2でサポートされます。ユーザーは、プロファイル・オプションを使用して週の最初の日を選択することもできます。Oracle E-Business Suiteリリース12.1.2のガント・チャート機能およびインライン日付ピッカー機能では、タイ・カレンダーおよびHijrahカレンダーがサポートされます。

3.4.2.1. リトアニア語、インドネシア語およびウクライナ語のサポート

リトアニア語、インドネシア語およびウクライナ語は、Oracle E-Business Suiteでサポートされるようになりました。

3.4.2.2. 数字グループ区切り文字としてのスペースおよび単一引用符のサポート

小数点(ドット)およびカンマに加えて、Oracle E-Business Suiteでは、スペースおよび単一引用符文字を数字グループの区切り文字としてサポートするようになりました。ユーザーは、「作業環境」ページの「数値書式」フィールドの値リストからこれらの新しい区切り文字を選択できます。

3.4.2.3. 週の最初の日をサポート

週の最初の日が日曜日ではない国のユーザーは、優先される週の最初の日を選択できるようになりました。日付ピッカーにはこの選択が反映されます。

3.4.2.4. ガント・チャートおよびインライン(埋込み)日付ピッカーでのタイ・カレンダーおよびHijrahカレンダーのサポート

タイ・カレンダーおよびHijrahカレンダーのサポートが拡張されました。Oracle Workflow通知でのタイ・カレンダーおよびHijrahカレンダーのすべての既知の問題が対処され、ユーザー・インタフェースおよびOracle XML Publisherレポートのガント・チャートでHijrahカレンダーおよびタイ・カレンダーが

サポートされるようになりました。また、ユーザー・インタフェースのインライン(埋込み)日付ピッカーは、Hijrahカレンダーおよびタイ・カレンダーをサポートするようになりました。

3.4.3. リリース12.1.3

このリリースでは、Oracle E-Business Suiteの多言語サポート(MLS)が改善されました。新しい Lightweight MLS機能を使用すると、グローバル・ユーザーは、対応するNLSパッチを適用することなく、新しい言語を有効にできるようになりました。Oracle iSetup MLSは、異なる言語でインストールされたソース・システムおよびターゲット・システム間で言語データを移動できるように改善されました。Oracle Application Frameworkエクスポート機能では、Unicodeサポートが改善されました。また、Oracle Application Frameworkの新しいリッチUI機能には、双方向言語(アラビア語およびヘブライ語)のサポートがあります。

3.4.3.1. Oracle iSetup MLS

リリース12.1.3以降では、Oracle iSetup MLSは異なる言語がインストールされたシステム間でデータを移動する機能の柔軟性が高くなりました。ユーザーは、構成されているすべての言語のデータをソース・システムからターゲット・システムに一度に移動することを選択できます。または、インストールされている1つの言語のデータ、またはインストールされている言語のサブセットのデータをソースからターゲットに移動することを選択できます。

3.4.3.2. Lightweight MLS

Lightweight MLS機能(リリース12.1.3の新機能)を使用すると、対応するNLSパッチを適用することなく、追加の言語を有効にできます。以前のリリースでは、追加の言語を使用する前に、関連するNLSパッチを適用する必要がありました。

Lightweight MLSを使用すると、同じシステムでOracle E-Business Suiteを複数の言語で実行でき、各ユーザーが使用する様々な言語を使用できます。そのようなシステムでは、フル翻訳(NLSパッチを適用)の言語および翻訳なしの言語(NLSパッチを適用しないLightweight MLS)の混在が同時にサポートされます。

Lightweight MLS機能では、英語のユーザー・インタフェースを使用して言語データ(たとえば、セットアップ・データ、または項目や項目の説明などの顧客データ)を入力および保守する機能が提供されます。また、ユーザーはカスタムのレポートまたはテンプレートをセットアップし、言語データを使用した言語レポートを生成できます。関連する言語のNLSパッチを適用することによって、フル翻訳にいつでも移行できます。

3.4.3.3. Oracle Application Frameworkでの改善されたMLSエクスポート機能

Oracle E-Business Suiteでの複数言語サポート(MLS)の改善という課題に対する対応が継続され、Oracle Application Frameworkのエクスポート機能はユーザーがエクスポート・ファイルに UnicodeLittleエンコードまたはUTF-8エンコードを選択できるように改善されました。エクスポートされた各値の間の区切り文字としてカンマまたはタブを選択することもできます。

この柔軟性により、ユーザーは古いリリースのMicrosoft Excelの制限(UTF-8のサポートの欠如、Unicodeのカンマ区切り値を含むファイルの処理の不良など)に対処できます。

3.4.3.4. Oracle Application FrameworkでのリッチUI双方向サポート

12.1.2でリリースされた新しいリッチUIコンポーネントでは、アラビア語、ヘブライ語などの双方向言語がサポートされるようになりました。

3.4.3.5. セルビア語のサポート

セルビア語はOracle E-Business Suiteでサポートされます。この言語はリリース12.1ラインのリリース12.1.3で使用可能になりました。

3.4.4. リリース12.2

3.4.4.1. Lightweight MLSの拡張されたサポート

リリース12.1.3で導入されたLightweight MLS機能を使用すると、対応するNLSパッチを適用することなく、追加の言語を有効にできます。リリース12.2では、フルNLSモードがすでに有効にされた言語から軽量モードに移行するためのサポートが追加されました。

3.4.4.2. 言語ソートのサポート

言語ソート(ソート・テキスト文字列への言語固有の規則の適用)は、オンラインUIでバイナリ・ソートに加えてサポートされます。

3.4.4.3. 文字日付の各国カレンダーのサポートの機能拡張

文字タイプの日付の各国カレンダーのサポートが、リリース12.2で改善されました。カレンダー日付ルーチンFND_DATEパッケージおよびAPP_DATEパッケージでの各国カレンダーのサポートが有効になりました。

3.4.4.4. 拡張された数字スペルのサポート

Oracle E-Business Suiteでは、数字スペル(文字への数字の書換え)のサポートがサポートされるすべての言語に拡張されました。

3.4.4.5. Oracle Databaseのすべての地域のサポート

リリース12.2では、Oracle E-Business SuiteはOracle Databaseでサポートされるすべての地域をサポートします。

3.4.4.6. セルビア語のサポート

セルビア語はOracle E-Business Suiteリリース12.2でサポートされます。

3.4.4.7. Forms UIエクスポート機能の機能拡張

Oracle Forms UIエクスポート機能は、カンマ区切り値(CSV)ファイル形式のサポート、および改善されたUnicodeキャラクタ・セットのサポート機能が含まれるように拡張されました。

3.4.4.8. Oracle WorkflowのEメールの文字エンコードの構成

ワークフロー管理者は、各言語のワークフロー通知で使用する文字エンコードを必要に応じて指定できるようになりました。この機能を使用すると、通知コンテンツを正常に表示するために別のキャラクタ・エンコードが必要な場合に、通知受信者のNLS作業環境で指定されている文字エンコーディング、およびデータベースの文字エンコーディングの両方をオーバーライドできます。文字エンコードの指定を構成するには、Oracle Workflowの管理者Webページの「管理」タブを使用します。

3.4.4.9. Oracle Diagnosticsの国際化のための機能拡張

Oracle Diagnostics製品は、国際化機能に影響するいくつかの領域(バイト・ストリームへの文字列変換、エンド・ユーザーに表示される文字列、データ文字列の解析を含む)で改善されました。

3.4.4.10. Oracle Diagnosticsの国際化テスト

Oracle E-Business Suiteインスタンスから国際化構成情報を収集して問題のトラブルシューティングに役立てるために、新しい診断テストが提供されています。

3.4.4.11. 国際化ライブラリのバージョンの表示のサポート

この機能は、サイトで使用されている国際化ライブラリのバージョンを識別するための機能を提供します。この機能拡張により、各ファイルのバージョンを個別に確認する必要がなくなりました。この機能はOracle Supportで特に役に立ちます。

3.4.5. リリース12.2.5

3.4.5.1. 軽量のみの言語サポート

この機能を使用すると、翻訳またはNLSパッチを提供することなく、Oracle E-Business Suiteで追加の言語をサポートできます。言語の軽量のみの言語サポートを使用すると、ユーザーは英語のUIを使用して対象の言語のデータを入力し、その言語のレポートを生成できます。追加の制限(Oracle Business Intelligence Publisherの言語サポートの制限など)が適用されることがあります。

次の13言語は、軽量モードでのみサポートされるようになりました。

- アムハラ語
- アルメニア語
- アゼルバイジャン語
- 英語(イギリス)
- エストニア語
- ボスニア語(ラテン)
- ウズベク語(ラテン)
- ラトビア語
- マケドニア語

- マレー語
- マルタ語
- スペイン語(メキシコ)
- スワヒリ語

これらの13言語には翻訳は提供されておらず、これらの言語ではフル翻訳モードへの移行はサポートされていません。

これらの追加により、Oracle E-Business Suiteでは合計55言語がサポートされるようになりました。

3.4.5.2. 言語ソートでのコンカレント・プログラムのサポート

言語ソート(ソート・テキスト文字列への言語固有のルールの適用)がOracle FormsおよびOracle Application Frameworkの標準要求発行のコンカレント・プログラムで使用できるようになりました。

3.4.5.3. Oracle iSetupの国際化のための機能拡張

このリリースでは、Oracle iSetupには一般ローダー(FNDLOAD)およびOracle XML Publisherデータに関する次の機能拡張が含まれています。

- 一般ローダーAPI - Oracle iSetupは英語のデータに加えて翻訳データをアップロードできるようになりました。言語データは、自動言語検出(暗黙的)、またはUIからのアップロード・パラメータの入力(明示的)によってアップロードできます。
- XML Publisher API - Oracle iSetupはMLS (翻訳可能)テンプレート・ファイルおよびローカライズされたテンプレート・ファイルを移動できるようになりました。

3.4.5.4. Oracle Report Managerの国際化のための機能拡張

このリリースでは、Oracle Report Managerには、財務諸表生成プログラム(FSG)レポートのローケル処理のための次の機能拡張が含まれています。

- 財務レポート・テンプレート・エディタの言語の値リストには、Oracle E-Business Suiteインスタンスにインストールされている言語およびベース言語のみが表示されるようになりました。
- 複数の地域に関連付けられているインストールされた言語を選択した場合、財務レポート・テンプレート・エディタはその言語とデフォルトの地域の組合せに加えて、追加の言語と地域の組合せのテンプレートを登録するようになりました。
- FSGレポートを発行する場合、テンプレートの値リストには、セッション言語およびセッション地域の組合せに登録されているテンプレートが表示されます。
- 別の言語の既存のテンプレートと同じ名前を使用して言語のテンプレートを作成しようとすると、財務レポート・テンプレート・エディタは別の言語に関連付けられているテンプレートに同じ名前を再使用することはできないことを示すエラー・メッセージを表示します。
- Oracle Report Managerは、レポートを表示しているユーザーのセッション言語がレポートが発行されたセッション言語と異なる場合でも、FSGレポートを表示できるようになりました。

3.4.6. リリース12.2.6

3.4.6.1. 改善された言語判別

この機能によって、Oracle E-Business Suiteセッションで使用される言語を判別する言語ルールを構成するための柔軟性が高くなります。新しい言語ルールが導入され、これには言語ソースのカンマ区切りのリストが含まれており、使用する言語を判別するための優先順位を設定します。このオプションは、FND_SESSION_MANAGEMENT APIのsetLanguageRuleおよびsameLanguageRuleForAllを使用して設定できます。使用可能な言語ソースを次に示します。

- **PROFILE:** ICX_LANGUAGE プロファイル・オプションの値(ユーザー・レベル値(見つかった場合)、あるいはサーバーまたはサイト値)を使用します。
- **BASE:** BASE 言語を明示的に強制します。
- **BROWSER:** ブラウザの優先言語のリストから、Oracle E-Business Suite にインストールされている最初の言語を使用します。
- **SESSION:** USER セッションまたは GUEST セッションの現在のセッション言語を使用します。
- **USER_SESSION:** 現在のセッション言語を使用します(ユーザーが GUEST の場合を除く)。
- **DISPLAY:** ログイン・ページに表示される言語を使用します。
- **LANG_PARAMETER:** URL パラメータ langCode または lang_code の値を使用します。

たとえば、言語ルールに「SESSION, DISPLAY, PROFILE」を設定できます。デフォルトの言語ルールは、
「DISPLAY,USER_SESSION,LANG_PARAMETER,BROWSER,PROFILE,SESSION,BASE」
です。

3.4.6.2. フル・モードの言語のみのためのTranslation Synchronization patchの マニフェスト・ファイル

Translation Synchronization patch (TSP)機能を使用すると、既存の翻訳を英語(米国)のファイル・バージョンと同期するか、インスタンスに新しい言語をインストールできます。リリース12.2.6では、(adgennls.plを実行することによって) TSPマニフェスト・ファイルを生成した場合、翻訳モードがフルの言語のみのNLSパッチ要求に含まれます。

3.4.6.3. Lightweight MLSのためのOracle Applications Managerのライセンス

Oracle Applications Managerのライセンス・マネージャ機能を使用すると、管理者は軽量モードまたはフル・モードで言語をライセンスできるようになりました(両方のモードが使用可能な場合)。Lightweight MLSのみとしてサポートされる言語は、アスタリスク付きで示され、翻訳モードはグレー表示となり、変更できないことが示されます。また、軽量言語のリストが言語レポート・ページに追加されました。

3.4.6.4. Oracle iSetupでの言語データの合理化された移行

この機能拡張は、一般ローダーLDT形式およびワークフロー定義ローダーWFT形式の言語セットアップ・データを2つのシステム間で移動する処理を合理化します。以前は、複数の言語がインストールされている複数言語のOracle E-Business Suiteインスタンスでは、言語セットアップ・データを別のシステムにLDT形式またはWFT形式で移動するには、一度に1つの言語を抽出してロードする必要がありました。リリース12.2.6では、複数の言語を一度に抽出およびロードしたり、複数言語のレポートを一度に作成したりできます。

3.4.6.5. Oracle Web Applications Desktop Integratorの国際化のための機能拡張

このリリースでは、Oracle Web Applications Desktop Integratorに次の機能拡張が含まれています。

- ASCII以外のファイル名のサポート
- 翻訳されたシート名、およびOOXMLスプレッドシートのASCII以外の文字を使用したシート名のサポート
- スプレッドシートを作成するために使用された言語でオフライン・スプレッドシートにアクセスする機能

4. アプリケーション・テクノロジー

Oracle E-Business Suiteリリース12.2のアプリケーション・テクノロジーの主要な重点領域は次のとおりです。

- **よりよいビジネス・インサイト:** エンド・ユーザーの生産性の向上、およびビジネス・インサイトに重点を置いています。
- **適応可能なビジネス・プロセス:** 統合リポジトリに収容されている一連の完全なWebサービス、およびOracle E-Business Suiteへの関連するFusion Middleware SOAコンポーネントのすぐに使える埋込みによって、リリース12.2が真のアジャイル・アプリケーション・ビジネス・プラットフォームとなり、アプリケーション統合アーキテクチャ(AIA)が有効になります。
- **優れた所有体験:** いくつかの主要な機能拡張により、Oracle E-Business Suiteのお客様の所有体験が向上しています。

4.1. Oracle Application Framework

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.1.1. リリース12.0.3 (RUP3)

4.1.1.1. 管理者のパーソナライズのためのHGridのレコード・セット・サイズの公開

HGridは、管理者パーソナライズのために各個別ノードのレコード・セット・サイズ・プロパティを公開するようになりました。顧客サイトの管理者は、各HGridノードに異なるレコード・セット・サイズ値を設定して、ノードごとに異なるレコード数/行数を表示できるようになりました。これにより、「全て拡張」オプションが使用されている場合でも、すべての行が同時に表示されることがなく、ユーザーへの応答時間が改善されます。

4.1.2. リリース12.0.6 (RUP6)

4.1.2.1. レコード履歴

この機能は、リリース12.1.1で導入され、リリース12.0ラインのリリース12.0.6で使用可能になりました。レコード履歴は、Oracle Application Frameworkベースのページでできるようになりました。レコード履歴を使用すると、ユーザーは特定のレコードに関するデータ(レコードの作成者と作成日、レコードの最終更新者と最終更新日など)を表示できます。

4.1.2.2. フレックスフィールド参照フィールド

この機能は、リリース12.1.1で導入され、リリース12.0ラインのリリース12.0.6で使用可能になりました。参照フィールドは、Oracle Application Frameworkベースのアプリケーションでできるようになりました。参照フィールドは、フレックスフィールドのセグメントのプロパティを導出するために値が使用されるフィールドです。

Oracle Application Frameworkページの参照フィールドは、フレックスフィールドの1つ以上のプロパティ(デフォルト・セグメント値、値セット、付加フレックスフィールドのコンテキスト参照フィールドなど)を評価するために使用されるWeb Beanです。参照Web Beanの値が変更されると、対応するフレックスフィールドのプロパティへの変更でページがリフレッシュされます。

4.1.3. リリース12.1.1

4.1.3.1. レコード履歴

レコード履歴は、Oracle Application Frameworkベースのページで使えるようになりました。レコード履歴を使用すると、ユーザーは特定のレコードに関するデータ(レコードの作成者と作成日、レコードの最終更新者と最終更新日など)を表示できます。

4.1.3.2. 添付のバルク・アップロード

ユーザーが数千個のドキュメントすべてを1回の操作でOracle E-Business Suiteデータベースに添付としてロードする場合があります。Oracle Application Frameworkは、添付機能のためのAPIおよびWebサービスを提供するようになり、既存のレコードへの添付を作成するためにファイルをバルク・アップロードできます。

4.1.3.3. ホーム・ページのお気に入りリンクで新しいウィンドウを開く

エンド・ユーザーは、Oracle E-Business SuiteでOracle E-Business Suiteの外部のWebサイトへのリンクとしてお気に入りを定義できます。ユーザーは、そのようなURLをセットアップしてそれらのリンクが新しいブラウザ・ウィンドウを開くように指定し、元のブラウザ・ウィンドウにOracle E-Business Suiteセッションを表示したままにできるようになりました。

4.1.3.4. JavaのBigDecimalデータ型のサポート

JavaのBigDecimalデータ型のサポートにより、Oracle E-Business Suiteで非常に大きい数値および非常に小さい数値を処理できます。Oracle Application Extensionの設計時インタフェースを使用すると、新しいWeb BeanをBigDecimalデータ型に関連付けることができます。実行時パーソナライズUIを使用すると、ユーザーはBigDecimalデータ型を使用するようにNumberデータ型の項目を変更できます。

4.1.3.5. 拡張された検索リージョンのパーソナライズ

検索(問合せ)リージョンは、アップグレードしても維持される追加のパーソナライズを行うことができるように拡張されました。管理者は検索リージョンの「検索の保存」ボタンをパーソナライズできるようになりました。検索マッピングは、検索結果表の列に対応する検索基準フィールドを追加するためにパーソナライズできるようになりました。さらに、パーソナライズでは追加の属性(HGrid、問合せ、テキスト入力)をパーソナライズするためのサポートが提供されるようになりました。

4.1.3.6. アプリケーション層でのデータ・ソート

Oracle Application Frameworkは、特定のケースでのソート・パフォーマンスを改善するために、データベースではなくアプリケーション層の表データのソートをサポートするようになりました。Oracle Application Frameworkでは、挿入可能な表や更新可能な表、および一時的なデータを持つ表をソートできるようになりました。製品では、表にプロパティを設定することによって、設計時にこの機能を有効にできます。ユーザーは、パーソナライズを使用してプロパティを設定することによって、実行時にこの機能を有効にできます。

4.1.3.7. 添付のウィルス・スキャンのサポート

この機能は、OAフレームワークの添付のウィルス・スキャンに対するそのまま使えるサポートを提供します。この機能は、ユーザーのドキュメント保護のニーズに対処しています。現在、Symantecのアンチウィルス・ソフトウェアのみがサポートされています。

4.1.3.8. フレックスフィールド参照フィールド

参照フィールドは、Oracle Application Frameworkベースのアプリケーションで使えるようになりました。参照フィールドは、フレックスフィールドのセグメントのプロパティを導出するために値が使用されるフィールドです。Oracle Application Frameworkページの参照フィールドは、フレックスフィールドの1つ以上のプロパティ(デフォルト・セグメント値、値セット、付加フレックスフィールドのコンテキスト参照フィールドなど)を評価するために使用されるWeb Beanです。参照Web Beanの値が変更されると、対応するフレックスフィールドのプロパティへの変更でページがリフレッシュされます。

この機能は、既存のフレックスフィールドのパーソナライズ管理を使用して、顧客サイトで有効にできます。

4.1.3.9. Hijrahカレンダーおよびタイ仏暦のサポート

この機能拡張により、すべてのOAFベースの製品にHijrahカレンダーおよびタイ仏暦のサポートが追加されます。このサポートは出力(表示)形式としてのみ追加されます。内部日付オブジェクトの表現はグレゴリオ暦のままです。ユーザーは、プロフィール・オプションを設定することによって、優先されるカレンダーを選択できます。

4.1.4. リリース12.1.2

Oracle Application Frameworkリリース12.1.2の主な重点は、操作性を拡張し、全体的なユーザー・エクスペリエンスを向上させることにあります。リッチ・ユーザー・インタラクションの操作性の改善は、Oracle Application Frameworkのコア・コンポーネントへの機能拡張によって実現されました。Oracle Business Intelligence Enterprise Edition (OBIEE)などのアプリケーションとのシームレスな統合によって、ユーザー・エクスペリエンスが向上しました。OBIEEは、Oracle Application Frameworkベースのアプリケーションから状況に応じた分析情報へのインサイトを提供します。これらの機能拡張は、大部分がOracle Application Frameworkパーソナライゼーション・ユーザー・インタフェースを介して実現されています。

4.1.4.1. ユーザー・インタフェースの機能拡張

Oracle Application Frameworkの操作性の機能拡張には、再設計されたホーム・ページ、グローバル・ヘッダー領域の新しいナビゲータおよびお気に入りのプルダウン・メニュー、値リストの先読み機能、添付をインラインに追加、編集、削除する機能、および新しいポップアップ・コンポーネントとポートレット・ジェネレータが含まれます。

再設計されたホーム・ページでは、ナビゲータに新しいフォルダ状の構造があり、ワークリストのスペーシングがより適切になり、お気に入りのグローバル・ヘッダー領域のプルダウン・メニューに移動されました。新しいホーム・ページは、よりコンパクトであり、ホーム・ページにカスタム・コンテンツを簡単に拡張および追加できます。

ナビゲータ・メニューは、すべてのOracle Application Frameworkページでプルダウン・リンクとして表示されます。この機能を使用すると、アプリケーション間のナビゲーションが簡単に迅速になります。「お気に入り」プルダウンは、現在のページを「お気に入り」ページとしてマークする新しい機能を提供します。

値リストの先読み機能を使用すると、文字を何文字か入力する(通常、少なくとも3文字)と表示されるインライン・ウィンドウからフィールド値を選択できます。インライン・ウィンドウには、入力した文字に一致するすべての結果が表示されます。この機能を使用すると、値リスト・ウィンドウを開く必要性を減らすことによって、値の選択に必要な時間が短縮されます。

インライン添付機能は、Oracle Application Frameworkアプリケーションで添付を追加または表示するために使用するアイコンおよびボタンによってユーザー操作を拡張します。新しいマウスオーバー操作がこれらのアイコンおよびボタンに導入され、ユーザーは同じページのビジネス・エンティティにベース・エンティティとして添付を追加、編集、削除および表示できます。この機能によって、「添付の追加」および「添付の表示」ページにナビゲートする必要がなくなります。

Oracle Application Frameworkのポップアップ・コンポーネントを使用すると、アプリケーションはOracle Application Frameworkページでポップアップ・ウィンドウとしてコンテンツを表示できます。このポップアップ機能を使用することによって、詳細にドリルダウンする操作を最小限にすることができます。

4.1.4.2. Oracle E-Business Suite Business Intelligence (OBIEE)の統合

Oracle Application Frameworkでは、埋込みOBIEEコンテンツを保持できるリッチ・コンテナと呼ばれる新しいコンポーネントが導入されました。ユーザーは、特定のパラメータを受け入れる特定のOBIEEレポートを保持するようにコンポーネントを構成できます。既存のOracle Application Frameworkページにそのようなコンテンツを追加する機能は、パーソナライズを介して使用できます。

4.1.4.3. ポートレット・ジェネレータ

ポートレット・ジェネレータは、スタンドアロンのOracle Application Frameworkリージョンをポートレットに静的に変換するユーティリティです。これらのポートレットは、Oracleまたはサード・パーティのポータル・ページ、およびOracle WebCenter Portalページに埋め込むことができます。ポートレット・ジェネレータはWSRP 1.0標準に準拠しています。

ポートレット・ジェネレータは、機能管理者職責の一部である検索UIを提供し、ユーザーはスタンドアロン・リージョンをポートレットとして検索および登録できます。管理者は、ページに埋め込まれたスタンドアロン・リージョンのポートレット化されたリンクを有効にするプロファイル・オプションを有効にできます。管理者は、アプリケーション・ページをブラウズし、ポートレット化されたリンクを使用してリージョンをポートレットとして登録できます。

4.1.4.4. RESTインタフェース

REST (REpresentational State Transfer)は、分散ハイパーメディア・システムのアーキテクチャ・スタイルです。RESTは、SOAP (Simple Object Access Protocol)ベースのWebサービスに似ていますが、メッセージごとのペイロードが非常に小さくなっています。RESTは、ブラウザとアプリケーション層のサーバー間の頻繁で軽量のハンドシェイクのためにアーキテクチャが調整されています。

Oracle Application Framework RESTfulサービス・インタフェースを使用すると、製品はアプリケーション・モジュール機能(モデル)をサービスとして公開できます。これらのモデルは、リッチなインターネット・アプリケーションが使用できます。この機能を使用すると、選択したテクノロジーにカスタム・ユーザー・インタフェースを作成できますが、Oracle Application Frameworkアプリケーションの既存のコードが再使用されます。

4.1.5. リリース12.1.3

4.1.5.1. ユーザー・インタフェースの改善

ユーザー・インタフェースの改善が、リリース12.1.2で最初に導入された機能に対して行われました。

Oracle Application Frameworkページのナビゲータおよびお気に入りプルダウン・メニューでは、最初または最後のメニュー項目に移動するためのアイコンが提供されるようになりました。さ

らに、マウスによるスクロールがサポートされます。ナビゲータおよびお気に入りプルダウン・メニューは、[Page Up]キーおよび[Page Down]キーを使用した簡単なスクロールをサポートすることによって、キーボードのみのユーザーもアクセスできるようになりました。BiDi言語でのレンダリングのサポートも追加されました。

先読み値リストは、先読みが特定のフィールドで有効にされている場合、UIインジケータが表示されるように拡張されました。このインジケータは、角のある下向きの矢印の形状をしていて、値リスト入力フィールドの末尾にあります。標準のアクセシビリティ・モードおよびBiDi言語でのレンダリングのサポートも追加されました。

インライン添付機能は、添付表項目内に添付をインラインに表示、更新および削除したり、メッセージ・インライン添付項目内に添付をインラインに追加したりすることもサポートするように拡張されました。BiDi言語でのレンダリングのサポートも追加されました。

ポップアップ・コンポーネントでは、ポップアップ・コンポーネントでフォームを発行すると、ベース・ページもリフレッシュされるようになりました。この機能を使用すると、ベース・ページのデータを変更するポップアップを作成できるようになりました。フレックスフィールドは、ポップアップ内にレンダリングできるようになりました。標準リーダーおよびスクリーン・リーダーのアクセシビリティのサポートも追加されました。

リッチ・コンテンツ・コンテナ・コンポーネントは、コンテキスト依存の実行時パラメータをリッチ・コンポーネントに渡すことができるように拡張されました。コンテンツ・タイプを「その他」として指定することによる外部URLの埋込みのサポートも追加されました。

4.1.5.2. 新しいウィンドウでポートレット・リンクを開く

Oracle E-Business Suite Oracle Application Frameworkポートレット内のリンクは、新しいブラウザ・ウィンドウで開くことができるようになりました。この機能を使用すると、ベース・ポータルまたはOracle WebCenter Portalページをコンテキスト内に配置し、ドリルダウン・リンクによってコンテンツが別のウィンドウで開くようになります。Oracle E-Business Suiteのすべてのコンテンツは、単一のウィンドウで起動されます。

4.1.5.3. ADFの統合

Oracle E-Business Suiteホーム・ページから、Oracle Fusion Middlewareリリース11gコンテナに配置されているOracle Application Development Framework (ADF)リリース11gアプリケーションにリンクできるようになりました。各ADFアプリケーションには、ADFXタイプが定義されたFND関数があります。そのような関数がユーザーに付与されている場合、そのユーザーがログインすると、外部ADFアプリケーションへのリンクがホーム・ページに自動的に作成されます。ADFアプリケーションでは、フレックスフィールドなどのOracle E-Business Suiteの一部の機能がサポートされません。

詳細は、*FAQ for Integration of Oracle E-Business Suite and Oracle Application Development Framework (ADF) Applications* (My Oracle Supportナレッジ・ドキュメント1296491.1)を参照してください。

4.1.6. リリース12.2

4.1.6.1. 操作性の改善

次の操作性の改善が、リリース12.1.3で導入された機能に対して行われました。

- ホーム・ページにはページの上部にヒントが含まれ、そのユーザーのオープン通知数が表示されるようになりました。

- 職責リストが表示されるナビゲータ・スライドアウトまたはプルダウン・メニューには、ユーザーが機能をすばやく見つけることができるようにする検索入力フィールドが含まれるようになりました。最低文字数(現在は3文字に設定されています)を入力すると、入力文字列に一致する機能のリストが職責リストのかわりに表示されます。
- 新しい処理インジケータは、リッチ・ユーザー操作の進行中の処理についてユーザーに通知します。このインジケータは、インライン添付の追加/表示の上にマウスを移動したとき、およびポップアップ・コンテンツがロードされているときに表示されます。このインジケータは、コンテンツが完全にロードされると表示されなくなります。
- ポップアップが有効にされた項目は、次の表に示すようなより明確なポップアップ・インジケータが表示されるように拡張されました。

ポップアップのタイプ	ベース・コンポーネント	操作タイプ	インジケータ
情報ポップアップ	リンク、テキスト	マウス・オーバー	下線(点線)
情報ポップアップ	リンク、テキスト	クリック	通常のリンク
情報ポップアップ	ボタン	マウス・オーバー	推奨されない操作タイプ
情報ポップアップ	ボタン	クリック	必要なし
情報ポップアップ	イメージ	マウス・オーバー	ビジュアル・インジケータベースのイメージ
情報ポップアップ	イメージ	クリック	必要なし
トランザクション・ポップアップを持つダイアログ	リンク	マウス・オーバー	下線(点線)
トランザクション・ポップアップを持つダイアログ	リンク	クリック	通常のリンク
トランザクション・ポップアップを持つダイアログ	ボタン	マウス・オーバー	推奨されない操作タイプ
トランザクション・ポップアップを持つダイアログ	ボタン	クリック	必要なし
トランザクション・ポップアップを持つダイアログ	イメージ	マウス・オーバー	ビジュアル・インジケータベースのイメージ
トランザクション・ポップアップを持つダイアログ	イメージ	クリック	必要なし

- 従来表では、サポートされるレイアウトにプロパティ(ソート許可、ビュー属性名でソートおよび初期ソート順序)を公開することによって、レイアウトベースの列でのソートをサポートするようになりました。ソートでサポートされるレイアウトは、メッセージ・コンポーネント・レイアウト、フロー・レイアウトおよび非表示/表示です。
- 式言語(EL)のサポートは、より多くのタイプが含まれるように拡張され、より多くのプロパティでサポートされるようになりました。これらの機能拡張により、開発者は、追加のコードを記述することなく、より多くのタスクを宣言的に実行できるようになりました。また、ユーザーは、パーソナライズでELを使用してタスクを宣言的に実行できます。

4.1.6.2. AutoVueの統合

OAフレームワークの添付ユーザー・インタフェースは、AutoVue文書印刷サービスに統合され、ファイル・タイプの添付を出力できるようになりました。AutoVue文書印刷サービスは、AutoVue文書印刷サービスが構成されている単一のサーバーから、企業で使用される各種のファイル・タイプを出力することをサポートします。このサポートにより、企業で使用される考えられるすべてのファイル・タイプを表示および印刷するために、追加のソフトウェアを様々なクライアント・マシンおよびサーバー・マシンにインストールおよび構成するオーバーヘッドが排除されます。

4.1.6.3. パーソナライズの改善

OAパーソナライズ・フレームワークに対して新しい改善が行われました。

- 管理者は、パーソナライズを使用してSQLベースの読取り専用ビュー・オブジェクトを作成し、ページの新しい項目にそれをバインドできます。この機能を使用すると、管理者はOracle E-Business Suite表の新しいコンテンツを既存のページに宣言的に追加できます。
- パーソナライズを使用すると、より多くの項目タイプおよびレイアウト・リージョン・タイプをページに作成および追加するために使用できます。このリリースでサポートされる追加のレイアウト・タイプには、ヘッダー、従来表、拡張表およびメッセージ・コンポーネントの各レイアウトが含まれます。サポートされる追加の項目タイプには、発行ボタン、リセット・ボタンおよびリッチ・テキスト・エディタが含まれます。これらの追加により、管理者はコンテンツのレイアウトをよりよく制御できます。
- パーソナライズは元に戻すことができます。取消機能を使用すると、ページをパーソナライズするときにエラーが発生した場合に、管理者は現在のブラウザ・セッションで行ったパーソナライズを元に戻すことができます。
- パーソナライズはコピーできます。この機能を使用すると、管理者は特定のレベル値(職責、機能、組織など)で行ったパーソナライズを他のレベル(別の職責、機能など)に迅速にコピーできます。

4.1.6.4. 拡張されたOracle JDeveloper OA Extension

リリース12.2のOracle JDeveloper OA Extensionには、次のテクノロジー・コンポーネントが含まれています。

テクノロジー・コンポーネント	リリース12.2 IDEに含まれているバージョン
Oracle JDeveloper	10.1.3.5
アプリケーション・サーバー	OC4J 10.1.3.5
UIX	12.2.2.0
MDS	9.0.6
Oracle BI Beans	3.1.1.11
ポータル	Oracle WebLogic Server WSRP 11g
JOC	10.1.3
XML解析機能	11.1.0
JDBC	11g リリース2(11.2.0.3.0)ドライバ
JDK	1.6.0_23
BC4J	10.1.3.5

注意: Oracle E-Business Suiteリリース12.2のアプリケーション・サーバーはOracle Fusion Middleware 11gのOracle WebLogic Serverにアップグレードされましたが、Oracle JDeveloper OA ExtensionはJ2EE (OC4J) 10.1.3.5サーバーの埋込みOracle Containersを引き続き活用します。結果として、カスタマイズまたは拡張の開発中に、開発者はOC4Jサーバー上でページを実行します。ただし、配置されたページはOracle WebLogic Serverで実行されます。

4.1.6.5. iPadの動作保証

Oracle Application Frameworkアプリケーションは、iPad上での実行が動作保証されるようになりました。既知の注意事項は文書化されています。

4.1.6.6. 拡張されたキー・フレックスフィールドの終了日検証

キー・フレックスフィールド・セグメント値またはコード組合せの終了日検証では、フレックスフィールドに定義されたカスタム終了日、およびシステム日付がサポートされるようになりました。

4.1.6.7. 添付のコピーのサポート

添付はあるビジネス・エンティティから別のビジネス・エンティティにコピーできるようになりました。

4.1.6.8. ファイル・アップロードでのアンチウィルス・スキャンのサポート

ファイル・アップロードUI機能では、ファイルをアップロードする前に、ウィルス・スキャンを実行できるようになりました。ウィルス・スキャンは、設計時に有効にするか、プロファイル・オプションを設定することによって有効にできます。

4.1.6.9. 「作業環境」ページへの配信マネージャの統合

「作業環境」ページには、配信マネージャのEメール・サーバー資格証明を指定するための新しいリージョンが含まれています。配信マネージャを使用すると、ユーザーはEメールを使用してコンカレント処理レポートを送信できます。指定されたEメール・サーバー資格証明により、配信マネージャはユーザーのかわりにこれらのレポートをEメール送信できます。

4.1.6.10. 拡張された情報ページ

「情報」ページの「テクノロジー・コンポーネント」サブタブには、国際化ライブラリのバージョン情報、および現在のテクノロジー・スタックのデータベース・エディション名が含まれるようになりました。「パッチ」サブタブには、オンライン・パッチ適用のカットオーバー・フェーズが完了したパッチの詳細のみが表示されるようになりました。

4.1.6.11. 改善された外部アプリケーション統合

Microsoft ExcelまたはMicrosoft WordドキュメントからOracle Application Frameworkページにドリルダウンするときに、エントリ・ポイントJSPページとして動作する新しいJSPが導入されました。

4.1.6.12. ポートレット・ジェネレータの変更

ポートレット・ジェネレータのマテリアライズド・ビューFWK_PORTLET_GEN_MVは、標準の表FWK_PORTLET_GENに置き換えられました。同様に、ポートレット・ジェネレータ・マテリアライズド・ビューのリフレッシュ・コンカレント・プログラム(FWKPRTMV)はポートレット・ジェネレータ表のリフレッシュ・コンカレント・プログラム(FWKPRTTB)に置き換えられました。

4.1.6.13. アクセス・キーの無効化

ユーザーは、プロファイル・オプションを設定するか、「作業環境」ページを更新することによって、すべてのアクセシビリティ・モードのアクセス・キーを無効にできるようになりました。

4.1.6.14. 新しいレート用バー

開発者は、新しいレート用バーをページ上のリージョンに追加できるようになりました。レート用バーは、ユーザーが製品、サービスまたはエンティティをレーティングするために使用でき、更新可能または読み取り専用として定義できます。

4.1.6.15. モーダル・ポップアップ

開発者は、ポップアップ・コンポーネントをモーダル・ポップアップとして定義できるようになりました。モーダル・ポップアップがレンダリングされた場合、ユーザーはそのポップアップを閉じるまでベース・ページを操作できません。

4.1.6.16. 長いテキストの添付

ユーザーは、4000バイトを超えるテキストを含む長いテキスト・タイプの添付を追加できるようになりました。

4.1.6.17. 改善された「レコード履歴」

「レコード履歴」では、「最終更新者」フィールドおよび「作成者」フィールドにユーザーIDではなくユーザー名が表示されるようになりました。

4.1.6.18. メッセージ・リッチ・テキスト・エディタでのAntiSamyのサポート

メッセージ・リッチ・テキスト・エディタでは、悪意のあるコードに対して保護するために、作成した新しいHTMLコンテンツのAntiSamyチェックが実行されるようになりました。

4.1.6.19. 複合表列での改善されたソートのサポート

開発者は、リーフ項目が従来表でサポートされるリージョン・レイアウト・スタイル(メッセージ・コンポーネント・レイアウト、フロー・レイアウトまたは非表示/表示)でグループ化されている複合表の列のソートを有効にできるようになりました。

4.1.6.20. 検証プロファイルの廃止

Oracle E-Business Suiteでは、次の検証プロファイルをオフにする機能が削除され、3つの検証プロファイルに「エラー」が設定されているかのように常に実行されます。

- FND検証レベル(FND_VALIDATION_LEVEL)
- FND機能検証レベル(FND_FUNCTION_VALIDATION_LEVEL)
- フレームワーク検証レベル(FRAMEWORK_VALIDATION_LEVEL)

4.1.6.21. 改善された従来表および拡張表のアクセシビリティのサポート

開発者は、スクリーン・リーダーのアクセシビリティをサポートするために、従来表または拡張表に行ヘッダーとして列を指定できるようになりました。

4.1.7. リリース12.2.3

4.1.7.1. 新しいSkyrosスキン

新しいSkyrosスキンは、現在のUIビジュアル設計のトレンド(立体的ではなくフラットな要素、グラデーションの減少、境界の減少、白または明るい色の配色など)をルック・アンド・フィールに取り入れています。また、新しいルック・アンド・フィールでは、従来表および拡張表の管理バー・アイコンのサポートが改善されました。

4.1.7.2. リッチ表インタラクション

従来表および拡張表では、リッチ・インタラクションもサポートされるようになり、表の幅がブラウザの幅を超えている場合の表のスクロール、より広い幅の別のコンポーネントとしての表とその作業のデタッチ、および表の列のサイズ変更と並べ替え(エンド・ユーザーがユーザー・パーソナライズとして保存できます)をエンド・ユーザーが行うことができます。

4.1.7.3. 動的ビュー

以前は、OAフレームワークは問合せリジョンにある表のビューのみをサポートしていました。新しいリッチ表インタラクション(列のサイズ変更、並替えなど)は、OAフレームワークによってすべてのページの従来表および拡張表でサポートされるユーザー・レベルのビューを使用することによって、以降のセッションでも維持されます。

4.1.8. リリース12.2.4

4.1.8.1. モーダル・ポップアップとしてのダイアログ・ページ

プロファイル・オプションを設定することによって、ダイアログ・ページをモーダル・ポップアップとして表示できるようになり、ユーザーが別個のページにナビゲートすることなくメッセージを表示できるようになりました。

4.1.8.2. リッチ表インタラクション

従来表および拡張表では、エンド・ユーザーが列を非表示/表示に設定できるリッチ・インタラクションもサポートされるようになり、ユーザーはリッチ・インタラクションをユーザー・パーソナライズとして保存できます。ユーザーは、これらのリッチ機能を使用して設定したすべてのユーザー・パーソナライズを削除し、表をリセットして元の定義に戻すこともできます。

4.1.8.3. リッチHGridインタラクション

HGridでは、リッチ・インタラクション(サイズ変更、レンダリング、列の非表示/表示、HGridの水平方向のスクロールなど)がサポートされるようになりました。ユーザーは、これらのリッチ機能を使用して設定したすべてのユーザー・パーソナライズを削除し、HGridをリセットして元の定義に戻すこともできます。

4.1.8.4. 日付ピッカーでの時刻のサポート

開発者は、ユーザーが日付を選択するときに時刻も指定できる日付ピッカーを実装できるようになりました。

4.1.8.5. 新しいメニュー・コンポーネント

開発者は、ページのリンク、イメージまたはボタン項目に直感的で領域を節約できるメニュー・コンポーネントを追加できるようになりました。このメニューは、メニューが有効な項目をユーザーが選択するとポップアップとして表示され、ユーザーがその項目に対して実行できるクライアント側のアクションのリストが表示されます。メニューは2つのモードのいずれかで動作するように設定できます(単一のアクションを起動するために単一のメニュー・オプションのみを選択できるモード、または一連の順次アクションを起動するために複数のメニュー・オプションを選択できるモード)。このメニューは、ユーザーがメニュー・オプションを並べ替えて、その並べ替えに関連付けられた特定のアクションを設定できるように定義することもできます。

4.1.8.6. 新しいスピン・ボックス・コンポーネント

開発者は、ページにスピン・ボックス・ウィジェットを追加できるようになり、ユーザーは事前定義された増分ステップ・サイズを使用して事前定義された値の範囲から数値を選択できます。

4.1.8.7. モバイル・デバイスでのジェスチャのサポート

OAフレームワークでは、Mobile Safariを実行するiOSデバイスおよびGoogle Chromeを実行するAndroidデバイスでのユーザー・エクスペリエンスを向上させるために、ジェスチャのサポートが提供されるようになりました。UIをよりタッチ対応にするためにサポートされるジェスチャには、シングル・タップ、ダブル・タップ、ホールド/プレス/プレス・アンド・ホールド、パン/ドラッグ、スワイプ/フリック、スプレッド、ピンチ、チェック・マーク/ディック、およびxマーク/クロスが含まれます。

4.1.8.8. ユニバーサル・グローバル・ヘッダー

統一グローバル・ヘッダーは、サポートされるモバイル、タブレット、およびデスクトップの各デバイスで使用できるようになりました。新しいグローバル・ヘッダーでは、グローバル・リンクがアイコンとして表示され、以前は2行であったヘッダーが単一の行に合理化され、コンテンツを表示するための画面領域が増加しています。結果として、このヘッダーによって、よく使用されるリンクおよび関連するメニュー項目(ホーム、ナビゲータ、お気に入り、作業環境など)が製品固有のメニュー項目にカプセル化されます。

4.1.8.9. 簡略化されたホーム・ページ

新しい簡略化されたホーム・ページをOracle E-Business Suiteでできるようになりました。簡略化されたホーム・ページには、「お知らせ」セクションおよびお気に入りアイコンのグリッドがあり、エンド・ユーザーはアプリケーションのクリック起動アイコンを追加および構成してパーソナライズできます。管理者は、プロファイル・オプションAPPLICATIONS_HOME_PAGEに「フレームワーク簡略化ホームページ」を設定することによって、エンド・ユーザーに対して新しいホーム・ページを有効にできます。管理者は、OAフレームワーク管理者パーソナライズUIを使用することによって、「お知らせ」セクションをパーソナライズすることもできます。

4.1.8.10. Chromeブラウザの動作保証

OAフレームワークは、デスクトップおよびAndroidタブレットのChromeブラウザで動作保証されるようになりました。

4.1.8.11. HTML5の動作保証

生成されるHTMLソースでHTML5の標準doctypeを活用できるようにプロファイル・オプションを設定できるようになりました。HTML5の標準doctypeを使用すると、OAフレームワークベースのすべてのページを後方互換モードまたは互換モードではなくブラウザの優先される標準モードで実行できます。

4.1.8.12. 添付表での列の非表示のサポート

開発者は、添付表の「カテゴリ」、「最終更新者」、「最終更新」、「使用」、「更新」、「削除」および「添付の印刷」列をプログラムで非表示にすることができるようになりました。

4.1.8.13. 新しい拡張検索基準

「拡張検索」パネルでは、AND検索またはOR検索およびデータ型固有の演算子(より大きい、等しい、等しくないまたはより小さい)を個別のフィールドに宣言的に指定できることに加えて、

ユーザーは等しくない(空白を含む)演算子を指定して検索からNULL値を返すこともできるようになりました。

4.1.9. リリース12.2.5

4.1.9.1. Oracle Alta UIのルック・アンド・フィールのアップグレード

新しいOracle Altaルック・アンド・フィールには、新しい色、フォント、サイズおよびコンポーネント・スタイルが組み込まれており、デスクトップおよびタブレットのUI表示が最適化されます。

4.1.9.2. リッチ表インタラクション

従来表および拡張表では、エンド・ユーザーが次の操作を行うことができるリッチ・インタラクションがサポートされるようになりました。

- 表を縦方向にスクロールする。
- 表を水平方向にスクロールするときに、一連の列がビューに表示されるように固定する。

従来表および拡張表では、行の選択およびアクションのためのタッチ・サポートも提供されるようになりました。

4.1.9.3. 簡略されたページUI

Oracle E-Business Suiteアプリケーションでは、新しいアイコンベースのメニューおよび新しいUIコンポーネントを含む簡略化されたレイアウトが使用されるようになりました。開発者は、次の新しいUIコンポーネントを追加して、ページ・レイアウトを単純にすることができるようになりました。

- 情報タイル - コンテンツのタイルベースのヘッダーおよび詳細リージョンを含むコンポーネント。複数の情報タイル・コンポーネントを実装すると、タイルの列挙として表示され、各タイルには詳細リージョンの簡単な説明が表示されます。ユーザーが特定のタイルを選択すると、そのタイルに関連する詳細なコンテンツが情報タイルのコンテンツ・リージョンに表示されます。
- 垂直サブタブ・レイアウト - サブタブ・レイアウトでのタブの垂直な表示。
- サブタブ・レイアウトの非表示/表示 - サブタブ・レイアウトを含むリージョンの非表示/表示。縮小済モードでは、タブのアイコンのみが表示されます。ユーザーがタブを選択すると、コンテンツ・リージョンがスライドアウトして、関連するコンテンツが表示されます。

4.1.9.4. ポップアップとしての付加フレックスフィールドのサポート

この操作性の機能拡張を使用すると、開発者はポップアップ・ウィンドウとして自動的にレンダリングできる付加フレックスフィールドを定義できます。

4.1.9.5. インライン添付の機能拡張

インライン添付ポップアップ・ウィンドウは、ユーザーが次の操作を行うことができるように拡張されました。

- 文書カタログへの添付の公開。
- 文書カタログの既存の文書の添付。

これらの機能拡張に伴い、「添付」ページは使用不可となり、デフォルトではアクセスできなくなりました。結果として、ユーザーは添付を操作するときのみインライン添付ウィンドウを使用できます。

4.1.9.6. ポップアップの機能拡張

ポップアップは次の操作を行うことができるように拡張されました。

- ユーザーがポップアップ・ヘッダー領域をドラッグすることによってポップアップを移動できます。
- 管理者がポップアップ・コンポーネントに新しいプロパティを設定することによって、コンテンツが収まるようにポップアップが自動的にサイズ変更され、スクロール・バーが必要なくなります。
- 開発者がベース・ページとパラメータ化されたポップアップで同じAMを使用できます。

4.1.9.7. ボタンのアイコンのサポート

開発者は、ボタンにプロンプトとともにアイコンを追加し、アイコンの位置(左、右、上、下など)を指定できるようになりました。

4.1.9.8. キー・フレックスフィールドでのWHERE句のサポート

開発者は、キー・フレックスフィールドWeb Beanに追加のWHERE句を設定し、表示される一連の有効なキー・フレックスフィールドの組合せ値にサブセットを制限できるようになりました。

4.1.10. リリース12.2.6

4.1.10.1. 添付のタイプに関する開発者の制御

添付機能には、次の機能拡張が含まれるようになりました。

- 開発者は、インライン添付UIのデフォルト添付タイプ(短いテキスト、長いテキスト、ファイル、URLなど)を設定できます。
- 開発者は、インライン添付UIと添付ページUIの各種の添付タイプ(テキスト、URLおよびファイル)を有効または無効にできます。

4.1.10.2. Oracle AutoVueリリース20.2.3と添付の統合

AutoVue文書印刷サービスと添付の統合は、Oracle AutoVueリリース20.2.3で動作保証されるようになりました。

4.1.10.3. 新しい印刷APIに関するOracle AutoVue Libraryのアップデート

AutoVue文書印刷サービスとOracle AutoVueリリース20.2.3の統合および動作保証によって、新しいpacketPrintサービスを使用できるようになりました。

4.1.10.4. URL添付の検証のサポート

リダイレクトの前にURLタイプの添付を最初に検証するかどうかを指定する新しいプロファイル・オプションを設定できるようになりました。悪意がある可能性がある外部のページにリダイレクトされると、ユーザーのセッション、アカウントまたはシステムのセキュリティが侵害されることがあります。URLタイプのすべての添付を検証するようにプロファイル・オプションを有効にしている、

URLが外部ページにリダイレクトされる場合、警告ダイアログ・メッセージが表示され、外部ページにリダイレクトする前にユーザーが確認するように求められます。

4.1.10.5. ホーム・ページおよびグローバル・ヘッダーの改善

ホーム・ページは、次の機能が含まれるように拡張されました。

- お気に入りアイコンの長いリストのページ編集のサポート(垂直スクロールする必要がなくなります)
- FND_SHOW_INSTANCE_NAMEプロファイル・オプションに指定されているサイト名またはインスタンス名のグローバル・ヘッダーへの表示
- 「作業環境」ページからホーム・ページ・タイプを設定する機能

4.1.10.6. 検索リージョンの操作性の改善

開発者のための検索リージョンの改善には、次の事項が含まれます。

- 開発者が「拡張検索」リージョンのすべてまたは任意のラジオ・グループをプログラムから非表示にできる新しいAPI
- 「拡張検索」パネルに4つを超える検索基準を宣言的またはプログラムのに指定する機能

4.1.10.7. フィレックスフィールドの特殊値セット

付加フレックスフィールドは、特殊な検証値を使用してセグメントを検証するように構成できるようになりました。この新機能は、コンカレント・プログラムのページのコンテキスト内で使用された場合、付加フレックスフィールド内のキー・フレックスフィールドの構成がサポートされます。ユーザーは、コンカレント要求HTMLページで付加フレックスフィールドの単一セグメント内のキー・フレックスフィールドの組合せ全体を入力できます。

4.1.10.8. スプリッタ・コンポーネント

新しいパネル・スプリッタ・レイアウト・コンポーネントを使用すると、ユーザーがサイズ変更可能で縮小可能な複数のリージョンに分割できるページを開発者が作成できます。

4.1.10.9. 階層化レイアウト

新しい階層化レイアウト・コンポーネントを使用すると、開発者は複数のサブタブではなく複数の階層を含むページを作成できます。各階層には、ユーザーが階層を切り替えるために選択できるタイトル・バー領域が表示されます。ユーザーは一度に1つの階層のみを選択でき、階層のコンテンツはその階層が選択されたときにのみレンダリングされます。

4.1.10.10. Oracle Web Applications Desktop Integratorと表の統合

従来表および拡張表では、Oracle Web Applications Desktop Integratorとの統合がサポートされるようになり、表データをOracle Web Applications Desktop Integratorスプレッドシートとしてダウンロードできます。この機能を有効にするには、「FND: BNE表統合の有効化」プロファイル・オプションを使用します。

4.1.10.11. 非EOベースのビュー・オブジェクトのレコード履歴のサポート

エンティティ・オブジェクトベースのビュー・オブジェクト(PL/SQLベースの更新可能なビュー・オブジェクトなど)で、レコード履歴がサポートされるようになりました。

4.1.10.12. 複数選択表での3つの状態を持つチェック・ボックスのサポート

表およびHGridは、以前は選択チェック・ボックスおよびすべて選択/選択なしリンクが列ヘッダーに表示されましたが、それらが3つの状態のチェック・ボックスに置き換えられて拡張されました。このチェック・ボックスでサポートされる状態は、選択済、未選択および部分的に選択済です。

4.1.10.13. iOSでコンテンツの非表示/表示を行うためのヘッダー・テキスト選択のサポート

iOSでは、ユーザーはコンテンツを拡張または縮小するための非表示/表示コンポーネントのヘッダー・テキストを選択できるようになりました。

4.1.10.14. 日付フィールドのヒント・テキストの再配置

日付フィールドのヒント・テキストは、ユーザーが表示したときに日付フィールドの外側ではなく日付入力フィールド内に表示されるようになりました。

4.1.10.15. テキスト・フィールド、LOV入力フィールドおよびスピン・ボックスでのヒントのサポート

messageTextInput、messageLovInputまたはmessageSpinBox項目にプレースホルダ・テキスト・プロパティを宣言的に設定することによって、短いヒント・テキストを指定してテキスト入力フィールド、LOV入力フィールドまたはスピン・ボックスに表示できるようになりました。

4.2. Oracle Application Object Library

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.2.1. リリース12.0.3 (RUP3)

4.2.1.1. カスタム・ディレクトリ情報ツリー(DIT)

createBase、searchBaseおよびcommonNameAttributeのためのOIDの範囲構成がサポートされます。CreateBaseは、EBIZのOIDユーザーが作成される場所です。SearchBaseは、検索を開始するOIDノードです。CommonNameAttributeは、cnに使用される属性です(たとえば、cn=xxxxまたはuix=xxxx.)。

4.2.2. リリース12.1.1

4.2.2.1. 一般データ・ローダー(FNDLOAD)のデータ型サポートの機能拡張

FNDLOADは一般シード・データ・ローダー・ツールです。リリース12.1.1より前では、FNDLOADはCLOBデータをサポートしましたが、LDTファイルのBLOBデータはサポートしていませんでした。リリース12.1.1では、FNDLOADはBLOBデータをサポートし、コンテンツ・リッチなアプリケーションに対してよりよく機能します。

4.2.2.2. XML定義ファイル(XDF)のデータ型サポートの機能拡張

XDF (XML定義ファイル)は、開発チームがオブジェクト定義をカスタム・サイトに伝播するために使用する現在のODF (オブジェクト定義ファイル)ユーティリティの次世代バージョンです。

現在、XDFはネスト表の変更をサポートしておらず、ネスト表の作成シナリオのみがサポートされます。リリース12.1.1では、XDFは、XDFファイルのネスト表情報の取得、表オブジェクトの伝播時のこの情報の読取り、およびネスト表の列を含めるための実表の変更を行うことができます。

また、表の2つの主キーの処理が変更されました。Oracle E-Business Suite標準に従うと、主キー・タイプがDである2つの主キーを表に持つことはできません。以前のリリースでは、そのような2つの主キーを表に適用すると、Oracle XDFでエラーが発生しました。リリース12.1.1では、Oracle XDFアプリケーションは、指定されたパラメータ値に応じて、古い主キーを上書きし、XDFファイルに新しい主キーを作成します。

4.2.2.3. コンカレント処理での統合ビジネス・イベント

コンカレント処理では、要求のライフサイクルの様々なステージで実行されるビジネス・イベントを登録できるようになりました。コンカレント処理は、コンカレント要求のライフサイクルの様々なステージで他のルーチンをコールするためのフックを提供します。

4.2.2.4. コンカレント処理でのマネージャと要求インスタンスのアフィニティ

コンカレント要求およびマネージャは、特定のデータベース・インスタンスまたはノードにダイレクトできるようになりました。

4.2.2.5. コンカレント処理でのマネージャの起動しきい値

管理者は、コンカレント・マネージャが起動に失敗した後に内部コンカレント・マネージャがコンカレント・マネージャの再起動を試行する回数のしきい値を設定できるようになりました。

4.2.3. リリース12.1.2

4.2.3.1. Oracle Access Manager の統合

Oracle E-Business Suiteは、Oracle E-Business Suite AccessGateを使用したOracle Access Manager (OAM)との統合をサポートするようになりました。Oracle E-Business SuiteへのOracle Access Managerの統合によって、企業のすべてのアプリケーション(Oracle E-Business Suiteの一部ではないアプリケーションを含む)で共有できるID管理およびアクセス制御システムが提供されます。現在、Oracle Access Managerは、Oracle Fusion Middlewareおよび一部のサードパーティ製品と使用することが動作保証されています。

Oracle Access Managerは、それをサポートする製品でOracle Single Sign-On (OSSO)のかわりに使用できます。または、OSSOとともに使用して、Oracle E-Business Suiteテクノロジ・スタックのすべての製品の集中的な認証を提供できます。ユーザーは、次世代のOracle Security製品に移行する時期を選択できます。

4.2.3.2. Oracle Application Object Library Java API

Oracle Application Object Library Java APIは、Oracle E-Business Suiteによって使用されるセッション管理、外部ロギング、メッセージ(メッセージ・ディクショナリ)、プロファイルおよび検索への外部のJava EEベースのアプリケーションからのアクセスを提供するため、スイート全体をローカルにインストールする必要がなくなります。これらのAOL Java APIは、Oracle E-Business Suiteのリリース12.1.2を含むすべてのリリースで動作保証されています。

4.2.3.3. Oracle E-Business Suiteのデータソース(AppsDataSource)

AppsDataSourceは、Oracle Fusion Middleware (FMW)インスタンスなどの外部Java EEアプリケーションからOracle E-Business Suiteデータベースに接続する機能およびOracle E-Business Suiteのトランザクション・データにアクセスする機能を提供します。

AppsDataSourceは、Open Group (<http://www.opengroup.org/>)の分散トランザクション処理の標準であるX/Open XAをサポートしています。XA標準のサポートにより、ローカルのリソースのみを使用するのではなく、複数のリソース(Oracle Database、Java Message Service (JMS)など)をトランザクションで使用できます。

4.2.3.4. JAAS for Oracle E-Business Suite

Oracle E-Business Suiteは、JAAS (Java Authentication and Authorization Service)のサポートを提供するようになりました。この機能は、JAAS標準仕様へのセキュリティ準拠を提供します。

JAAS for Oracle E-Business Suiteは、Java EE準拠のコンテナに配置および実行するために設計された軽量ログイン・モジュールです。ログイン・モジュールは、カスタマイズの開始点、または統合ポイントとなることが意図されており、Oracle E-Business Suiteを外部認証サービス(たとえば、企業のシングル・サインオン・システム)に接続するために使用されます。

認証(ユーザー・ログイン)はAOLセキュリティ・システムを使用して実装されます。承認(特定の機能のためのアクセス制御)は、Oracleユーザー管理(UMX)ロールを使用して適切な権限を提供します。

4.2.3.5. 予定作成チャートのユーザー・インタフェースの機能拡張

予定作成チャートは、様々なタイプの割当データを対応するリソースとともに棒グラフで表示するために使用します。これらのチャートでは、あるリソースから別のリソースへの既存の割当のドラッグ・アンド・ドロップ、および割当の時間枠のサイズ変更がサポートされます。

リリース12.1.2の機能拡張によって、タスク番号をペインから予定作成チャートにドラッグしてリソースの新しいタスクを作成したり、タスク(フォアグラウンド・バー)およびシフト(バックグラウンド・バー)をその場で作成できるメニューを表示したりしやすくなりました。ユーザーは、特定の検索基準に基づいてタスク・バーを見つけることもできます。単一のフォームで新しいタスク割当を作成、割当、検索および表示する機能を簡略化すると、時間が節約されて効率が向上します。

4.2.4. リリース12.1.3

4.2.4.1. キー・フレックスフィールドの相互検証ルール・レポートの機能拡張

相互検証ルール違反レポートは、キー・フレックスフィールド相互検証ルールをより柔軟にチェックできるように拡張されました。以前は、ユーザーが特定のキー・フレックスフィールド構造を選択すると、レポートはその構造にセットアップされている相互検証ルールに違反した既存の組合せを一度にすべてのルールについてチェックしていました。このリリースでは、ユーザーには、一度に1つの相互検証ルールについてこのレポートを実行し、特定のルールに違反している既存の組合せを表示することによって、特定のルールが適切にセットアップされているかどうかをテストするオプションがあります。

また、相互検証ルール違反レポートは、現在アクティブ(有効)な組合せと期限が切れてアクティブではない組合せをユーザーが必要に応じて区別できるように拡張されました。以前は、このレ

ポートではルールに違反しているが無効にされている組合せはすでに表示されませんでした。ユーザーは、期限切れの組合せをレポートに含めるかどうかを指定できるようになりました。(無効と期限切れは異なるステータスです。)

4.2.4.2. フレックスフィールドのセグメント名の検証

キー・フレックスフィールドおよび付加フレックスフィールドのフレックスフィールド・セグメント・セットアップ・フォームは、セグメント名フィールドのフィールドレベルの違反を提供するように拡張され、ユーザーが無効なセグメント名についてのフィードバックを即座に受け取るようになりました。セグメント名に関する様々な制限(特殊文字を使用しない、文字または数値で始まるなど)は変更されていませんが、この機能拡張によって、特に無効な文字をセグメント名として入力しやすい西洋言語以外の文字セットを使用するインストール環境で、フレックスフィールド・セグメントを適切にセットアップしやすくなりました。

4.2.4.3. Oracle Business Intelligence Publisher配信マネージャとコンカレント処理の統合

コンカレント要求を発行するときに、ユーザーはBI Publisherの配信マネージャを使用して要求出力を配信することを選択できるようになりました。この出力では、Eメール、FAX、IPPプリンタへの送信、FTPまたはSFTPを使用した配信を自動的に行うことができます。

4.2.4.4. 11gの大文字と小文字が区別されたデータベース・パスワードに対するOracle E-Business Suiteのサポート

このリリースでは、Oracle Application Object Library (AOL)は、データベース・ユーザーの認証でOracle Database 11gの大文字と小文字が区別されるデータベース・パスワード機能をサポートするように拡張されました。以前のリリースでは、Oracle E-Business Suiteのデータベース・パスワードで大文字と小文字が区別されませんでした。大文字と小文字が区別されるデータベース・パスワードのサポートは、Oracle E-Business Suiteスキーマのパスワードをよりセキュアにするために提供されています。

この機能はデフォルトでは有効にされず、オプションとして使用します。大文字と小文字が区別されるデータベース・パスワードを有効にするには、データベース管理者(DBA)が適切なセットアップ手順を実行する必要があります。

4.2.4.5. FNDMENU診断メニューのセキュリティの改善

この機能拡張は、「診断」メニューの下の子メニューにアクセスしようとするときのAPPSパスワードに関する課題を解消します。「診断」の子メニューへのアクセスは、「ユーティリティ: 診断」プロファイル・オプションおよび標準E-Business Suite機能セキュリティによって制御されます。ユーザーがメニュー項目を選択すると、Oracle Application Object Libraryはその子メニュー項目が現在の職責に付与されているかどうかをチェックします。「ユーティリティ: 診断」プロファイル・オプションに「いいえ」が設定されていて、エンド・ユーザーにそのメニュー項目のセキュリティ機能が付与されていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。

また、この機能拡張は、「検査」メニュー、「項目プロパティ」ウィンドウおよびフォーム・パーソナライズ・フォームの読取り専用モードを提供します。

4.2.4.6. データベース接続のタグ付け

この機能は、データベース接続をモジュールおよびコンテキスト固有の属性にタグ付けする機能をユーザーに提供します。この機能は、接続が使用されている現在のユーザー、コード・モジュールおよびビジネス・アクションをアプリケーションが記録できるいくつかのセッション属性を

提供します。これらの属性を移入すると、監査の制御、リソースの割当、および問題の診断に必要なメトリックをユーザーが追跡するために役立ちます。

4.2.5. リリース12.2

4.2.5.1. プロファイルのためのOracle Database 11g リリース2のネイティブなキャッシング

プロファイル・キャッシングでは、プロファイル・オプション値の取出しのパフォーマンスを改善するために、Oracle Database 11g リリース2のネイティブなPL/SQL関数結果キャッシュ機能が使用されるようになりました。

4.2.5.2. Oracle Database 11g リリース1のAUTOサンプリング統計収集機能の活用

問合せの最適化のための統計を収集するOracle E-Business SuiteのFND_STATSパッケージは、Oracle Database 11g リリース1で導入されてから改善されたDBMS_STATS.AUTO_SAMPLE_SIZE機能をデフォルトで使います。FND_STATSは、AUTO_SAMPLE_SIZEを使用してより正確な統計をより速く生成します。

4.2.5.3. Oracle Application Framework UIでの添付のコピーのサポート

添付のデータ・モデルは、Oracle Application Frameworkで添付をコピーする機能拡張(4.1.6.7項)を有効にするために更新されました。

4.2.5.4. フレックスフィールドの値セット・セキュリティ

フレックスフィールド値セット・セキュリティを使用すると、キー・フレックスフィールド、付加フレックスフィールドおよびレポート・パラメータに使用される値セットの値を表示、作成または更新するための職務をロールベースで分離できます。値セット・セキュリティを使用すると、管理者はユーザーが「値」フォームで特定の値セットの値を表示、作成または更新することを制限できます。たとえば、特定のユーザーは会計フレックスフィールドによって使用されるすべての値セットの値を表示または挿入できるがその他の値セットの値は表示または挿入できず、別のユーザーはOracle Human Capital Managementアプリケーションのすべてのフレックスフィールドで使用される値セットの値を表示および更新できるという値セット・セキュリティをセットアップできます。営業単位、ロールまたは職責によってアクセスを分離することもできます。

4.2.5.5. ブラウザ・クッキーのスコープ

ブラウザ・セッションのクッキーには、機密性のあるデータが含まれています。よりセキュアな構成にするには、運用およびビジネス・ニーズを満たすために必要なホストにのみクッキーが送信されるように制限してください。Oracle E-Business Suiteリリース12.2では、システム管理者はクッキーを送信するホストを制御できます。

設定可能な設定は3つあります。「ホスト」設定では、クッキーのスコープは元のホスト(サーバー)になります。これは、最も高いレベルのセキュリティを提供します。「ドメイン」設定はデフォルトであり、Oracle E-Business Suiteサーバーと同じドメイン内のマシンにクッキーを送信することのみを許可します。これは、機能を妨げることなく良好なレベルのセキュリティを提供します。最後に「カスタム」設定はシステム管理者が構成可能であり、特定のサイトの要件のためにセキュリティ・レベルをカスタマイズできます。

4.2.5.6. 許容されるJSPのリスト

この機能は、Oracle E-Business Suite製品または製品ファミリへのアクセスが承認されるJSP (JavaServer Pages)を制御できます。つまり、アクセスが許可されるJSPのリストに明示的に追加されていない場合に、JSPのアクセスを拒否する機能を提供します。アクセスが許可されるJSPは、特定のサイトおよび製品混合のニーズに合うようにカスタマイズできます。特定の製品または製品ファミリを使用していない場合は、関連する.confファイルを編集してアクセスを拒否できます。

この機能をサポートするために、新しいプロファイル・オプション「無制限JSPアクセスの許可」(FND_SEC_ALLOW_JSP_UNRESTRICTED_ACCESS)が導入されました。このプロファイル・オプションは、サイト・レベルまたはサーバー・レベルで設定して、JSPフィルタリングを有効または無効にできます。

4.2.5.7. Oracle Application Object Library RESTサービス

リリース12.2では、REST (REpresentational State Transfer)セキュリティ・サービスが以前より汎用性がある新しい統合オプションとして導入されました。特に、RESTサービスはモバイル・アプリケーションのカスタマイズ可能なサポートの開発を容易にします。

RESTセキュリティ・サービスは、Oracle Application Object Libraryによって提供され、ログイン(認証)、セッション管理、認可およびログアウトの要求を満たします。それらの使用は認証が始まり、アクセス・トークンのユーザー名とパスワードが検証、エンコードおよび交換されます。このトークンは、Oracle E-Business Suite Webサービスへの認証された要求を作成するために後で使用されます。その後、他のRESTサービスが適用可能であれば呼び出されます。

4.2.6. リリース12.2.3

4.2.6.1. 拡張パスワード・ハッシング

拡張パスワード・ハッシング機能は、AFPPASSWDユーティリティの-m (移行)オプションを拡張し、新しい拡張ハッシュ・モード・オプションおよび新しい引数を追加します。この機能では、データベースのパスワード・ハッシュが漏洩した場合に、ハッシュへのブルートフォースに対する追加の保護が提供されます。これは、NIST FIPS 180-4によって定義されているSHA2アルゴリズム(sh256、sha384およびsha512)およびNIST 800-132によって定義されているPBKDF2導出関数を使用して、ハッシュの計算を計算上より難しくしています。

- 追加の拡張ハッシュ・アルゴリズム(SHA256、SHA384またはSHA512)をハッシュ・モードとして指定できるようになりました。
- 実行する拡張ハッシュ移行のタイプも指定できるようになりました。
 - 完全移行は、FND_USER表のすべてのレコードをハッシュ・モードに移行します。
 - バックグラウンド移行は、コンカレント・プログラムとしてバックグラウンドでFND_USER表のすべてのレコードを選択した拡張ハッシュ・モードに移行します。
 - 部分的な移行では、選択した拡張ハッシュ・モードで新しいパスワードを作成したユーザーと以前の暗号化モードのユーザーを共存させることができます。以前の暗号化モードのユーザーはログインできますが、その後のパスワードの変更によって、選択した拡張ハッシュ・モードにそれらのユーザーが切り替えられます。

注意: 部分的な移行は、拡張ハッシュ・モード間での変更のために使用され、完全移行またはバックグラウンド移行の後にのみ行う必要があります。部分的な移行を最初に実行した場合、完全移行はそれ以降実行できません。

4.2.7. リリース12.2.4

4.2.7.1. 標準要求発行の動的デフォルト・パラメータの再計算

標準要求発行で使用されるパラメータは、SQL文、プロファイル・オプション値または現在の日付や時刻を使用して動的に生成されたデフォルト値を保持できます。リリース12.2.4以前では、要求の再発行またはコピーの場合、元のパラメータ値が常に再使用されます。リリース12.2.4では、フラグ「デフォルト・パラメータの再計算」を設定することによって、要求を再発行またはコピーするときにパラメータ値を再計算するかどうかを決定できます。

4.2.7.2. キー・フレックスフィールド・ウィンドウをデフォルトで開くことを制御するためのプロファイル・オプション

プロファイル・オプション「フレックスフィールド: デフォルトでキー・ウィンドウをオープン」は、ユーザーが[Tab]を押して連結キー・フレックスフィールド・フィールドから移動するときに、フレックスフィールド・ウィンドウを開くかどうかを制御します。少なくとも1つのセグメントにデフォルト値が定義されている場合にのみ開きます。ユーザーが連結フレックスフィールドで[Tab]を押すと、定義されている値が自動的にデフォルト設定され、ウィンドウが開いて、ユーザーが変更を行うことができるようになります。このプロファイル・オプションに「いいえ」を設定した場合は、変更のためのフレックスフィールド・ウィンドウは開かず、ユーザーがデフォルト設定された値を組合せの一部として使用することが想定されます。

4.2.7.3. サービスごとの環境値およびパラメータの設定

この機能は、定義されたコンカレント・マネージャの環境変数の値の設定、およびJavaサービスのJVMパラメータの設定をユーザーが行うことができるユーザー・インタフェースを提供します。これらの値は、サービス・マネージャが各サービスを開始するときに読み取られて使用されます。

4.2.7.4. 承認されたリダイレクト

承認されたリダイレクト機能は、Oracle E-Business SuiteがWebトラフィックをリダイレクトできる信頼されている認証当局(ホスト、ドメインなど)のホワイトリストのサポートを提供します。また、Oracle E-Business Suiteから明示的に承認されていない認証当局へのリダイレクトを禁止します。この構成は、Oracle E-Business Suiteユーザーへのフィッシング攻撃に対する広範な防御を提供します。

承認されたリダイレクトは、Oracle E-Business Suiteリリース12.2.4でデフォルトでは有効になりませんが、プロファイル・オプションを使用して簡単に有効にすることができます。

4.2.8. リリース12.2.5

4.2.8.1. ログイン・ページの機能拡張

ログイン・ページが拡張され、パフォーマンスおよびセキュリティが改善されました。また、新しいOracle Alta UIのルック・アンド・フィールとなりました。

4.2.8.2. 「検索」ウィンドウでの問合せで付加フレックスフィールドにNull値が許可される

レコードを問い合わせるときに、「検索」ウィンドウ内の付加フレックスフィールドの必要なセグメントのフィールドに値を入力する必要がなくなりました。

4.2.8.3. フレックスフィールドの相互検証ルール違反レポートの機能拡張

このレポートは、特定のフレックスフィールド構造の相互検証ルールに違反している以前に作成されたすべてのフレックスフィールド組合せのリストを提供します。この機能拡張によって、非要約勘定の表示、要約勘定の表示、および要約勘定の無効化を行うオプションが提供されます。

4.2.8.4. フレックスフィールド・テスト・ページ

フレックスフィールド定義の実装をテストする機能が、Oracle Application Frameworkページで使用できるようになりました。このページは、「フレックスフィールド・テスト」フォームと同等です。フレックスフィールド・テスト・ページおよび「フレックスフィールド・テスト」フォームは、Oracleサポート担当者の支援ある場合にのみ使用してください。これは、診断のためにのみ提供されています。

4.2.8.5. コンカレント処理のコマンドライン・ユーティリティ

この新しいコマンドライン・ユーティリティは、様々な既存のユーティリティをcpadminという単一のメニューベースのユーティリティに統合します。このadadminスタイルのユーティリティは、多くのコンカレント処理管理タスクを自動的に実行するために使用できます。

4.2.8.6. ファイル・ストリーミングのためのJSPおよびJava API

新しいJSPおよびJava APIが、サーバーからユーザーのブラウザへのファイルのストリーミングのために提供されています。

4.2.9. リリース12.2.6

4.2.9.1. フレックスフィールド値セット・セキュリティのセットアップ・ウィザード

この新しいウィザードを使用すると、フレックスフィールド値セット・セキュリティ機能を簡単にセットアップできます。以前は、フレックスフィールド値セット・セキュリティでは、付与パラメータのID番号が必要となりました。このウィザードでは、ユーザーは、フレックスフィールド値セット・セキュリティの初期実装でID値を入力することなく、よりわかりやすいデータを入力できます。

4.2.9.2. フレックスフィールド登録HTML UI

キー・フレックスフィールドおよび付加フレックスフィールドの登録、および登録されたフレックスフィールドの検索を行う機能が、Oracle Application Frameworkページで使用できるようになり、開発者が使用できます。

4.2.9.3. 職責レベルまたはユーザー・レベルの読取り専用モードのOracle E-Business Suite Forms

Oracle E-Business SuiteのFormsベースのアプリケーションは、フォームを起動するために使用された基礎となる機能がパラメータ`query_only = 'yes'`を渡した場合、フォームを読取り専用モードで実行することをサポートします。リリース12.2.6では、この機能は職責レベル、ユーザー・レベル、営業単位、またはユーザーのグループに設定できます。ロール・ベースのアクセス管理の「EBS読取り専用」権限セットを使用してこれを有効にできます。この機能は、Formsベースのアプリケーションにのみ使用できます。

4.2.9.4. コンカレント処理のログ・ファイルおよび出力ファイルを格納するための新しいスキーム

この機能拡張は、コンカレント処理の多数のログ・ファイルおよび出力ファイルを管理するためのストレージ・スキームの追加の選択肢を提供します。たとえば、これらのファイルはユーザー名または日付で整理できます。ユーザーは、特定のニーズに最も適したスキームを指定できます。

4.2.9.5. 監査証跡検索HTML UI

「監査証跡検索」ページは、Oracle Application Frameworkページとして使用できるようになりました。これらのページでは、Oracle Formsを起動せずに、監査証跡セットアップ表を問い合わせることができます。

4.2.9.6. デフォルトでの許可済JSPホワイトリストの有効化

リリース12.2.4で導入された許可済JSP (JavaServer Pages)ホワイトリスト機能は、デフォルトで有効にされるようになりました。

4.2.9.7. デフォルトでの許可済リダイレクトの有効化

リリース12.2.4で導入された許可済リダイレクト機能(以前は承認済リダイレクトと呼ばれていました)は、デフォルトで有効にされるようになりました。

4.2.9.8. セキュア構成コンソール

セキュア構成コンソールは、Oracle E-Business Suiteのセキュリティ機能の構成を通じて管理者をガイドするための中心的なUIを提供します。

4.3. Oracle Applications Manager (OAM)

4.3.1. リリース12.1.3

4.3.1.1. アプリケーション・モジュールごとのタイミング・レポートのサポート

既存のOAMタイミング・レポート・ページは、各フェーズの合計経過時間を提供します。この新しい機能拡張は、各アプリケーション・モジュールの実際の実行でかかったパッチ適用時間をパラレル実行を考慮して提供します。製品内の各フェーズの集計タイミング情報を提供します。この機能拡張の一部として、ユーザーは「タイミング・レポート - 製品情報」ページから製品ライセンス・ステータス画面にナビゲートできます。この画面では、ユーザーは「インストール済」、

「共有」または「未インストール」の製品ごとの集計時間を確認できます。同様の変更が AutoPatch のコードに実装されており、各製品のタイミング・レポートの詳細が提供されます。

4.3.2. リリース12.2

4.3.2.1. Oracle Applications ManagerとOracle Enterprise Manager 11g Fusion Middleware Controlの統合

この機能拡張は、Oracle E-Business Suite インスタンスを検出し、Oracle Applications Manager へのナビゲーション・リンクを含めるように、Oracle Enterprise Manager 11g Fusion Middleware Control コンソールを拡張します。Oracle Applications Manager 自体が Fusion Middleware Control と連携して動作するように更新されました。

4.3.3. リリース12.2.2

4.3.3.1. パッチ・ウィザードの詳細ページでのすべてのボタンの表示

大きい結果セットでページ間を移動する必要があるように、「すべて表示」ボタンが「適用済パッチ」、ファイル履歴および「推奨パッチ」詳細ページに追加されました。

4.3.4. リリース12.2.4

4.3.4.1. コードレベルの要約ページのライセンス済製品との同期ボタン

コードレベルの要約ページのライセンス済製品との同期ボタンは、製品の「使用中」フラグをリセットし、実際に「インストール済」または「共有」である製品と一致するようにします。

4.3.5. リリース12.2.5

4.3.5.1. パッチ・ウィザードの合理化された推奨パッチ・リスト

「推奨パッチ結果」ページには、他の推奨パッチに含まれていない推奨パッチのみがデフォルトで表示されます。ただし、ネストしたパッチを表示するように選択でき、それらが含まれているパッチを表示することもできます。

4.3.5.2. パッチ・ウィザードの「推奨パッチ」ページのエクスポート機能

「すべてエクスポート」ボタンを使用すると、推奨パッチ結果表をエクスポートできます。このエクスポート機能では、表のすべてのデータが含まれているカンマ区切りファイル(.csv)が作成され、そのファイルは Microsoft Excel で開くことができます。

4.3.6. リリース12.2.6

4.3.6.1. ライセンス・マネージャの言語モードの選択

Oracle Applications Manager のライセンス・マネージャ機能を使用すると、管理者は軽量モードまたはフル・モードで言語をライセンスできるようになりました(両方のモードが使用可能な場合)。Lightweight MLS のみとしてサポートされる言語は、アスタリスク付きで示され、翻訳モードはグレー表示となり、変更できないことが示されます。また、軽量言語のリストが言語レポート・ページに追加されました。

4.4. Oracle Diagnostics Framework

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.4.1. 概要

Oracle E-Business Suite診断は、診断フレームワークおよび診断テストのリポジトリを構成します。Oracle Diagnosticsフレームワークは、Oracle E-Business Suiteのトラブルシューティングまたはサニティ・チェックのための診断テストを実行するインフラストラクチャを提供します。これらの診断テストは、セットアップやビジネス・トランザクションのトラブルシューティング、製品構成の検証、データの収集、定期的なヘルス・チェックおよびその他のタスクのために使用できます。

4.4.2. リリース12.0.3 (RUP3)

4.4.2.1. 診断実行エンジンおよびユーザー・インタフェースの機能拡張

診断実行エンジンは、長時間実行されるテスト、および大量のレポートが生成されるテストをサポートするように拡張されます。ユーザー・インタフェースは、長時間実行されるテストの実行および監視をサポートするために拡張されます。

4.4.3. リリース12.0.4 (RUP4)

4.4.3.1. 新しい改訂された診断テスト

次に示されている製品には、このリリースで配布された新しい診断テストまたは改訂された診断テスト、あるいはその両方があります。配布されている製品テストおよびテスト詳細へのリンクのリストについては、「E-Business Suite Diagnostics Test Catalog for 12.0.4 Release Update Pack (RUP4)」(My Oracle Supportドキュメント469721.1)を参照してください。

- Advanced Benefits (BEN)
- アドバンスド製品カタログ(EGO)
- Application Object Library (FND)
- アプリケーションDBA (AD)
- 資産(FA)
- バランス・スコアカード(BSC)
- 部品構成表(BOM)
- Business Intelligence System (BIS)
- 資金管理(CE)
- 回収(IEX)
- CRMテクニカル・ファウンデーション(JTT)
- カスタマ・ケア(CSC)
- 文書管理およびコラボレーション(DOM)
- E-Business Tax (ZX)
- エンジニアリング(ENG)
- エンタープライズ資産管理(EAM)

- フィールド・サービス(CSF)
- 一般会計共通モジュール(FUN)
- 一般会計(GL)
- Grants会計(GMS)
- 人事(PER)
- 導入ベース(CSI)
- 在庫管理(INV)
- iProcurement (ICX)
- 品目マスター(ITM)
- マーケティング(AMS)
- 受注管理(ONT)
- パートナ管理(PV)
- 買掛(AP)
- 給与(PAY)
- プロジェクト(PA)
- 公共部門財務インターナショナル(IGI)
- 購買(PO)
- 見積(QOT)
- 売掛(AR)
- リリース管理(RLM)
- 営業(ASN)
- サービス(CS)
- 出荷(WSH)
- スペア管理(CSP)
- テレセールス(AST)
- 勤怠管理(HXT)
- 取引管理(OZ)
- 取引先コミュニティ・アーキテクチャ(HZ)
- 工程管理(WIP)

Oracle E-Business Suite R12で利用できる診断テストの完全なリストについては、「E-Business Suite Diagnostics Test Catalog for R12」(My Oracle Supportドキュメント421245.1)を参照してください。

4.4.4. リリース12.0.6 (RUP6)

4.4.4.1. 診断の機能拡張

Oracle E-Business Suite診断は、診断テストを管理および実行するための新しいユーザー・インタフェースを提供するように拡張されました。この新しいUIには、RBACに基づいたユーザー管理セキュリティ・モデルが組み込まれています。また、レポート・エンジンはOracle XML Publisherと統合されるようになりました。

4.4.5. リリース12.1.1

リリース12.1.1では、Oracle Diagnostics Frameworkは、高パフォーマンスの診断エンジン、わかりやすいアクセスとレポート、および統合されたアプリケーション・セキュリティ・モデルを提供するように再設計されました。新しいOracle Diagnostics Frameworkにアクセスするには、ユーザーはアプリケーション診断職責および診断ロールを持っている必要があります。Oracle E-Business Suite診断スクリプトにアクセスするには、新しいOracle E-Business Suite診断ロールを使用して診断テストを実行および構成します。

4.4.5.1. パフォーマンスの改善

Oracle Diagnostics Frameworkエンジンは、長時間実行されるテストおよび大量のレポートをサポートするようになりました。各要求は、一意の要求名を使用して追跡できます。

4.4.5.2. ロール・ベースのアクセス制御の活用

Oracle E-Business Suite診断セキュリティ・モデルは、ロール・ベースのアクセス管理(RBAC)に基づいて再記述されました。外部の規制および監査要件のために、一部のユーザーは同じリソースまたはユーザーに無制限の実行と無制限のアクセス権設定の両方を割り当てることができません。無制限の実行アクセス・ロールと無制限のアクセス設定ロールを区別する必要があります。RBACを使用すると、より詳細なレベルでセキュリティを施行できます。この変更によって、ユーザーに割り当てられているロールに基づいてユーザーがアクセスできるアプリケーションIDおよび機密性レベルを宣言できます。

RBACモデルを活用することによって、ロールは職責を介してユーザーに付与できます。ロールは、ロールの継承、およびより低いレベルの権限およびデータ・セキュリティ・ポリシーを介して、職責と他のロールを統合するように定義できるようになりました。これは、すべての権限がロールに割り当てられる1回かぎりのセットアップを介して実現されます。

ユーザーは、アプリケーション診断と呼ばれるシード職責を使用してOracle E-Business Suite診断機能にアクセスできます。診断スーパーユーザー、アプリケーション・スーパーユーザーおよびアプリケーション・エンド・ユーザーという3つのシードのロールがあります。これらのロールの割当は、Oracleユーザー管理(UMX)を介して実装できます。システム管理者は、RBACを使用してより詳細なロールを定義し、ユーザーによる実行およびアクセス設定を制限できます。新しいロールはOracleユーザー管理を使用して管理します。

4.4.5.3. テスト・レベルのセンシティビティ

Oracle Diagnostics Frameworkには、グループ・レベルではなくテスト・レベルでセンシティビティ・レベルを設定する機能が追加されました。グループは、いくつかの共通の機能に基づいてテストを分類するために使用されます。各グループは、異なるセンシティビティ・レベルのテストを持つことができるようになりました。

4.4.5.4. Oracle XML Publisherの統合

Oracle Diagnostics Frameworkレポート・エンジン、Oracle XML Publisherレポート・エンジンと統合するために再記述されました。この統合により、ユーザーは4つのレポート・スタイル(PDF、RTF、HTMLまたはEXCEL)から選択できます。これらのXMLレポート形式に加えて、ユーザーは標準のXMLレポートに表およびツリー構造を含めた診断テストを記述できます。また、Oracle Diagnosticsは独自の組込みインライン・レポート形式(デフォルトの形式)を提供しています。Oracle XML Publisherを活用できるのは、新しいレポート・ライブラリを使用して記述された新しいテストのみです。これらの形式の導入前に記述されたすべてのテストは、HTMLレポート形式に制限されます。ユーザーは、レポートの保存、またはOracle Supportへのレポートのアップロード、あるいはその両方を行うことができます。

4.4.5.5. UIの機能拡張

ユーザー・インタフェースは、Oracle XML Publisherとの統合、ブラウザのルック・アンド・フィールへの準拠、RBACの活用、および長時間実行されるテストや大量のレポートの追跡をサポートするように拡張されました。

4.4.5.6. カスタマイズのサポート

Oracle Diagnostic Frameworkは、カスタム職責を持つユーザーが使用して、診断テストを実行できるようになりました。シードのOracleアプリケーションから複製されたアプリケーションを実行するユーザー、またはローカライゼーションを実行するユーザーは、カスタム・ロールを作成して、そのマップをOracleのシードのアプリケーションに付与できます。これを行うと、システムはカスタム・アプリケーション/ローカライズされたアプリケーションとシードのアプリケーションのマッピングを認識します。このフレームワークによって提供される職責LOVには、カスタム・アプリケーションに関連付けられているユーザーの職責が表示されるようになりました。

4.4.5.7. ロール・ベースのアクセス制御および有効なアプリケーション

アプリケーション・スーパーユーザーは、テストが登録されているアプリケーション、またはテストに有効として構成されているアプリケーションに対する有効な職責がある場合、センシティビティが高または中のテストを実行できます。アプリケーション・エンド・ユーザーは、テストが登録されているアプリケーション、またはテストに有効として構成されているアプリケーションに対する有効な職責がある場合、センシティビティが中のテストを実行できます。診断ロールを持つユーザーは、アプリケーションに登録されているセンシティビティが低いテストにアクセスできます。

4.4.5.8. テスト・セットのスケジューリング

Oracle Diagnostic Frameworkでは、ユーザーがテスト・セットをスケジュールできるようになりました。ユーザーは、固有の入力値を使用してテスト・セットを作成し、それらをスケジュールできます。フレームワークは、テストの実行時に、テスト・セットxmlファイルの一部として格納されているテスト入力値を使用します。指定された入力値がない場合、フレームワークはデータベースに格納されている事前構成された入力を使用します。入力値が提供されない場合、テストは実行中にスキップされます。

4.4.5.9. 優先されるプロファイル・オプション

ODのお気に入りアプリケーション・プロファイル・オプションを使用すると、ユーザーはデフォルトのアプリケーションを設定できます。設定すると、デフォルト・アプリケーションは診断テスト・ページに表示されます。デフォルト・レポート書式プロファイル・オプション機能を使用すると、

ユーザーはデフォルトのレポート形式を設定できます。予期される値は、html、pdf、excelおよびrtfです。

4.4.5.10. パフォーマンス・プロファイル・オプション

収集しきい値プロファイル・オプションを使用すると、システム管理者はデータベースに保存する前にメモリーに維持する必要があるレポート・ノード数を設定できます。
SQLブロック・サイズ・プロファイル・オプションを使用すると、システム管理者は問合せの実行後にデータベースから取り出す必要があるレコード数を設定できます。このプロファイル値は、表形式データを表示するときに使用されます。すべてのデータを取り出してそれらをメモリーに保持すると、パフォーマンスの問題の原因となります。「ワーカー・スレッド数」プロファイル・オプションを使用すると、システム管理者は実行エンジンが要求を実行するために使用するコンカレント・スレッドの数を増やすことができます。

4.4.6. リリース12.1.2

4.4.6.1. XMLファイル・タイプの認識

Oracle Diagnostics Frameworkは、XMLファイル・タイプの診断をサポートするようになりました。XMLファイル・タイプの診断テストは、単一のテストまたはテスト・セットとして登録、スケジュールおよび実行できます。その後、これらのテストのレポートを作成およびダウンロードできます。XMLタイプの診断パッチはホット・モードで適用できるため、XMLタイプの診断では、パッチ適用のための停止時間をスケジュールする必要がなくなります。

4.4.7. リリース12.1.3

4.4.7.1. インコンテキスト診断

インコンテキスト診断は、Oracle Application Frameworkのインライン・ポップアップ機能を使用しており、ユーザーは「診断」画面にナビゲートしてテストを実行することなく、現在の製品ページから診断テストの入力、実行、および結果やレポートの表示をすべて行うことができます。

4.5. Oracle E-Business Suite Applications DBA

4.5.1. リリース12.0.2 (RUP2)

4.5.1.1. ベース言語スクリプトの変更

Oracle E-Business Suiteには、既存のインストールされている言語をアプリケーション・システムのベース言語に変更する場合に更新する必要がある単一言語の表が含まれています。ベース言語変更スクリプト`adchgbase.pl`は、RUP2で配布される新しいユーティリティであり、これらの表および対応するシード・データを新しいベース言語に更新します。新しい言語をベース言語としてインストールする場合、このユーティリティは必要ありません。

既存のインストールされている言語をベース言語に変更するには、Oracle License Managerを使用します。Perlスクリプト`adchgbase.pl`を実行します。このスクリプトは、使用している環境のシード・データに基づいてパッチ・ドライバ`u_ChangeBase.drv`を生成します。このドライバは、Autopatchを使用してアプリケーション・システムに適用します。問題があった場合は、ログ・ファイルを確認してください。

4.5.2. リリース12.2

4.5.2.1. オンライン・パッチ適用

リリース12.2の主な機能の1つは、オンライン・パッチ適用への切替えです。詳細は、3.3.6.2項を参照してください。

4.5.3. リリース12.2.4

4.5.3.1. オンライン・パッチ適用のログ・アナライザ

この新しいユーティリティは、エラーおよび警告についてadopログ・ディレクトリを自動的に分析し、オンライン・パッチ適用サイクルでの問題をユーザーが識別できるように設計されたレポートを表示します。ログ・アナライザは手動で実行することもできます。

4.5.3.2. 新しいオンライン・パッチ適用クリーン・アップ・モード

adopパッチ適用ユーティリティは、cleanup_modeパラメータの新しい値をサポートします。

cleanup_mode=standard

この新しいモードは、既存のクリーン・アップ・モードに追加されました。

cleanup_mode=quick

cleanup_mode=full

standardモードの動作は、quickモードと同じですが、covered_objectsを削除するアクションが追加されています。standardモード(デフォルトになりました)の目的は、SYSTEM表領域が大きくなりすぎることを防ぐことです。

4.5.4. リリース12.2.5

4.5.4.1. 単一ファイル・システム開発環境でのパッチ適用のサポート

リリース12.2の通常のオンライン・パッチ適用環境では、2つのアプリケーション層ファイル・システム(エディションを実行するために1つ、およびパッチ・エディション用に1つ)が必要となります。このデュアル・ファイル・システム・アーキテクチャは、Oracle E-Business Suiteリリース12.2でのパッチ適用の基盤であり、本番環境および本番を模したテスト環境で必要となります。この機能拡張によって、単一のファイル・システムを持つ開発環境が可能になり、カスタム・コードを作成してテストできます。そのような開発環境で停止時にパッチ適用することをサポートするために使用できるadopフェーズおよびモードは限定されています。コードは、本番に適用する前に、標準のデュアル・ファイル・システムのテスト環境でテストしてください。

4.5.4.2. EBS Technology Codelevel Checker (ETCC)とadopの統合

adopユーティリティは、Oracle E-Business Suiteデータベースに最新のフィックスが適用されていない場合、警告メッセージを表示するようになりました。

4.5.4.3. 拡張されたadopコンソール・メッセージ

adopユーティリティは、より選択された情報がコンソールに表示されるように拡張されました。パッチ適用コマンドをより簡単に使用できるように、メッセージ、プロンプトおよびその他のUI要素も広範に改良されました。

4.5.4.4. 新しいadop監視ツール

オンライン・パッチ適用サイクルの進行状況を確認するには、新しいオンライン・パッチ適用監視ユーティリティ(adopmon)を実行します。これを使用すると、パッチ適用サイクルの全体的な進行状況を確認したり、実行された様々な個別のadopアクションを確認したりできます。

4.5.4.5. adop操作のパフォーマンスの改善

オンライン・パッチ適用インフラストラクチャでは、アクションの適用および中止の並列化が採用されるようになり、それらのフェーズがより速く完了するようになりました。また、オンライン・パッチ適用サイクルにおいてデータベース接続が使用されるようになったため、より効率的になりました。

4.5.4.6. オンライン・パッチ適用のログ・アナライザ・ユーティリティによって改善されたOracle WebLogic Serverエラー・レポート

adopsanlogオンライン・パッチ適用ログ・アナライザ・ユーティリティは、fs_clone操作で発生することがあるOracle WebLogic Serverエラーを検出して報告するようになりました。

4.5.4.7. カスタム・アプリケーションを登録解除する機能

カスタム・アプリケーションを登録解除できるようになりました。たとえば、アプリケーションがAD Splicer要件に準拠していない場合、またはパッチ適用サイクルに必要な場合、登録解除が必要となることがあります。登録解除は、\$AD_TOP/bin/adDeregisterCustomProd.plスクリプトを実行することによって実行します。

4.5.5. リリース12.2.6

4.5.5.1. ログ・ファイルの構造

ログ・ディレクトリ構造は、関連するログ・ファイルの検出および解釈を容易にするため、およびタイムスタンプの競合(複数のリモート実行が並列で実行された場合に発生することがあります)などの問題を回避するために改良されました。

4.5.5.2. シード・データの変更の処理

シード・データ表には、オラクル社によって出荷されたシード・データが含まれています。オンライン・パッチ適用サイクル中は、データ行へのパッチ適用がアプリケーションの実行に影響しないように、実行行セットのコピーが維持されます。オンライン・パッチ適用サイクルが開始され、シード・データへのパッチ適用が必要になると、新しいコピーが実行コピーから生成され、古いコピーがクリーン・アップ中に削除されます。これらの操作にかかる時間は、シード・データ表のサイズに比例しますが、すべてのシード・データ表で常に2つの行セットが維持される新機能によって短縮されます。

4.5.5.3. デルタ同期方法

新しいデルタ同期方法を使用すると、オンライン・パッチ適用サイクルの準備フェーズ中に、パッチ・ファイル・システムのアプリケーション層と実行ファイル・システムのアプリケーション層を同期できるようになりました。このデルタ同期方法は、他の2つの方法よりかなり速く、ユーザーが選択したサードパーティのユーティリティを使用してファイル・システムを同期します。この処理では、適用可能なファイルをソース・ディレクトリから宛先ディレクトリにコピーし、必要に応じて、ユーザーが除外ファイルに指定したファイルおよびディレクトリを無視します。この同期方法を使用するには、パラメータsync_mode=deltaを指定します。

4.5.5.4. 欠落しているアプリケーション層パッチの警告

adopユーティリティは、必要なアプリケーション層パッチが適用されていない場合、メッセージを表示するようになりました。

4.6. Oracle E- Business Suite Information Discovery

4.6.1. 概要

Oracle E-Business Suite Information Discoveryは、出荷されたすべてのモジュールの事前作成済のコンテンツとともに配布されます。このコンテンツを使用すると、新しいビジネス・インサイトが提供され、ユーザーの生産性が向上し、よりよい意思決定を行うことができます。新しいOracle E-Business Suite Information Discoveryダッシュボードを使用すると、アドホックな質問への回答、および変化するビジネス状況へのすばやい対応が可能になります。これらのアプリケーションは、複数の標準、出荷済の業務レポートおよびカスタム・レポートを拡張された機能に置き換えることによって、ビジネスを推進するように設計されています。

4.6.2. リリース12.2 V7

4.6.2.1. Oracle Endeca Information Discovery 3.2へのアップグレード

Oracle Endeca Information Discovery (EID) 3.2への移行の一部として、次のコンポーネントのバージョンが更新されます。

- Oracle Endeca Server は 7.6.x から 7.7.0 にアップグレードされます。
- CloverETL Server は 4.1 にアップグレードされます。
- このリリースでは次のもののサポートが追加されています。
 - Java 7 および 8
 - Oracle WebLogic Server 12c (12.1.3)
 - Internet Explorer 11

4.6.2.2. 新しいレイアウト・テンプレート

ユーザー・エクスペリエンスを向上させるために、新しいレイアウトが導入されました。

- 検索ボックスは、Oracle E-Business Suite Information Discoveryダッシュボードの右上に位置が移動されました。
- 個別の使用可能な絞込みフィルタおよびブックマーク・コンポーネントに左側のバーが導入されました。

- スクリーンショット機能が追加されました。

4.6.2.3. サマリー・バーのメトリックの絞り込み

新しい機能を使用すると、ユーザーは複数の条件を使用してInformation Discoveryダッシュボードを直接絞り込むことができます。また、各メトリックを使用すると、新しい宛先ページに必要な応じてナビゲートできます。

4.6.2.4. 拡張されたOracle E-Business Suiteの結果グリッド機能

このリリースでは、2つの新機能が追加されました。

- 星評点 - Oracle E-Business Suite の結果グリッド項目をなじみのある UI ですばやく確認します。このレーティングを使用すると、Information Discovery ユーザーはビジネス業務を評価し、それに応じて迅速な対応を取ることができます。
- インジケータ・アイコン - Oracle E-Business Suite の各結果グリッド項目に明確なサムネイル・アイコンの形式でわかりやすいビジネス・タグを表示します。これらのアイコンによって、Information Discovery ユーザーは項目を簡単に評価および比較し、効率的なビジネス・アクションを迅速に取ることができます。

4.6.2.5. 拡張された言語サポート

このリリースで拡張された言語サポートには、次のものがあります。

- 22 の追加の言語に対する完全な UI サポート
- ビジネス・ユーザーのための Studio 翻訳
- RTL 言語(アラビア語とヘブライ語)のための拡張サポート

4.6.2.6. EndecaServer.propertiesファイルの変更

このリリースでは、EndecaServer.propertiesファイルに次の新しいEndeca Serverパラメータが含まれています。

Endeca Server の パラメータ	説明	デフォルト
endeca-disable-entity-validation-refresh	(オプション)。エンティティ検証を Endeca Server で有効にするかどうかを指定します。 EndecaServer.properties ファイルにない場合、検証が実行されます(これがデフォルトです)。このフラグを指定して true を設定した場合にのみ、検証はスキップ(無効化)されます。この値を変更するには、ファイルを編集して Endeca Server を再起動します。 注意: 更新フェーズまたはデータ・ロード・フェーズ中に、大量のエンティティをデータ・ドメインに追加している場合は、パフォーマンスを改善するためにこのフラグを使用できます。それ以外の場合は、このフラグを使用しないでください。	Y

また、プロパティ・ファイルには、新しい2つのクラスタ・コーディネータ・パラメータが含まれています。Endeca Serverは、これらのパラメータを使用して、ZooKeeperがデータ・ディレクトリに維持するログのスナップショットの数、およびZooKeeperが自動ログ・クリーン・アップを実行する頻度を制御します。

クラスタ・コーディネータ・パラメータ	説明	デフォルト
endeca-cluster-coordinator-auto-purge-snap-retain-count	クラスタ・コーディネータ・データ・ディレクトリに維持するログ・スナップショットの数を指定します。このパラメータはデフォルトで3に設定されます。	Y
endeca-cluster-coordinator-auto-purge-interval	ログ・スナップショットの自動削除の間隔を指定します。このパラメータはデフォルトで1時間に設定されます。ZooKeeper のログ・スナップショットの自動削除を無効にするには、タスク間隔に0 (ゼロ)時間を設定します。	Y

4.6.2.7. ホスト名解決の改善

Endeca Server 7.7では、完全修飾ドメイン名(FQDN)またはFQDNの最初の部分が、ホスト名解決のために必要となります。Endeca Serverおよびそのクライアントが同じドメイン・ネットワークで実行されている場合は、FQDNの最初の部分を使用します。それ以外の場合は、完全なFQDNを使用します。

4.6.2.8. 新しいデータ・ドメインに作成されるプロファイル・ファイル

Endeca Serverバージョン7.6.1.13以降では、作成した新しい各データ・ドメインについて、Endeca Serverは内部.profileファイルを自動的に作成し、データ・ドメインの索引の一部として格納されます。.profileファイルには、新しく作成された各データ・ドメインのデータ・ドメイン・プロファイル情報が格納されます。

このファイルを自動作成することにより、バックアップおよび復元(エクスポートおよびインポート)中のデータ・ドメインの保守が簡略化されます。カスタム・データ・ドメイン・プロファイルを追跡する必要がなくなったため、以前にエクスポートされたデータ・ドメインをインポートするときにこの機能を使用できます。

4.6.2.9. クラスタ・コーディネータによる自動ログ・クリーン・アップ

このリリースでは、クラスタ・コーディネータはログを自動的にクリーン・アップするように更新されました。クリーン・アップはデフォルトで有効になります。ログのクリーン・アップについて、Endeca Serverは、EndecaServer.propertiesファイルの新しい2つのパラメータを使用して、ZooKeeperがデータ・ディレクトリに維持するログのスナップショットの数、およびZooKeeperが自動ログ・クリーン・アップを実行する頻度を制御します。

- endeca-cluster-coordinator-auto-purge-snap-retain-count は、ZooKeeper データ・ディレクトリに保持するスナップショットのログの数を設定し、デフォルトでは3に設定されます。

- `endeca-cluster-coordinator-auto-purge-interval` は、ログのクリーン・アップ・タスクの間隔を設定(時単位)し、デフォルトでは1に設定されます。ZooKeeper の自動ログ・クリーン・アップを無効にするには、0 (ゼロ)を設定します。

詳細は、4.6.2.6項を参照してください。

4.6.2.10. アプリケーション層配置の最適化

アプリケーション層の配置を最適化するために、次の機能拡張が行われました。

- Weblogic のすべての管理サーバーおよび管理対象サーバーは、Java8 で実行されます。
- Endeca Server と Integrator Server は、1 つのドメインに統合されました。
- このリリースでは、Endeca Server、Studio および Integrator の 3 つの管理対象サーバーに 1 つの管理サーバーを使用します。
- 1 つの JNDI 定義が Integrator と Endeca Studio で共有されます。
- 統合、および ADF ランタイムへの依存の排除により、インストーラのサイズが縮小されました。

4.6.2.11. 診断の機能拡張

`get-logs` コマンドは、WebLogic、Dgraph および クラスター・コーディネータ(ZooKeeper)のログ・ファイルを取得し、それらを単一の zip ファイルに圧縮します。構成ファイルは、コマンドで必要な設定(zip ファイルの宛先パス、インストール環境が単一ノードまたはクラスター化環境のいずれであるかなど)を指定します。

4.6.2.12. 改善されたバルク・ロード・インタフェースによる無効なレコードの処理

以前は、データ・ドメインにロードするために送信されたレコードのバッチに無効な XML 文字を持つレコードが含まれていた場合、バルク・ロード・インタフェースはレコードのバッチ全体(有効なデータを持つレコードを含む)を拒否しました。このリリースでは、レコード・バッチ全体を拒否するかわりに、Dgraph は無効なデータを持つ個別のレコードのみを拒否し、そのレコードが拒否された理由を通知します。

4.6.2.13. 新しいEQL関数

新しいEQL関数 `CountDistinctMembers` が追加されました。`CountDistinctMembers` 関数は、複数割当属性(複数の割当値を持つ管理対象属性)にのみ適用されます。この関数はカーディナリティ関数のかわりに使用できます。これらの2つの関数は同等ですが、`CountDistinctMembers` のほうが高速です。

4.6.2.14. ジオコードに基づくレコードのソート

会話型Webサービスでは、指定された参照点からの距離によって、ジオコード属性値を持つレコードをソートできます。

4.6.2.15. 同時ETLの機能拡張

コンカレントETLジョブでは、インテグレータETLジョブのステータスが正確に反映されるようになりました。コンカレント・ジョブは、ETLジョブが終了状態で終了するまでブロックします。Oracle E-Business Suiteスキーマの実行IDも取得します。

訂正処理を行うために役立つメッセージをユーザーに提供するために、次の検証および診断が追加されました。

- FND_EID_INTEGRATOR_URLプロファイルが設定されていない - 要求はエラーで終了します。ユーザーはプロファイルを設定して要求を再実行するように通知されます。
- Clover資格証明がEBS FND_VAULTに格納されていない - 要求はエラーで終了します。ユーザーはセットアップ後手順3を実行するように通知されます。
- 無効なClover資格証明が渡された - 要求はエラーで終了します。ユーザーはClover資格証明を修正するように通知されます。
- Clover URLが有効ではない - 要求はエラーで終了します。ユーザーは、プロファイルに記述されているClover URLが正しいこと、およびCloverが起動されていることを確認するように通知されます。

4.7. Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイ

4.7.1. ビジネス・ケース

ますます統合され相互依存した異種混合のアプリケーション環境で、サービス指向アーキテクチャ(SOA)およびWebサービスは、多数のビジネス上の利点を提供しています。一貫性があり堅牢で保守可能な統合ポイントが提供され、ビジネス業務およびITのコストとリスクが削減されます。具体的には、ビジネス・ロジックおよび統合ポイントを統合することによって、包括的な信頼性および柔軟性が加わります。ただし、SOAの機能を享受するには、基礎となるビジネス・サービスが適切に形成され、アプリケーションによって一貫性のある方法で使用され、適切に管理されることが必要となります。また、Oracleの観点では、供与されるサービスがアプリケーション統合アーキテクチャ(AIA)に適合している必要があります。これらの目標を実現するために、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.1では、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイと呼ばれる新しい製品という形で包括的なSOAベースの統合インフラストラクチャを開発しました。この製品は、異機種混合のエコシステムで組織が統合のためのWebサービスを提供、使用および監視するために役立ちます。Oracle E-Business Suiteは、AIAおよびより一般的なビジネス・ニーズに適合するように適切に形成されたいくつかのビジネス・サービスも提供しています。

4.7.2. 概要

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、リリース12.1.1での新しい製品であり、新しいコンポーネントおよび統合リポジトリなどの既存のコンポーネントへの機能拡張が含まれています。統合SOAゲートウェイは、すぐに使用できる堅牢なサービス指向アーキテクチャ(SOA)ベースの統合インフラストラクチャであり、サービスを提供および使用します。

- 統合リポジトリ
- SOAプロバイダ

- サービス起動フレームワーク
- SOAモニター

4.7.3. リリース12.1.1

4.7.3.1. 統合リポジトリ

統合リポジトリは、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.1のSOA有効化のための中心的なUIコンポーネントです。統合リポジトリは、次の機能を提供するために拡張されました。

- サービス有効化UI
統合リポジトリは、特定の統合インタフェースのWebサービスを生成および配置する管理者のアクションのためのUIを提供します。
- 統合リポジトリのビジネス・イベント
リリース12.1.1の統合リポジトリには、ビジネス・イベントがアノテーション付きの登録された統合インタフェースとして含まれています。ビジネス・イベントは統合リポジトリで参照でき、統合リポジトリUI自体から統合のためにサブスクリプションを有効にできるようになりました。
- コンポジット・サービス
リリース12.1.1では、統合リポジトリはコンポジット・サービスもサポートします。コンポジット・サービスは、ビジネス・サービスとも呼ばれ、小さな特性がありますが、個別のビジネス・プロセスのOracle E-Business Suiteのすぐ可以使用できるWebサービスの呼出しをオーケストレーションします。統合開発者は、Oracle E-Business Suiteのすぐ可以使用できる複数のWebサービスを適切に組み合わせることによって実装できるコンポジット・サービスを設計できます。
- ビジネス・サービス・オブジェクト
ビジネス・サービス・オブジェクトは、ビジネス・サービス・オブジェクトに対するアクセスおよび操作を行う方法を提供する標準のサービス・インタフェースを実装します。サービス・インタフェースは、サービスを開発するための一連の標準的なガイドラインおよび実装の手順を提供します。これらのインタフェースを実装するクラスは、統合リポジトリのWebサービスとして配置できます。

4.7.3.2. SOAプロバイダ

Oracle E-Business SuiteのSOA対応を有効にする設計時または実行時に行われる2つの主なアクティビティがあります。

- 配置時に、サービス・ジェネレータは統合リポジトリから統合インタフェースをWebサービスとして公開し、サービス・デプロイヤーはWebサービスを配置します。
- 実行時に、SOAプロバイダはOracle E-Business SuiteサービスへのSOAP要求をインターセプトし、認証および認可のセキュリティ・モデルに従って、適切なSOAP応答またはエラー・メッセージを送り返します。

4.7.3.3. サービス起動フレームワーク

Oracle E-Business Suiteは、サービス起動フレームワーク(SIF)を提供するようになりました。Oracle E-Business Suite内からのSIFは、Oracle Workflow Javaビジネス・イベント・システムを使用して有効にされ、Oracle Application ServerからのWSIF (Web Services Invocation Framework)サポートに基づいています。WSIFは、サービスの提供場所および提供方法に関係なくWebサービスを呼び出すための簡単なJava APIです。

Oracle E-Business Suite SIFを使用すると、統合開発者は、Webサービスの実装方法およびアクセス方法にかかわらず、通常のプログラミング・モデルであるSOAP (Simple Object Access Protocol) APIを直接使用するかわりに、WSDL摘要を使用してWebサービスの抽象表現を操作できます。

Oracle E-Business SuiteのSIFは、WSIF標準を実装し、実行時のWebサービスに関するメタデータの検査に基づいて、Webサービスのスタブレスな呼出しまたは完全に動的な呼出しを実行できます。

4.7.3.4. SOAモニター

実行時にSOAプロバイダがOracle E-Business Suiteサービスの受信SOAP要求を実行するとき、SOAモニターはWebサービスのSOAP要求および対応するSOAP応答またはエラー・メッセージを監査するための機能を提供します。SOAモニターは、要求されたWebサービスに関する情報(SOAP要求と応答の詳細、Webサービスの応答のステータス、送信者の詳細など)を提供します。

4.7.4. リリース12.1.2

4.7.4.1. 拡張されたSOA診断

SOA診断には、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイの健全性をチェックできる広範な診断テストが含まれています。

この機能は、管理者、開発者およびビジネス・アナリストが潜在的な問題を診断、分離およびトラブルシューティングするための診断機能を提供します。SOA診断は、インストール、配置の準備、および統合操作を対象としています。

4.7.4.2. 統合インタフェース・タイプとしてのフォーム用Java APIの導入

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイでは、フォーム用Java APIと呼ばれる新しい統合インタフェース・タイプが導入されました。フォーム用Java APIインタフェースは、既存のコード・ベースを修正することなく、Oracle Forms内に含まれているビジネス・ロジックを公開します。

フォーム用Java APIは、XMLドキュメントベースの統合インタフェースであり、Oracle Formsのビジネス・ロジックを実行するためにJavaクラスでラップされています。

このインタフェース・タイプは、Oracle Integration Repositoryにもカタログされており、これらのインタフェースがOracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイを介してネイティブにサービス対応になります。

4.7.4.3. Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイのカスタマイズ (統合リポジトリ・パーサー)

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、ほとんどすべての既存のインタフェース・ファイルのためのカスタム統合インタフェースをサポートするようになり、それらをカスタムWebサービ

スとして配置できます。このカスタマイズ機能は、統合リポジトリ・パーサーを介して有効になります。

統合リポジトリ・パーサーは、設計時のツールであり、ソース・ファイルのアノテーション・ドキュメントおよびソース・コードを読み取り、ファイル拡張子.ildtを付けて統合リポジトリのローダー・ファイルを作成します。カスタムildtファイルをOracle E-Business Suiteインスタンスにアップロードすると、統合リポジトリのそのインスタンスの一連のシード済統合エンドポイントおよびカスタム統合エンドポイントをすべて表示できます。

カスタム統合インタフェースのサービスの有効化は、Oracleのシード済統合インタフェースのサポート方法と同様に処理されます。

4.7.5. リリース12.1.3

4.7.5.1. 統一された静的なXSDスキーマ・ファイルの命名法およびスキーマ構造

以前は、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、同じサーバーにWebサービスを再生成するときに、別のサーバーにWebサービスを生成するときに異なる命名法およびスキーマ構造でXSDスキーマ・ファイルを作成しました。この製品は、同じサーバーでのサービスの再生成、または別のサーバーでのサービスの生成において整合性が保たれるように、統一された静的なXSDスキーマ・ファイルの命名法およびスキーマ構造を作成するように拡張されました。この機能により、WebサービスのためにWebサービス・クライアントが作成された後に、統合トランザクションの実行で障害の原因とならないようになりました。

4.7.5.2. 拡張されたロギング/監査および監視

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイのロギング・メカニズムは、管理者、開発者およびビジネス・アナリストに統合フローの実行時エラーに関する完全な可視性を提供し、対象となる問題の識別および解決に重点を置くように拡張されました。ログの粒度が細くなり、統合トランザクションのよりよい可視性のために永続的な監視機能をいつでも使用できるようになりました。また、オプションの監査機能は、統合トランザクションに関するより詳しい情報を提供します。

4.7.5.3. SAMLトークンのサポート

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、SAML認証をサポートするようになりました。SAMLは、WSセキュリティに記述されているSOAPベースのWebサービスの認証メカニズムの1つです。

4.7.6. リリース12.1.3+

4.7.6.1. RESTサービスのサポート

- RESTサービスとしてのPL/SQL APIのサポート

この機能は12.2.3からバックポートされました。この製品の12.2.3項の完全な機能の説明を参照してください。

- RESTサービスとしてのJava APIのサポート

この機能は12.2.4からバックポートされました。この製品の12.2.4項の完全な機能の説明を参照してください。

- アプリケーション・モジュール・サービスのサポート

この機能は12.2.5からバックポートされました。この製品の12.2.5項の完全な機能の説明を参照してください。

- **RESTサービスとしてのコンカレント・プログラムのサポート**

PL/SQL APIと同様に、SOAPサービスおよびRESTサービスとしてコンカレント・プログラムを公開できます。

注意: 現在、コンカレント・プログラムRESTサービスのサポートは、リリース12.1.3+でのみ使用可能であり、リリース12.2では使用できません。

4.7.6.2. セキュリティ・サービス

この機能は12.2.3からバックポートされました。この製品の12.2.3項の完全な機能の説明を参照してください。

4.7.6.3. Java Beanサービスのアノテーション

この機能は12.2.4からバックポートされました。この製品の12.2.4項の完全な機能の説明を参照してください。

また、アプリケーション・モジュール・サービスのサポートの一部として、アノテーションがこれらのサービスもサポートするように拡張されました。この機能は12.2.5からバックポートされました。この製品の12.2.5項の完全な機能の説明を参照してください。

4.7.7. リリース12.2

4.7.7.1. Oracle WebLogic Server 11gとOracle SOA Suite 11gの統合

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイでは、Oracle WebLogic Server 11gで実行されるOracle SOA Suite 11gを使用して、Oracle E-Business Suiteにこのクラスで最高の高機能なSOAインフラストラクチャを提供するようになりました。この統合で、Oracle SOA Suiteは最新のSOAテクノロジー(Webサービス標準のサポート、プロトコル、バインドなど)を提供し、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは統合コンテンツ(統合インタフェース、セキュリティ・モデル、ベスト・プラクティスのガイドラインなど)を提供します。

- **サービス・プロバイダ** - このリリースでは、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、Oracle E-Business Suite WebサービスをOracle SOA Suiteに引き続き生成および配置します。ただし、Webサービス・クライアントおよびコンシューマからのSOAP要求および応答は、実行時にOracle SOA Suiteによって実行されます。
- **サービス起動フレームワーク** - 以前は、サービス起動フレームワーク(SIF)は、Oracle Application Server 10gで提供されるWebサービス起動フレームワーク(WSIF)に基づいていました。リリース12.2では、SIFはOracle WebLogic Server 11gのJAX-WS (XMLベースのWebサービス用のJava API) Dispatchを活用します。
- **サービス管理**
 - **サービス・ライフサイクル管理** - このリリースでは、統合リポジトリ管理者は、Oracle Integration Repositoryのインタフェース詳細ページで次の追加のサービス・ライフサイクル・タスクを実行できます。
 - アクティブな配置済のサービスを終了させて、現在実行されている要求を完了させ、サービスが新しい要求を受け付けなくなるようにします。

- 終了させたサービスをアクティブにします。
- 関連付けられているサービス・アーティファクトをクリーン・アップし、Webサービスのステータスを初期値(未生成)にリセットすることによって、サービスをリセットします。
- **サービス・モニター** - 以前のリリースでSOAモニターと呼ばれていたコンポーネントは、サービス・モニターと呼ばれるようになりました。サービス・モニターはWebサービス要求および応答の各インスタンスのデータおよび統計を基礎となるOracle SOA Suiteインフラストラクチャから取り出し、ユーザーはOracle E-Business Suite Webサービスを監視できます。Oracle E-Business Suiteのサービス・モニター・ユーザー・インタフェースを使用すると、Oracle SOA Suiteで受信および送信される実行時SOAP要求および応答を表示できます。
- **ログ構成** - ログ構成ユーザー・インタフェースは、インタフェース・レベルでの設計時と実行時のログおよびサービスの監査を構成するために簡略化されました。

4.7.7.2. 非同期Webサービスのサポート

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、非同期要求/応答Webサービスをサポートするようになりました。プロバイダから応答がすぐに返される同期Webサービスと異なり、非同期Webサービスでは要求を処理するために長時間かかることがあります。ただし、Oracle E-Business Suite Webサービスを呼び出したクライアントは、応答を待つことなく他の処理を続けることができます。その後、Webサービス要求の処理が完了すると、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは要求を送信したクライアントに応答を送り返します。Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイのサービス・プロバイダは、これらの非同期Webサービス・トランザクションをサポートするためのインフラストラクチャを提供します。

また、Oracle Integration Repositoryユーザー・インタフェースでは、サービスを生成する前に、サービスの相互作用パターン・オプションを指定できます。「Webサービス」リージョン内の相互作用パターン表から同期、非同期、または同期と非同期両方の相互作用パターンを選択できます。

4.7.7.3. Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイの診断およびデザイン・スクリプト

このリリースでは、プラットフォームに依存しない新しいスクリプトisgDesigner.xmlが、次のタスクを実行するために導入されました。

- Oracle E-Business SuiteインスタンスおよびOracle SOA Suiteインスタンスでのセットアップの問題の診断。
- 設計時操作(アクティビティの生成、配置、配置解除、有効化、リタイヤ、リセットなど)の実行。
- [Oracle E-Business Suiteリリース12.1.Xからリリース12.2へのOracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイ・サービスのアップグレード](#)。
- [複製後手順\(リリース12.2複製環境へのサービスの再配置など\)](#)の実行。

4.7.7.4. エラーおよび例外の処理

この機能は、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイによって提供されるサービスのエラーおよび例外の処理を拡張します。サービス設計時のアクティビティ中、またはサービス・プロバイダからのサービス・ランタイム実行中にエラーが発生した場合、エラーおよび障害メッセージがスローされます。

4.7.8. リリース12.2.3

4.7.8.1. RESTサービスとしてのPL/SQL APIのサポート

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、統合リポジトリを使用したRESTサービスの有効化をPL/SQL APIでサポートするようになりました。

RESTサービスには、簡略化された開発ライフサイクル(配置および配置解除)があります。管理者は、RESTサービス操作を持つ選択したAPIに含まれている目的の操作を配置したり、必要に応じてそのサービスを配置解除したりできます。RESTサービスは、Oracle SOA Suiteに依存することなくOracle E-Business Suite管理対象サーバーに配置され、ユーザー主導のアプリケーション(モバイル、タブレット、ハンドヘルド・デバイスなど)で使用できます。

このリリースでは、RESTサービスは同期相互作用パターンのみでサポートされます。

この機能はリリース12.1.3+にバックポートされました。

4.7.8.2. セキュリティ・サービス

セキュリティ・サービスは、統合リポジトリを使用して表示できるようになったJavaインタフェースのサブタイプです。これらは、Oracle Application Object Libraryからの事前定義済で事前配置済のRESTサービスです。他のインタフェース・タイプと異なり、セキュリティ・サービスはすべてのユーザーに事前付与されます。設計時にユーザーが付与する必要はありません。

実行時に、セキュリティ・サービスは、認証ユーザーの資格証明の認証、コンテキスト情報を使用したアプリケーション・セッションの初期化、および認証ユーザーのアクセス権限の認可を行います。これらは、主にモバイル・アプリケーションに使用されます。

この機能はリリース12.1.3+にバックポートされました。

4.7.9. リリース12.2.4

4.7.9.1. RESTサービスとしてのJava APIのサポート

メソッドが単純なデータ型(String、Intなど)のパラメータを使用するJava API、またはシリアル管理が可能なJava Beanは、Java Beanサービスと呼ばれます。そのようなJava APIは、RESTベースのWebサービスとして公開できるようになりました。

PL/SQL RESTサービスと同様に、Java Beanサービスには、簡略化された開発ライフサイクル(配置および配置解除)があり、同じセキュリティ・メカニズムを使用して実装されます。Java Beanサービスは、POSTおよびGET HTTPメソッドを持つRESTサービス操作として配置できます。

また、統合リポジトリのアノテーションは、Java APIをサービス可能インタフェースとしてサポートするように拡張されました。

この機能はリリース12.1.3+にバックポートされました。

4.7.9.2. Java Beanサービスのアノテーション

RESTサービスとして統合リポジトリに登録されている汎用Java APIをサポートするために、Java APIのアノテーションのガイドラインが次のものを含むように拡張されました。

- Java APIをJava Beanサービスと呼ばれるJava APIのサブタイプとしてマークするためのクラスレベルのアノテーション
- Javaメソッドの適切なHTTP動詞(POSTおよびGET)を明示的に識別するためのメソッドレベルのアノテーション
- パス変数をマークするためのパラメータレベルのアノテーション

また、統合リポジトリ・パーサーは、Java Beanサービスのアノテーションの構文を取得および検証するために拡張されました。

この機能はリリース12.1.3+にバックポートされました。

4.7.10. リリース12.2.5

4.7.10.1. アプリケーション・モジュール・サービスのサポート

Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイは、OAフレームワークのアプリケーション・モジュールをRESTサービスとしてサポートするようになりました。アプリケーション・モジュール実装クラスは、OAフレームワークベースのコンポーネントおよびページを制御するビジネス・ロジックへのアクセスを提供するJavaクラスです。そのようなJavaクラスは、統合リポジトリのJavaインタフェースのサブタイプとしてカテゴリ化および表示できます。

Java Beanサービスと同様に、アプリケーション・モジュール・サービスは、POSTおよびGET HTTPメソッドを持つRESTサービス操作として配置できます。また、統合リポジトリのアノテーションは、アプリケーション・モジュールをサービス可能インタフェースとしてサポートするように拡張されました。

この機能はリリース12.1.3+にバックポートされました。

4.7.10.2. 拡張された言語タグのサポート

<NLSLanguage>パラメータを使用して言語作業環境を設定する既存の言語サポートを拡張するために、このリリースではRESTサービス用にISO言語パラメータ<Language>が導入されました。この新しいパラメータ<Language>は、Webサービス・クライアントがOracle E-Business Suiteで使用される<NLSLanguage>パラメータを認識していない場合に、RESTヘッダーにRFC 5646形式で言語設定を送信する代替の方法を提供します。

4.8. Oracle E-Business Suite Mobile Foundation

4.8.1. 概要

Oracle E-Business Suite Mobile Foundationは、モバイル・アプリで使用されるOracle E-Business Suiteに固有のコンポーネントを提供します。Oracle E-Business Suite Mobile Foundationは、Oracle Mobile Application Framework (MAF)テクノロジーを活用および拡張します。

4.8.2. Mobileリリース1.0

4.8.2.1. モバイル・アプリ・サービス

初期リリースでは、Oracle E-Business Suite Mobile Foundationは、モバイル・アプリをサポートするための次のサービスを提供します。

- セキュリティ・サービス
- 構成サービス
- 添付サービス
- ログ・アップロード・サービス

4.8.2.2. モバイル・アプリケーション・マネージャのユーザー・インタフェース

モバイル・アプリケーション・マネージャのユーザー・インタフェース・ページを使用すると、管理者は企業で使用されるモバイル・アプリを有効にして、アプリがOracle E-Business Suiteサーバーに接続する方法を決定する構成パラメータを指定できます。

4.8.2.3. ユーザー・ログインおよび構成フロー

Oracle E-Business Suite Mobile Foundationは、次の機能を含むアプリ内でのユーザー構成およびログインの標準機能を提供します。

- 1回かぎりの構成画面および標準ログイン画面を使用したユーザー・ログインのサポート
- `http(s)://<hostname>:<port>/OA_HTML/config`という形式のサーバーURLの1回かぎりの初回入力サポート

4.8.3. Mobileリリース2.0

4.8.3.1. 改善されたログイン・フロー

アプリ内のユーザーのログイン・フローには、次の機能拡張が含まれています。

- ユーザー資格証明を再入力しない、初期構成後の初回のユーザー・ログインのサポート
- `http(s)://<hostname>:<port>`という形式のサーバーURLの1回かぎりの初回入力サポート

4.8.3.2. 診断の改善

ユーザーは、Eメールを使用してログ・ファイルを送信するかわりに、アプリからOracle E-Business Suiteサーバーにログ・ファイルを直接アップロードできるようになりました。

4.8.4. Mobileリリース2.1

4.8.4.1. ログインおよび構成フローの改善

ユーザーのログインおよび構成のフローには、次の改善事項が含まれています。

- 初回のログイン後に再起動する必要がない

- VPN接続を必要としない、DMZ構成を介したインターネット経由でのOracle E-Business Suiteへのモバイル・アプリのアクセスのサポート

4.8.4.2. アプリを再インストールすることなくサーバーURLを変更する機能

アプリがOracle E-Business SuiteにアクセスするためのサーバーURLが変更された場合、ユーザーはアプリを再インストールすることなく、新しいサーバーURLを入力して再構成プロセスを開始できるようになりました。

4.8.4.3. 診断の改善

モバイル・アプリの診断機能には、次の改善事項が含まれています。

- 診断を容易にするために拡張されたログイン・エラー・メッセージ
- サーバーURLおよびサーバー構成の表示(モバイル・アプリのサーバー・パッチ・レベルを識別するためのサーバー・バージョンを含む)
- 最新のサーバー側構成を確認する機能
- Oracle E-Business Suiteログ・ページから簡単に検索および取得するために、アプリケーション・バンドルIDをデバッグ・ログ・モジュール名として使用して、クライアント・ログ・ファイルをアップロードする機能

4.8.4.4. アプリの構成および管理の改善

次の機能は、改善されたアプリ構成および管理をOracle E-Business Suiteの管理者に提供します。

- スクリプトを使用して複数のアプリの有効化および構成する機能
- 特定のWebエントリ・ポイントをアプリのサービス・エンドポイントとして設定することによる、特定のアプリのための専用アプリ・サーバーの構成のサポートアプリは、モバイル・デバイス上のアプリの初期構成中にエンド・ユーザーが入力する一般的なサーバーURLのかわりに、サービス・エンドポイントを使用してOracle E-Business Suiteに接続します。

4.8.5. Mobileリリース3.0

4.8.5.1. iOSおよびAndroidを同じクライアント・コードでサポートするように変更

AndroidデバイスおよびiOSデバイスで、Oracle E-Business Suiteのアプリを使用できるようになりました。Oracle E-Business Suite Mobile Foundationの機能拡張によって、どちらのオペレーティング・システムでも同じクライアント側コードを使用してアプリを使用できます。

4.8.5.2. 「接続詳細」ページからサーバーURLを更新する機能

ユーザーは、「接続詳細」ページで「URLの変更」ボタンを選択することによって、アプリが別のOracle E-Business SuiteサーバーURLに接続するように再構成できるようになりました。アプリではデバイスの「設定」画面が表示され、ユーザーはサーバーURLを更新できます。

4.8.5.3. 構成UIの更新

次の機能は、拡張されたアプリ構成をOracle E-Business Suiteの管理者に提供します。

- アプリケーション検索結果ページから構成ファイルをテストする機能
- 構成パラメータを接続設定としてグループ化する

また、以前のリリースで使用されていたconnections.xml構成ファイルへの参照は、ユーザー・インタフェースから削除されました。

4.8.6. Mobileリリース4.0

4.8.6.1. 企業での配布のサポート

パブリックなアプリ・ストアではなく企業自体のサイトから、Oracle E-Business Suiteのモバイル・アプリをユーザーに配布できるようになりました。この方法では、ユーザーが使用できるアプリのバージョンを制御できます。企業での配布を有効にするために、OracleはOracle E-Business Suiteのためのモバイル・アプリケーション・アーカイブ(MAA)ファイルを提供しています。

4.8.6.2. 企業ブランドのカスタマイズのサポート

アプリの企業ブランドをカスタマイズできます(企業のロゴを使用するようにロゴを変更することを含む)。このカスタマイズを有効にするには、企業での配布を使用する必要があります。

4.8.6.3. Web SSO認証のサポート

Web SSO認証を使用して、認証をOracle Access Manager (OAM)に委任できます。

4.8.6.4. 拡張されたモバイル・アプリ・セットアップ・ページ

次の機能は、拡張されたアプリ構成をOracle E-Business Suiteの管理者に提供します。

- 企業での配布のためにアプリを登録する機能
- Web SSO認証のためにアプリを構成する機能

4.8.7. Mobileリリース4.1

4.8.7.1. カスタム・アプリ開発のサポート

リリース4.1では、Oracle E-Business Suiteに接続するためのカスタム・モバイル・アプリを作成できます。Oracle E-Business Suite Mobile Foundationは、カスタム・アプリを開発できる次の機能を提供しています。

- Oracle E-Business Suite Mobile Foundation RESTフレームワーク - Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイを介して提供されるOracle E-Business Suite RESTサービスは、Oracle E-Business Suiteモバイル・アプリで使用できます。
- Oracle E-Business Suite Mobile Foundationクライアント・ライブラリ - ログイン、認証、認可などの要件のための共通コンポーネント・セキュリティ・ライブラリを使用できます。
- Oracle E-Business Suite Mobile Foundationアプリケーション・テンプレート - MAFベースのテンプレートによって、Oracle E-Business Suite Mobile Foundationを使用したOracle E-Business Suiteのカスタム・モバイル・アプリの作成が容易になります。
- Oracle E-Business Suite Mobile Foundationサンプル・アプリ - MAFベースのサンプル・アプリ・バージョン1.0.0は、Oracle E-Business Suite Mobile Foundationライブラリに含まれている機能を例示しています。このサンプル・アプリには、主要な機能(スプリングボード、単純検索、バーコード・スキャナ、値リスト(LOV)、「設定」画面、主要な共通コンポーネントとの統合、ページ編集のサンプルなど)が含まれています。このサンプル・アプリは、Oracle E-Business Suite統合SOAゲートウェイのRESTサービスを使用した実際のアプリ・フローを提供します。

4.8.8. Mobileリリース5.0

4.8.8.1. 管理者のためのユーザー・インストールおよび使用状況のメトリック

管理者は、Oracle E-Business Suiteサーバーのモバイル・アプリケーション・マネージャ・ユーザー・インタフェースで、各モバイル・アプリのインストールおよび使用状況のメトリックを表示できます。

4.8.8.2. 選択したアプリ操作のアップデートされたルック・アンド・フィール

ルック・アンド・フィールの変更には、次のものが含まれます。

- 新しいアクション・アイコンおよびアクション・リスト・ビュー: アクション・シートを使用するアプリには、右上隅にアップデートされたアクション・アイコンがあり、リスト・ビューはグリッド・レイアウトではなくアクション・シート・レイアウトになります。
- Android上の「スプリングボード」アイコンおよび「戻る」ボタンに表示されるボタンおよびページ・タイトルのアップデートされたスタイル
- ログイン・ページの後にOracleが表示されるアップデートされた起動ページ

4.8.8.3. Oracle Mobile Application Framework (MAF) 2.2.2の活用

Oracle E-Business Suite Mobile Foundationリリース5.0には、Oracle MAF 2.2.2が実装されています。その他の機能としては、このMAFリリースではプルしてリフレッシュ操作がサポートされ、フレームワーク・レベルでパフォーマンスが改善されています。

4.8.8.4. アプリ内で外部Webサイトへのリンクを開く

ユーザーは、iOSデバイスのアプリ内で外部Webサイトへのリンクを開くことができるようになりました。

4.8.9. Mobileリリース6.0

4.8.9.1. Androidデバイスのアプリ内で外部Webサイトへのリンクを開く

ユーザーは、Androidデバイスのアプリ内で外部Webサイトへのリンクを開くことができるようになりました。

4.8.9.2. 選択したアプリ操作のアップデートされたルック・アンド・フィール

ルック・アンド・フィールの変更には、iOSデバイスのアクション・シートのネイティブなルック・アンド・フィールの活用が含まれます。

4.8.9.3. ユーザー資格証明フィールドのクリア

「サインイン」ページの新しいアイコンを使用すると、ユーザーがユーザー名フィールドおよびパスワード・フィールドから値をすばやくクリアすることにより、更新された資格証明を入力しやすくなり、別のユーザーがサインインできます。

4.8.9.4. Oracle Mobile Application Framework (MAF) 2.3.1の活用

Oracle E-Business Suite Mobile Foundationリリース6.0には、Oracle MAF 2.3.1が実装されています。

4.8.9.5. UIでの開発者および管理者の別々の権限

モバイル・アプリケーション・マネージャのUIページは、開発者および管理者に別々の権限を提供し、各ロールに関連する機能へのアクセスのみが許可されます。たとえば、管理者はモバイル・アプリの構成および使用状況メトリックの表示を行うことができ、開発者はモバイル・アプリのメタデータの登録およびモバイル・アプリのアクセス・ロールの作成を行うことができます。

4.9. Oracle E-Business Suite Secure Enterprise Search

注意: Oracle E-Business Suiteセキュリティ保護エンタープライズ検索機能は、Oracle E-Business Suiteリリース12.2.4以上では提供されません。オラクル社の戦略的な方向性は、Oracle E-Business Suite Information Discoveryを使用して、Oracle E-Business Suiteに検索機能およびInformation Discovery機能を提供することです。

4.9.1. 概要

企業情報の急増およびセキュリティやガバナンスの重点化により、企業の検索市場はオラクル社などの会社の重点領域となっています。

学術機関、企業、政府およびヘルスケア企業の従業員が情報関連の作業にかかる全体的な時間が大幅に増加していることが調査で示されています。情報収集作業にかかる時間の全体的な配分が、1週間にほぼ平均1時間増加しました。Oracle E-Business Suiteでの完全で広範、高速で正確な検索操作性のニーズが高くなっています。企業での検索と一般使用者による検索には2つの主な違いがあります。

- セキュリティに重点が置かれる: ユーザーにはアクセス権のある検索結果のみが表示される必要があります。言い換えると、機密情報は権限を持つユーザーに制限される必要があります。適切なガバナンス・メカニズムおよび監査メカニズムを組み込む必要があります。
- 複数のアプリケーション・モジュールをまたぐ検索に重点が置かれる。

Oracle E-Business Suiteは、ユーザーがセキュリティ保護された方法で複数のOracle E-Business Suiteモジュールをシームレスに検索できるように、Oracle E-Business SuiteデータおよびOracle Secure Enterprise Search (SES)エンジンのシームレスな統合を提供しています。

Webベースのツールである検索モデラーは、使いやすいフレームワークとしてユーザーに提供されており、アプリケーション開発者および企業のデータ・モデラーが検索可能オブジェクトを定義して、アプリケーション・ユーザーに全テキスト検索機能を提供します。

主な機能:

- 構造化データおよび非構造化データを検索するためのOracle E-Business Suiteデータの全テキスト検索機能。添付は非構造化データの例です。
- Oracle SESデータベースのデータのクロールおよび索引付けを行うためのOracle E-Business Suiteの共通インフラストラクチャ。
- 検索モデラー - 検索可能なビジネス・オブジェクト(Oracle E-Business Suiteおよびカスタム・アプリケーションを含む)を作成、変更および配置するためのWebベースのツール。

- セキュリティ - オブジェクト・レベルのアクセスおよびデータ・レベルのアクセスの制御。
- 検索の絞込み - オプションおよびフィルタリング・オプションの縮小または拡大を使用した検索基準の絞込み。
- 保存済検索 - ユーザーは、検索をブックマークおよび保存してアクセスしやすくし、ナビゲーションを不要にできます。

4.9.2. リリース12.0.6 (RUP6)

4.9.2.1. 検索モデラー

この機能は、リリース12.1.1で導入され、リリース12.0ラインのリリース12.0.6で使用可能になりました。検索モデラーは、検索可能なビジネス・オブジェクトを作成、変更および配置するために使用する軽量のブラウザベースの設計ツールであり、広範なプログラミング・スキルまたは開発ツールが必要となりません。このツールは、データ・モデラーがOracle E-Business Suiteおよびカスタム・モジュール内に検索可能なビジネス・オブジェクトを迅速に作成することを支援するためのツールです。

4.9.3. リリース12.1.1

4.9.3.1. 検索モデラー

検索モデラーは、検索可能なビジネス・オブジェクトを作成、変更および配置するために使用する軽量のブラウザベースの設計ツールであり、広範なプログラミング・スキルまたは開発ツールが必要となりません。このツールは、データ・モデラーがOracle E-Business Suiteおよびカスタム・モジュール内に検索可能なビジネス・オブジェクトを迅速に作成することを支援するためのツールです。

検索モデラーは、Oracle Application Object Library (AOL)メタデータを広範に使用して、検索可能オブジェクトの設計にかかる時間を短縮します。エンティティ間の関係をデフォルト設定でき、診断を使用して検証を提供します。このツールは、分離されたOC4J 10.1.3.3ホームにあります。接続されているOracle E-Business Suiteインスタンスに対してユーザーを認証します。

4.9.3.2. そのまま使える検索可能なビジネス・オブジェクト

オラクル社は、限定された数の検索可能ビジネス・オブジェクトをOracle E-Business Suiteアプリケーションとともに提供しています。社内のアプリケーション・エキスパートまたはパートナーの支援を受けて、ユーザーが検索モデラーを使用して独自の検索ソリューションを作成することをお勧めします。

次のオブジェクトは、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.1によって検索可能です。

- 項目
- 資産
- サービス要求、ケース管理
- 統合リポジトリ・クラスおよびオブジェクト
- ワークフロー通知
- コース(Oracle Learning Management)
- 求人 - 内部および外部

- 候補
- 調達契約

4.9.4. リリース12.1.2

4.9.4.1. UIの改善

情報作業者は、意思決定を行ったり、トランザクションを完了させたりするために、関連する情報にすばやくアクセスする必要があります。検索結果には、検索基準への検索結果の関連度をユーザーに通知するために、関連ランキングが含まれるようになりました。この機能を使用すると、ユーザーは最も関連のある情報またはトランザクションにすばやくアクセスできます。

Oracle E-Business Suiteセキュリティ保護エンタープライズ検索を使用すると、ユーザーは以前の連結された表示のかわりに、検索結果を2つの異なるスタイルで表示して読みやすくすることができます。従来のスタイルでは、検索結果がインターネット・スタイルの表示でレンダリングされます。表形式スタイルでは、検索結果が表またはスプレッドシートのような形式でレンダリングされます。また、検索結果はユーザー・エクスペリエンスを向上させるために、適切なわかりやすいキャプションとともに表示されるようになりました。

ユーザーは、ニーズに応じて、現在のページに表示される検索結果をソートできるようになりました。

4.9.4.2. 設計時の検索セキュリティ・プラグイン

通常、Oracle E-Business Suiteには複雑なセキュリティのニーズがあり、スイート内のいくつかのモジュールには特定の追加のセキュリティ要件があります。Oracle Secure Enterprise SearchをOracle E-Business Suiteとシームレスに統合するために、追加のセキュリティ・プラグインを使用できるようになりました。これらのセキュリティ・プラグインを使用すると、ユーザーはOracle FinancialsアプリケーションおよびOracle Human Resourcesアプリケーション内のトランザクション・ページを検索およびナビゲートできます。次のセキュリティ・プラグインは、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.2に含まれています。

- Oracle Financialsモジュールの組織ベースのセキュリティ
- Oracle General Ledgerなどの特定のモジュールのための法的エンティティベースのセキュリティ
- Oracle Human Resourcesモジュールのためのビジネス・グループベースのセキュリティ
- Oracle Human Resourcesモジュールのための従業員階層ベースのセキュリティ

4.9.5. リリース12.1.3

4.9.5.1. Excelへの検索結果のエクスポート

この機能を使用すると、ユーザーは検索結果をMicrosoft Excelにエクスポートできます。この機能は、いくつかのビジネス機能(アカウント、請求書などの調整など)でユーザーの役に立ちます。可能性がある2つの使用例を次に示します。

- 請求書の経過期間: 経過期間レポートを生成して顧客の請求書が未処理である期間を判別するかわりに、顧客に属する請求書、または指定した日付範囲および経過期間の請求書を単純に検索することによって、ユーザーは時間とリソースを節約できます。ユーザーは、ボタンをクリックして、検索結果をMicrosoft Excelにエクスポートし、生成さ

れたスプレッドシートをオフライン・アクティビティ(請求書に関する調整、顧客へのフォローアップなど)に使用できます。

- 調達契約: 購買担当または調達部門のスタッフは、特定の顧客または品目のすべての契約を検索できます。契約をステータス(保留中、履行済、一部履行済など)別に一覧表示できます。検索結果を確認したら、さらなる処理のためにその詳細をExcelスプレッドシートにエクスポートできます。
- 在庫品目: ユーザーは部品番号、仕様、ロット番号、場所などによって在庫品目を検索できます。必要に応じて、在庫レベルまたはその他のインジケータに基づいて検索することもできます。結果を検索した後に、それらをExcelにエクスポートして、物理的な在庫との調整のためにデータを使用できます。

4.9.5.2. Oracle E-Business SuiteからのOracle Secure Enterprise Searchユーザー・インタフェースの起動

Oracle Secure Enterprise Searchは、Oracle E-Business Suiteで使用可能な機能を超える拡張されたユーザー・インタフェース機能をOracle E-Business Suite内で提供します。Oracle Secure Enterprise Searchユーザー・インタフェースは、カスタマイズおよび拡張機能(ファセット検索、クラスタリングなど)のためのさらなる柔軟性を提供します。

新しい機能では、Oracle E-Business Suite内からOracle Secure Enterprise Searchユーザー・インタフェースが起動され、Oracle Secure Enterprise Searchユーザー・インタフェースとOracle E-Business Suiteをシームレスに統合できます。

4.10. Oracle Functional Testing Suite Advanced Pack for Oracle E-Business Suite

4.10.1. 概要

Oracle Functional Testing Suite Advanced Pack for Oracle E-Business Suiteは、Oracle Functional Testing Suite for Oracle ApplicationsのOracle Flow Builderモジュールを活用し、Oracle E-Business Suiteリリース12.1.3の自動化テスト・スクリプトを作成および保守するために必要なユーザーの時間および専門知識を減少させることができます。

Oracle Flow Builderを使用すると、技術的な知識のあるテスターでなくても、事前作成済のコンポーネントを使用して動作するテスト・スクリプトを作成できます。各コンポーネントは、小さなテスト操作(請求書バッチの作成、請求書保留の適用など)を表します。テスターは、スクリプトを記録することなく、事前作成済のコンポーネントをテスト・フローに組み立て、テスト・フローをスプレッドシート・データと組み合わせて、複数のデータ条件のテストを実行できます。

Oracle Flow Builderには、すべての製品ファミリ間でのOracle E-Business SuiteのテストのためにOracle E-Business Suite品質保証チームによって設計された、2,000を超える事前作成済のコンポーネント、および200を超える事前作成済のフローが含まれています。ユーザーは、事前作成済のコンポーネントおよびフローを活用して、独自のテスト自動化をすぐに開始できます。Oracle Flow Builderフレームワークを使用すると、ユーザーは事前作成済コンポーネントを追加、変更および拡張して、Oracle E-Business Suiteに新しい機能およびカスタマイズを加えることができます。

4.10.2. V1.0

4.10.2.1. Oracle E-Business SuiteのOracle Flow Builder用の事前作成済 テスト・コンテンツ

Oracle Functional Testing Suite Advanced Pack for Oracle E-Business Suiteは、Oracle Flow Builderで使用されるOracle E-Business Suiteの一部として配布されている各種製品の機能をテストするためのコンポーネントを提供しています。Advanced Packで配布されるコンポーネントは、製品およびフローの詳細な機能をカバーし、エンド・ツー・エンドのビジネス・プロセスを表しています。

次の製品がOracle Functional Testing Suite Advanced Pack for Oracle E-Business Suiteでカバーされています。

- Oracle Asset Lifecycle Management
- Oracle Channel Revenue Management
- Oracle Discrete Manufacturing
- Oracle Lease and Finance Management
- Oracle Incentive Compensation
- Oracle Process Manufacturing
- Oracle Procurement
- Oracle Project Management
- Oracle Property Manager
- Oracle Service

4.11. Oracle iSetup

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.11.1. 概要

Oracle iSetupは、アプリケーションのライフサイクルを通してデータの移行および監視を有効にすることによって、アプリケーションの機能構成データの管理をサポートするWebベースのツールです。

4.11.2. リリース12.1.1

4.11.2.1. Oracle iSetup移行パッケージ・タクソミ

この機能拡張を使用すると、実装プロジェクト、推奨される基本設定などの基準に基づいてOracle iSetupデータ移行選択セットを分類できます。Oracle iSetup移行パッケージ・タクソミは、実装プロジェクト・タイプの一連の選択セットをロードするために役立ちます。

4.11.2.2. Oracle iSetupへのサービスBean APIの登録

この機能拡張を使用すると、iSetupインタフェース・リポジトリ画面を使用してサービスBean APIをOracle iSetupに登録できます。これらの登録されたサービスBean APIは、カスタム選択セットを作成するために使用できます。

4.11.2.3. レポートの設定

Oracle iSetupでは、機能構成に関するレポートが生成されますが、ユーザーによる分析または比較には重要ではない追加の詳細が含まれている可能性があります。リリース12.1.1では、ユーザーはレポート作業環境を定義できます。

- Oracle iSetupレポートの比較のために追加の条件を定義するこれらの追加は、事前シードの条件に追加されます。
- 標準レポートに関連する情報に制限する

レポートまたは比較のためのこれらのカスタム作業環境は、後で再使用するために保存できます。

Oracle iSetupレポート・ユーザー・インタフェースでは、ユーザーはレポート・レイアウトを動的に変更できるようになりました。現在は表形式レイアウトおよび階層レイアウトがサポートされています。

Oracle iSetupダウンロード可能標準レポート機能では、BR100スタイル形式がサポートされるようになりました。

Oracle iSetup Loaderは、ロード作業環境に基づいて配置詳細レポートを自動生成します。配置詳細は、挿入、更新、エラー、警告などのレコード・レベルの詳細を取得します。

4.11.3. リリース12.1.3

4.11.3.1. Oracle iSetup MLS

リリース12.1.3以降では、Oracle iSetup MLSは異なる言語がインストールされたシステム間でデータを移動する機能の柔軟性が高くなりました。ユーザーは、構成されているすべての言語のデータをソース・システムからターゲット・システムに一度に移動することを選択できます。または、インストールされている1つの言語のデータ、またはインストールされている言語のサブセットのデータをソースからターゲットに移動することを選択できます。

4.11.4. リリース12.2.5

4.11.4.1. Oracle iSetupの国際化のための機能拡張

このリリースでは、Oracle iSetupには一般ローダー(FNDLOAD)およびOracle XML Publisherデータに関する次の機能拡張が含まれています。

- 一般ローダーAPI - Oracle iSetupは英語のデータに加えて翻訳データをアップロードできるようになりました。言語データは、自動言語検出(暗黙的)、またはUIからのアップロード・パラメータの入力(明示的)によってアップロードできます。
- XML Publisher API - Oracle iSetupはMLS (翻訳可能)テンプレート・ファイルおよびローカライズされたテンプレート・ファイルを移動できるようになりました。

4.11.5. リリース12.2.6

4.11.5.1. 言語データの合理化された移行

この機能拡張は、一般ローダーLDT形式およびワークフロー定義ローダーWFT形式の言語セットアップ・データを2つのシステム間で移動する処理を合理化します。以前は、複数の言語がインストールされている複数言語のOracle E-Business Suiteインスタンスでは、言語セットアップ・データを別のシステムにLDT形式またはWFT形式で移動するには、一度に1つの言語を抽出してロードする必要がありました。

リリース12.2.6では、複数の言語を一度に抽出およびロードしたり、複数言語のレポートを一度に作成したりできます。

4.11.6. Oracle iSetupの製品カバレッジ

- 汎用的な基盤(Oracle Application Object Library、またはFND)
- HRMS
 - 組織体系
 - 給与エレメント
 - オーストラリア休暇債務
 - 従業員
 - 製品基盤
 - 組織体系
- 財務
 - 一般会計
 - 買掛管理
 - 売掛管理
 - 固定資産
 - 資金管理
 - 与信管理
 - 公共部門財務
 - 会計設定
 - 財務営業単位レベル・セットアップ
- ショップ型製造および配給
 - 拡張計画システム
 - 部品構成表
 - 原価計算
 - エンジニアリング
 - エンタープライズ資産管理
 - 在庫
 - 受注管理
 - 発注
 - 品質
 - 価格設定
 - 出荷

- 仕掛け
- 倉庫管理
- プロジェクト設定
- OAパーソナライズ
- XMLパブリッシャ
- ワークフロー・ビジネス・イベント・システム・オブジェクト
- ワークフロー定義
- Oracle Lease Management

4.12. Oracle Report Manager

4.12.1. 概要

Oracle Report Managerを使用すると、Oracle E-Business Suiteのすべてのレポート要件についてEレポートが可能になります。Oracle Report Managerは、レポートを格納するためのセキュアな中央レポート・リポジトリを提供しており、様々な形式(Excel、HTML、PDFなど)でのレポートの表示をサポートします。

4.12.2. リリース12.0.6 (RUP6)

4.12.2.1. 複数のワークシートのサポート

この機能は、リリース12.1.1で導入され、リリース12.0ラインのリリース12.0.6で使用可能になりました。「ページ/拡張」表示タイプおよび「ページ/合計」表示タイプを組み合わせた複雑なコンテンツ・セットを使用して、レポートを公開できます。これらのレポートを表示する場合、各拡張値のレポートを個別に表示するかわりに、「レポート表示」ページの「拡張値」リストの「すべて」オプションを使用して、レポート・データ全体をHTMLまたはPDFで一度に表示するか、レポートをMicrosoft Excelワークブックの複数のワークシートに公開できます。

4.12.3. リリース12.1.1

リリース12.1.1では、Oracle Report Managerは複雑なレポート公開形式および表示タイプをサポートするように拡張されました。これらの機能を使用すると、異なる拡張値を持つ大きいレポートを公開するために必要な時間が短縮されます。

4.12.3.1. 複雑な内容セット

内容セットには任意の表示タイプを使用できるようになりました(「行/合計」(RT)、「行/拡張」(RE)、「行/両方」(RB)、「列/合計」(CT)、「ページ/合計」(PT)および「ページ/拡張」(PE)を含む)。Oracle Report Managerは、内容セット定義のアカウント割当てでこれらの表示タイプの複雑な組み合わせをサポートするようになりました。

この機能によって、Oracle Report ManagerはOracle Application Desktop Integrator (ADI)のクライアント・バージョンで以前提供されていたすべての表示タイプに基づくレポートの公開のサポートと同等になりました。

4.12.3.2. 複数のワークシートのサポート

「ページ/拡張」表示タイプおよび「ページ/合計」表示タイプを組み合わせた複雑なコンテンツ・セットを使用して、レポートを公開できます。これらのレポートを表示する場合、各拡張値のレポートを個別に表示するかわりに、「レポート表示」ページの「拡張値」リストの「すべて」オプションを使用して、レポート・データ全体をHTMLまたはPDFで一度に表示するか、レポートをMicrosoft Excelワークブックの複数のワークシートに公開できます。

この機能によって、すべての拡張セグメントの統合レポートを表示しようとしているエンド・ユーザーの時間が節約されます。

4.12.4. リリース12.1.2

4.12.4.1. 拡張スケジューリング・オプション

レポートを発行するときに、簡単なスケジュール(「可能な限り早く」、「特定日時」、循環間隔など)を選択できるようになりました。または、週の特定の曜日、月の特定の日にちななどのより詳細なスケジュールを選択できます。以前に保存したスケジュールを選択することもできます。

4.12.5. リリース12.1.3

4.12.5.1. リポジトリ管理のセキュリティ

フォルダおよびドキュメントに対する個別のユーザー処理を制限するために、追加のセキュリティ機能がOracle Report Manager Repositoryに追加されました。新しいユーザー・インタフェースを使用すると、フォルダまたはドキュメントに対するビューワ権限および所有者権限を持つユーザーを定義できます。セキュリティ保護されたフォルダまたはドキュメントを表示するには、ユーザーはビューワ権限および所有者権限を持っている必要があります。所有者権限を持つユーザーのみが、セキュリティ保護されたフォルダやドキュメントのメニュー項目の更新、移動、アーカイブ、削除、作成などの処理、レポートの公開、またはセキュリティ保護されたフォルダ内へのサブフォルダの追加を実行できます。

値へのユーザー・セキュリティ、フレックスフィールド・セグメント・セキュリティまたはカスタム・セキュリティの手法を使用しないレポートに対して、メニュー項目を作成してレポートへのアクセスを制御するかわりに、リポジトリ・セキュリティを使用できます。リポジトリ・セキュリティ機能は、各レポートに個別のメニュー項目を作成するかわりに、複数のレポートを同じセキュリティ保護されたフォルダに公開できるため、多数のレポートをセキュリティ保護する必要がある場合に、保守のオーバーヘッドを減らすことができます。

4.12.6. リリース12.2

4.12.6.1. Microsoft Officeの動作保証

Oracle Report Managerは、32ビット・リリースおよび64ビット・リリースのMicrosoft Office 2010で動作保証されるようになりました。

4.12.6.2. 「レポート・マネージャ・ホーム」ページ

新しい「レポート・マネージャ・ホーム」ページは、Oracle Report Managerのコンカレント要求の表示、レポートの発行、およびOracle Report Manager管理機能へのアクセスを行うことができる単一の中心的な場所を提供します。このページを使用すると、保留中および完了したOracle Report Manager要求を標準のコンカレント処理ページで検索することなく、これらの要求を監視できます。後ですばやくアクセスするために、完了した要求をお気に入りとしてマークすることもできます。

4.12.6.3. レポート・セットの発行

Oracle Report Managerの「レポート・セット発行」ページでは、公開オプションの定義、レポート・セットの発行、および完了した要求の公開を行うことができます。この方法では、コンカレント処理Webページを操作することなく、Oracle Report Manager Webページ内の単一のフローでレポートを発行および公開できます。

4.12.6.4. レポートの配信

リポジトリにレポートを格納することに加えて、Oracle E-Business Suiteの外部のレポート閲覧者にレポートを配布できるようになりました。Oracle Report Managerは、次のタイプのレポート配布をサポートしています。

- FTPサーバーへのレポートのアップロード。
- Oracle E-Business Suiteアプリケーション層のローカル・ファイル・システムへのレポートの保存。
- EメールによるOracle E-Business Suiteユーザーへのレポートの送信。

レポートをHTMLファイルまたはPDFファイルとして配布できます。

4.12.6.5. FirefoxからのMicrosoft Excelレポートの生成

FirefoxブラウザおよびMicrosoft Internet ExplorerでOracle Report Managerを実行して、Microsoft Excelレポート出力を生成できるようになりました。

4.12.6.6. デジタル署名のサポート

Microsoft Excel内のいくつかのセキュリティ・オプションを使用すると、ファイルがデジタル署名されていて信頼できるソースからのファイルであることが識別されている場合にのみ、マクロを含むファイルを開くことができます。管理者は、ユーザーが作成したMicrosoft Excelレポート出力にデジタル署名を付けるようにOracle Report Managerを構成できるようになりました。ユーザーがOracle Report Managerマクロを信頼できるソースからのマクロとして最初に識別すると、ユーザーがMicrosoft Excelでマクロ・セキュリティ・レベルに高を選択していても、Microsoft Excelはそのマクロの実行を自動的に許可します。

4.12.6.7. Microsoft Excelでの行見出しおよび列見出し

新しいプロファイル・オプションでは、ユーザーがレポートをMicrosoft Excelに出力するときに、Microsoft Excelスプレッドシートに行見出しおよび列見出しを表示することを選択できます。行見出しおよび列見出しを使用すると、ユーザーは行または列全体を簡単に一度に選択して、行または列の編集、フォーマット、コピーなどの処理を実行できます。

4.12.7. リリース12.2.4

4.12.7.1. Microsoft Excelのリボンとして表示されるOracleメニュー

Microsoft Excel 2007以上で財務レポート・テンプレート・エディタを使用してテンプレートを設計する場合、Oracleメニューがカスタム・リボンとして表示されるようになりました。このリボンのボタンを使用すると、スプレッドシートの機能を拡張する追加のOracle機能にアクセスできます。

4.12.8. リリース12.2.5

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.12.8.1. Office Open XMLのサポート

Oracle Report Managerは、Office Open XML (OOXML)標準に従った.xlsx形式のレポート・スプレッドシートの生成をサポートするようになりました。このオプションを使用すると、ドキュメントの作成中にマクロは使用されず、アップロード中に限定されたマクロが使用されます。このため、OOXMLドキュメントを操作する場合に、「VBA プロジェクト オブジェクト モデルへのアクセスを信頼する」セキュリティ・オプションが必要なくなります。また、処理はサーバー上で実行されるため、ファイル生成で最小限のデスクトップ・リソースが使用されます。

この機能に関連して、財務レポート・テンプレート・エディタでは、OOXML標準に従った財務諸表生成プログラム(FSG)テンプレートを作成できるようになりました。以前のリリースでカスタム Oracle Report Managerテンプレートを定義した場合は、このリリースで提供されているテンプレート移行ユーティリティを使用して、必要に応じてそれらを新しい.xlsx形式に移行できます。

4.12.8.2. 簡略化されたレポートの発行

新しい「簡易FSG発行」ページでは、単一のページからFSGレポートを発行するための簡略化されたインタフェースが提供されています。ユーザーが公開するレポートを選択すると、Oracle Report Managerはレポート定義、およびそのユーザーが同じレポートを前回公開したときに選択した値に基づいて、財務オプションおよび公開オプションにデフォルト値を設定します。ユーザーは、必要に応じて新しい値を入力するか、単にデフォルト値を受け入れて、レポートを発行できます。

4.12.8.3. 並行内容セットのサポート

並行タイプの内容セットを持つFSGレポートを公開できるようになりました。この場合、財務諸表生成プログラムは、内容セットのすべての拡張値の並行要求を実行し、それらの出力を結合して完全なレポートを生成します。要求が並行で実行されるため、このタイプの内容セットを使用すると、順次内容セットを使用するよりもレポートを速く生成できます。

4.12.8.4. 簡略化されたレポート・マネージャのホームおよびメニュー

「レポート・マネージャ・ホーム」ページは、このリリースで導入されたOracle Application Frameworkの簡略化されたUI機能(異なるステータスの要求のリストを表示するタイル、およびレポートの発行および管理リンクの非表示/表示サブタブ・レイアウトを含む)を使用して合理化されました。また、リリース12.2.5では、Oracle Report Managerの新しいメニュー階層が導入され、「レポート・ホーム」が単一の最上位の機能となり、その下に他のすべてのOracle Report Managerページが編成されます。

4.13. Oracleユーザー管理(UMX)

4.13.1. 概要 - SOX準拠RBACレポート

Oracle E-Business Suite製品は、セキュリティのニーズに対応するために、機能およびデータのセキュリティを含むATGセキュリティ・インフラストラクチャを使用します。このセキュリティ・モデルは、ユーザー、ロール、付与、オブジェクトおよびインスタンス・セットで構成される非常に複雑なモデルです。

「Who、What、Why、How」(W3H)システムは、監査および問合せのツールとして機能し、セキュリティ・システムの360度ビューを提供します。

W3Hシステムは、おおまかに次の使用者を対象としています。

- Oracle E-Business Suiteの監査人。
- 診断のためにこのツールを使用できるOracle Support
- Oracle E-Business Suiteインストール環境のシステム管理者
- セキュリティ・システムに問合せを行うOracle E-Business suite製品の開発者。

4.13.2. リリース12.1.1

4.13.2.1. カテゴリ化された検索

複数の問合せをシステムに発行できるため、問合せを単純化する必要があります。W3Hは、問合せがカテゴリ化される簡単なユーザー・インタフェースを提供します。考えられるいくつかのカテゴリとしては、「ユーザーベースの問合せ」および「ロールベースの問合せ」があります。頻繁に実行される問合せは強調表示できます。

4.13.2.2. 360度ビュー

360度ビューは、検索が行われたときに、「Who、What、WhyおよびHow」に関する情報を提供することを目的としています。たとえば、ユーザーが「ユーザーXが保持しているロールは何(WHAT)ですか」と問い合わせた場合、システムはそのロールがそのユーザーに割り当てられた理由(WHY)および方法(HOW)に関する情報も提供します。

4.13.2.3. レポート

W3Hでは、情報を様々な形式で保存できます。サポートされる形式は、Microsoft Wordドキュメント(DOC)およびAdobe Acrobat PDFです。レポートは、XMLパブリッシャを使用して生成します。

必要な情報が膨大である場合があるため、問合せを実行してレポートを準備するために時間がかかり、ブラウザがタイムアウトすることがあります。このため、W3Hレポートはコンカレント・プログラムを使用して生成されます。

4.13.2.4. クイック検索

開発者および(場合によっては)システム管理者は、広範な出力を必要としない問合せを実行することがあります。たとえば、「ユーザーSNELLEPAはシステム管理者ロールへのアクセス権がありますか」という問合せです。W3Hは、ユーザーが出力をさらにフィルタ処理できるように、各問合せ出力にクイック検索機能を提供しています。詳細は、UIの項を参照してください。

4.13.2.5. スナップショット

監査人は、指定した期間に起こったことを確認しようとします。たとえば、「ユーザーSNELLEPAは評価期間中にSALARYオブジェクトへのアクセス権がありましたか」です。ユーザーは各タイプの問合せに日付範囲を入力できます。

4.13.2.6. ロール階層の出力

ユーザーがロールを問い合わせるレポートでは、ロールの膨大なリストを調べることは、このシステムが初めてのユーザーにとって大変な作業であることがあります。出力を適切に理解するには、ロールと継承関係をツリー状の構造で示すレポートが役に立つことがあります。

この機能は、個別のレポートとして使用できます。その場合、特定のロールR1が入力として使用され、出力はR1およびそのすべての子ロールのツリー状の構造となります。この場合、システムはフィルタ条件(アプリケーション名など)として使用する特定のパラメータを入力するようにユーザーに求め、そのフィルタ条件に一致するサブロールのみが表示されます。

この機能は、出力がロールである問合せにオプションとして使用することもできます。表示されるすべてのロールがツリー状の構造で示されるためです。

4.13.3. リリース12.2.4

4.13.3.1. プロキシ・ユーザーのアクセス制御

この機能は、Oracle E-Business Suiteの従来のプロキシ・ユーザーの機能を拡張し、より粒度の細かいレベルをサポートするため、委任および権限の管理を詳細にアクセス制御できます。たとえば、販売マネージャは選択した職責を販売担当に委任できます。

この機能を使用して行われるすべての処理は監査の対象となるため、プロキシとして機能するユーザーによるアクティビティの記録が提供されます。

4.13.4. リリース12.2.6

4.13.4.1. プロキシの監査

プロキシ監査機能は、監査人がプロキシ・ユーザーのトランザクション、または特定のデータ・オブジェクトに対する他のユーザーのトランザクションを評価するための統合レポートを提供します。管理者および委任者は、このレポートを実行して、プロキシ・ユーザーがかわりに実行したトランザクションを表示できます。

4.13.4.2. ユーザー登録HTML UI

Oracle Application Frameworkページで新しいユーザー登録処理を使用できるようになりました。このページは、システム管理者のユーザー定義フォームと同等です。

4.13.4.3. 職責HTML UI

Oracle Application Frameworkページで職責を作成する機能を使用できるようになりました。このページは、職責定義フォームと同等です。

4.14. Oracle Web Applications Desktop Integrator

4.14.1. 概要

Oracle Web Applications Desktop Integratorは、Oracle E-Business Suiteとデスクトップ・アプリケーション(Microsoft Excel、Microsoft Word、Microsoft Projectなど)の統合を提供するフレームワークです。デスクトップ統合に関するメタデータは、インテグレータの形式で格納されます。Oracle E-Business Suiteアプリケーションには、300を超えるシードのインテグレータがあり、財

務、人事、顧客関連管理、サプライチェーン管理、およびその他のアプリケーションがカバーされています。

4.14.2. リリース12.1.2

4.14.2.1. Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワーク

リリース12.1.2では、Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワークと呼ばれる新しいコンポーネントが導入されました。このフレームワークは、デスクトップ・インテグレータ・ソリューションを作成および管理するために使用する設計時のウィザードベースのユーザー・インタフェースで構成されています。このフレームワークは、基礎となるOracle E-Business Suiteスキーマの複雑さを覆い隠すカスタム・インテグレータを作成するための簡単な方法に関するユーザーの要求に対処しています。

Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワーク・ユーザー・インタフェースを使用すると、次のタスクを実行できます。

- インテグレータの作成、更新および削除。
- 既存のOracleのシードのインテグレータおよびカスタム・インテグレータの定義の検索および表示。
- 機能ベースのセキュリティ・ルールを定義して、インテグレータ定義への実行時アクセスを制御する。
- ユーザーは、デスクトップ・アプリケーションにダウンロードされるデータに関するメタデータ、およびデータをOracle E-Business Suite内にアップロードするインタフェースを定義できます。
- 実行時にデスクトップ・アプリケーションで値リストとして表示されるユーザー・インタフェース・コンポーネントの定義および管理。
- Oracleのシードのコンポーネント定義およびカスタム・コンポーネント定義の詳細の検索および表示。

また、Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワークでは、既存のOracle Web Applications Desktop Integratorユーザー・インタフェースを使用して、アップロード・パラメータ、インポータ、その他のインテグレータおよびドキュメント・パラメータを定義するために必要なパラメータ・リストおよびパラメータ・メタデータを定義できます。また、このフレームワークでは、既存のユーザー・インタフェースを使用して、デスクトップ統合マネージャからインテグレータのレイアウトおよびマッピングを定義できます。

4.14.3. リリース12.1.3

4.14.3.1. デジタル署名のサポート

Microsoft Excel内のいくつかのセキュリティ・オプションを使用すると、ファイルがデジタル署名されていて信頼できるソースからのファイルであることが識別されている場合にのみ、マクロを含むファイルを開くことができます。管理者は、ユーザーが作成したスプレッドシートにデジタル署名を付けるようにOracle Web Applications Desktop Integratorを構成できるようになりました。ユーザーがOracle Web Applications Desktop Integratorマクロを信頼できるソースからのマクロとして最初に識別すると、ユーザーがMicrosoft Excelでマクロ・セキュリティ・レベルに高を選択していても、Microsoft Excelはそのマクロの実行を自動的に許可します。

4.14.3.2. Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワークの機能拡張

リリース12.1.3では、Oracle E-Business Suiteデスクトップ統合フレームワーク・ユーザー・インタフェースは、次のタスクを実行できるように拡張されました。

- インタフェース表にアップロードされる行、行を事前検証する方法、およびインポート処理を開始するかどうかを指定するアップロード・パラメータの定義。
- インタフェース表からアプリケーションの実表にデータを移動する方法を指定するためのインポータ・ルール of 定義(アプリケーションの実表にデータをインポートする前に適用する検証ルールを含む)。
- テスト・ドキュメントを作成することによるインテグレータ定義のテスト。
- 読取り専用モードでのインテグレータ定義の表示。
- インテグレータがデスクトップ・ドキュメントにダウンロードするデータをJavaプログラムを使用して取得するコンテンツの定義。

4.14.4. リリース12.2

4.14.4.1. Microsoft Officeの動作保証

Oracle Web Applications Desktop Integratorは、32ビット・リリースおよび64ビット・リリースのMicrosoft Office 2010で動作保証されるようになりました。

4.14.4.2. 操作性の機能拡張

リリース12.2では、Oracle Web Applications Desktop Integratorユーザー・インタフェースは、次のタスクを実行できるように拡張されました。

- Oracle Web Applications Desktop Integratorを使用して作成されたスプレッドシートへの企業ブランド・ロゴの表示。
- 拡張ボタンおよび縮小ボタンを使用した、スプレッドシートのコンテキスト、ヘッダーおよび明細リージョンの表示および非表示。

4.14.4.3. 職責の切替えオプション

Oracle E-Business Suiteアプリケーションの適切な権限を使用してアップロードが実行されるようにするには、スプレッドシート内のOracleメニューの「職責の切替」オプションを使用し、必要に応じてアップロードに使用する職責を指定できます。たとえば、同じMicrosoft Excelセッションで複数のアップロードを実行する場合は、必要に応じてこのオプションを使用し、アップロードの合間に職責を切り替えることができます。

4.14.4.4. 行のコミットパラメータ

行のコミットという新しいアップロード・パラメータを使用すると、アップロード中に無効な行が出現した場合に続行する方法を指定できます。すべての行が有効である場合にのみコミットするか、他の行が有効でなくても有効な各行をコミットするように、アップロードを構成できます。

4.14.4.5. アップロードのためのデータの圧縮

スプレッドシートからアップロードできるデータのサイズは、使用しているPCの使用可能なメモリ(RAM)によって決まります。大量のデータをアップロードする必要がある場合は、アップロードする前にWinZipまたは7Zipを使用してデータを圧縮できるようになりました。圧縮によって、一度にアップロードできるレコード数が増加します。

4.14.4.6. Oracle Web Applications Desktop Integratorの診断

診断テストを実行すると、Oracle Web Applications Desktop Integratorで現在使用されているモジュール・バージョンおよびプロファイル値、および特定のインテグレータに定義されているメタデータを確認できます。

4.14.5. リリース12.2.4

4.14.5.1. Microsoft Excelのリボンとして表示されるOracleメニュー

Microsoft Excel 2007以上を使用してOracle Web Applications Desktop Integratorのスパレッドシートを表示する場合、Oracleメニューがカスタム・リボンとして表示されるようになりました。このリボンのボタンを使用すると、スパレッドシートの機能を拡張する追加のOracle Web Applications Desktop Integrator機能にアクセスできます。

4.14.6. リリース12.2.5

4.14.6.1. Office Open XMLのサポート

Oracle Web Applications Desktop Integratorは、Office Open XML (OOXML)標準に従った.xlsm形式のスパレッドシートの生成をサポートするようになりました。このオプションを使用すると、ドキュメントの作成中にマクロは使用されず、アップロード中に限定されたマクロが使用されます。このため、OOXMLドキュメントを操作する場合に、「VBA プロジェクト オブジェクト モデルへのアクセスを信頼する」セキュリティ・オプションが必要なくなります。また、処理はサーバー上で実行されるため、ドキュメントの作成およびアップロードで最小限のデスクトップ・リソースが使用されます。

4.14.6.2. フレックスフィールドの機能拡張

Oracle Web Applications Desktop Integratorは、次のフレックスフィールド機能をサポートするように拡張されました。

- キー・フレックスフィールドのフレックスフィールド・コンポーネントを定義するときに、フレックスフィールドのデータ・セットが格納される列を指定することによって、検証中にデータ・セットが動的に参照されるようにできます。
- また、キー・フレックスフィールドのフレックスフィールド・コンポーネントを定義するときに、WHERE句を指定してそのフレックスフィールドの値リストを制限できます。

4.14.6.3. インタフェース属性の依存する値リスト

有効な値リストが別のインタフェース属性の値に依存するインタフェース属性を定義できるようになりました。依存する属性には、表検証を使用する必要があります。参照される属性のトークンを依存属性のWHERE句に含めると、依存する値リストを判別する方法を指定できます。

4.14.7. リリース12.2.6

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.14.7.1. 簡略化された「文書の作成」ページ

新しい簡略化された「文書の作成」ページは、Oracle Application Frameworkベースの単一のページに表示されているすべてのパラメータを使用してドキュメントを作成するためのユーザー・インタフェースを提供しています。プロファイル・オプションを使用して、簡略化された「文書の作成」ページまたは以前のインタフェース(複数のページに渡ってユーザーをガイドし、ドキュメント・パラメータを入力する「文書の作成」ページ・フロー)のいずれを使用するかを指定できます。

4.14.7.2. 簡略化された「レイアウトの定義」ページ

新しい簡略化された「レイアウトの定義」ページは、ユーザーがインテグレータを選択した後に、Oracle Application Frameworkベースの単一のページに統合されたレイアウト定義オプションを使用してレイアウトを定義するためのユーザー・インタフェースを提供しています。

4.14.7.3. インタフェース属性のリフレッシュ

新しい「リフレッシュ」オプションを使用すると、基礎となる表またはAPIの定義に特定のタイプの変更があるインタフェースの属性を自動的に更新できます。属性を最新の状態にするために、インタフェースを削除して再作成する必要はなくなります。

次のタイプの変更に、「リフレッシュ」オプションを使用できます。

- 基礎となる表の最後に新しい列が追加された。または、APIの引数リストの最後に新しい入力引数が追加された。
- 表の列またはAPIの引数のデータ型、表の列のサイズ、または表の列をNULLにできるかどうかに関する変更。
- 以前はエラー情報を返さなかった関数がエラー情報を返すようになった(または、その逆)。

4.14.7.4. Oracle Web Applications Desktop Integratorを使用したOracle Application Frameworkの表データのエクスポート

Oracle Application Frameworkページの従来表および拡張表では、Oracle Web Applications Desktop Integratorとの統合がサポートされるようになり、表データをOracle Web Applications Desktop Integratorのスプレッドシートとしてダウンロードできます。この機能を有効にするには、「FND: BNE表統合の有効化」プロファイル・オプションを使用します。

4.15. Oracle Workflow

関連する国際化機能の詳細は、3.4項を参照してください。

4.15.1. リリース12.1.1

4.15.1.1. ワークリスト - バルク通知応答およびバルク通知クローズ

バルク通知応答およびバルク通知クローズ機能は、Oracle Workflow通知への大量の応答を可能にします。Oracle Workflowを使用すると、ユーザーはワークリストの検索ページおよび「通知の検索」ページの「応答」ボタンを使用して、同じタイプの複数の通知に一度に応答できるように

なりました。Oracle Workflowを使用すると、ユーザーはワークリストの検索ページおよび「通知の検索」ページの「クローズ」ボタンを使用して、複数のFYI通知を一度に閉じることもできるようになりました。これらの機能を使用すると、各通知の「通知詳細」ページに個別にナビゲートすることなく、ユーザーが同様の通知を一括で処理できることによって、ユーザーの生産性が向上します。

4.15.1.2. Hijrahカレンダー/タイ・カレンダーのサポート

Oracle Workflowでは、ユーザーがNLSカレンダー作業環境にHijrahカレンダーまたはタイ・カレンダーを選択している場合、通知にそれらのカレンダーのいずれかに従った日付が表示されるようになりました。

4.15.2. リリース12.1.3

4.15.2.1. 通知メーラー - SMTP認証

Oracle Workflow通知メーラーは、SMTP認証をサポートするようになり、SMTP認証を必要とするように構成されたSMTPサーバーで通知メーラーを使用できます。

SMTP認証では、送信者が自身をメール・サーバーで識別することによって、認証する必要があります。正常な認証後、メール・サーバーは送信者のEメールの伝送を許可します。SMTP認証は、許可されたユーザーがメールをリレーすることを許可し、許可されていないユーザー(スパム送信者など)へのリレー・サービスを拒否するために使用できます。現在、Oracle Workflowは、PLAIN、LOGINおよびDIGST-MD5の認証メカニズムをサポートしています。管理者は、メーラーの基本構成ページまたは拡張構成ページで、通知メーラーが認証に使用するユーザー名およびパスワードを入力できます。

4.15.3. リリース12.2

4.15.3.1. Eメールの文字エンコードの構成

ワークフロー管理者は、各言語のワークフロー通知で使用する文字エンコードを必要に応じて指定できるようになりました。この機能を使用すると、通知コンテンツを正常に表示するために別のキャラクタ・エンコードが必要な場合に、通知受信者のNLS作業環境で指定されている文字エンコーディング、およびデータベースの文字エンコーディングの両方をオーバーライドできます。文字エンコードの指定を構成するには、Oracle Workflowの管理者Webページの「管理」タブを使用します。

4.15.3.2. ワークリスト応答処理の遅延

パフォーマンスを向上させるには、ワークフロー管理者はワークリストを介して発行される通知応答の処理を遅延させるように、必要に応じてOracle Workflowを構成できます。この場合、ユーザーが応答を発行した後に、制御はユーザーにすぐに返されますが、ワークフローの以降のアクティビティは後で実行されます。すべての項目タイプまたは指定した項目タイプのみの通知応答処理を遅延させるように選択できます。Oracle Workflow管理者Webページの「管理」タブを使用して、応答処理を遅延させる項目タイプを構成します。

4.15.3.3. ワークフローのためのOracle RACのアフィニティ

Oracle Real Application Clusters (Oracle RAC)環境では、必要に応じてワークフローRACアフィニティを使用し、一部の大規模なワークフローの拡張性およびパフォーマンスを向上させることができます。RAC構成の一部として、ユーザーはRACインスタンスIDによってワークフロー・ランタイム表をパーティション化し、現在のセッション・コンテキストで指定されたRACインスタンスID

でマークされたレコードにのみアクセスできる表に仮想プライベート・データベース(VPD)ポリシーを作成します。パーティション化を完了するときに、Oracle WorkflowはRAC用のワークフロー・バックグラウンド・プロセスという特殊なタイプのバックグラウンド・エンジンを有効にします。このエンジンは、RAC対応のワークフローを処理するために使用できます。RAC用のワークフロー・バックグラウンド・プロセス・コンカレント・プログラムを使用して実行したバックグラウンド・エンジンは、ワークフロー表内の1つのRACインスタンスIDに対応した1つのパーティションのみにアクセスします。このため、このプログラムを使用して実行された他のバックグラウンド・エンジンは、他のパーティションに同時にアクセスできます。これにより、ワークフローRACアフィニティは、ワークフロー表での競合を回避するために役立ち、ワークフロー・ランタイム・データへのアクセスが速くなり、RAC対応のワークフロー処理のスループットが向上します。

通常、大規模なバッチ処理ワークフローは、この機能を使用することによってパフォーマンスが大幅に向上することがあるため、RACアフィニティを検討するよい候補となります。RACアフィニティに適合するには、ワークフローが同じセッションで開始および完了される必要があります。または、ワークフローが他の介入(応答を必要とする通知、プログラムによって再開されるブロック・アクティビティなど)を必要とせずにバックグラウンド・エンジンのみを使用して完了する必要があります。

4.15.3.4. ワークリストの操作性の機能拡張

リリース12.2では、通知システムおよびワークリストUIページに、次の機能拡張が含まれています。

- Oracle E-Business Suiteホーム・ページのワークリストリージョンの「全件リスト」ボタンには、ワークリストのオープン通知の数が括弧内に表示されます。別のユーザーのワークリストを表示するように切り替えた場合、「全件リスト」ボタンには、そのユーザーのワークリストのアクセス可能なオープン通知の数が表示されます。
- また、管理者は、「サインオン: 通知」プロファイル・オプションを使用して、ワークリストにあるオープン通知の数をユーザーに通知するヒント・メッセージをOracle E-Business Suiteホーム・ページに表示できます。ユーザーが別のユーザーのワークリストを表示するように切り替えていても、このヒント・メッセージにはユーザー自身のワークリストのオープン通知の数が常に表示されます。
- 「ワークフロー構成」ページの「ワークフロー・ステータス・モニターのダイアグラム・サイズ」オプションを使用して、管理者モニターおよびセルフサービス・モニター内のステータス・モニター・ダイアグラムの表示サイズを選択できます。選択できるサイズは、「小」、「中」または「大」です。
- 特殊なメッセージ属性#RELATED_HISTORYを使用して、応答が必要な通知およびFYI通知内に別の通知の処理履歴を含めることができるようになりました。また、関連する通知の処理履歴を別の作業項目に含めることができるようになりました。
- 詳細情報の要求を受け取ったユーザーは、その要求を別のユーザーに転送し、そのユーザーへのコメントを含めることができるようになりました。また、「通知」管理者ページを使用して通知を管理するワークフロー管理者は、要求を受け取ったユーザーから別のユーザーに詳細情報の要求を転送したり、要求を受け取ったユーザーのかわりに要求に応答したりすることができるようになりました。
- 通知が再割当された場合、新しい受信者の通知に表示される送信日付には、再割当の日付が表示されます。つまり、通知が元の受信者に送信された日付ではなく、この受信者が最初に通知を受け取った日付です。同様に、詳細情報の要求に表示される送信日付には、元の通知の送信日付ではなく、要求が行われた日付が表示されます。

- 「通知詳細」ページの上部には、簡単なステータスが表示されるようになりました(別のユーザーが通知を現在の受信者に委任または転送したかどうか、別のユーザーが詳細情報を要求または提供したかどうか、または別のユーザーが詳細情報の要求を現在の受信者に転送したかどうかを含む)。他のユーザーが入力したコメントも表示されます。

4.15.3.5. 使用不能通知作業環境のバルク・リセット

新しいコンカレント・プログラムを使用すると、Eメール通知を配信できなかったために通知作業環境に使用不能が設定されているユーザーを元の通知作業環境値にリセットできます。このプログラムを使用すると、複数ユーザーの通知作業環境を一度に簡単にリセットできます。

4.15.3.6. 通知の再割当の機能拡張

Oracle Workflowは、ワークフロー処理を開始したプロセス・オーナー、または通知の元ロールとして指定されているロールにユーザーが通知を再割当することを自動的に防止するようになりました。この制限は、ワークリストUIページおよび休暇ルールを使用した再割当に適用されます。

4.15.3.7. 関連IDによるサービス・コンポーネント処理の機能拡張

特定の関連IDと一致するメッセージのみを処理する専用サービス・コンポーネント(通知メーラー、PL/SQLおよびJavaエージェント・リスナーを含む)を定義できます。以前のリリースでは、専用メーラーまたは専用リスナーの関連IDと一致するメッセージは、汎用メーラーまたはリスナーがそのメッセージに最初にアクセスした場合、汎用メーラーまたはリスナーで処理されました。リリース12.2では、汎用メーラーが専用メーラーによって処理されているメッセージを処理しないように、サービス・コンポーネントの処理が拡張されました。かわりに、専用メーラーのステータスが「実行中」、「エラーにより停止しました」または「システムが無効化されました」であれば、適切な専用メーラーのみがこれらのメッセージを処理します。同様に、WF_DEFERREDエージェントおよびWF_JAVA_DEFERREDエージェントの汎用リスナーは、専用リスナーによって処理されているメッセージを処理せず、これらのメッセージが専用リスナーによって処理されるようになります。

注意: WF_DEFERREDおよびWF_JAVA_DEFERRED以外のすべてのエージェントの場合、汎用エージェント・リスナーまたはJavaエージェント・リスナーは、そのエージェントのすべてのメッセージを処理できます。これらのエージェントの場合、以前のリリースからの変更点はありません。

4.15.4. リリース12.2.3

4.15.4.1. ワークリスト・ヘッダー・アイコン

Oracle Application Frameworkベースのすべてのページに、ワークリスト・ヘッダー・アイコンがデフォルトで表示されるようになりました。このアイコンの表示は、プロファイル・オプションを使用して制御できます。ワークリスト・ヘッダー・アイコンは、Oracle E-Business Suiteホーム・ページにワークリスト・リージョンを含めることのかわりとして機能します。このアイコンには、ユーザーのワークリストのオープン通知の数が表示されます。ユーザーは、このアイコンを選択して、最新の通知の要約リストを表示できます。ユーザーは要約リストから通知件名を選択して、通知の詳細を表示し、応答したり、完全なワークリストにナビゲートしたりできます。

4.15.5. リリース12.2.4

4.15.5.1. プロキシ・ユーザーのアクセス制御

Oracle Workflowワークリストへのアクセス権を別のユーザーに付与する機能は、Oracleユーザー管理によって提供されるOracle E-Business Suiteの全体的なプロキシ・ユーザー・アクセス制御機能の一部となりました。プロキシ・ユーザーのアクセス権(ワークリストへのアクセス権を含む)をセットアップするには、Oracleユーザー管理を使用します。詳細は、4.13.3.1項を参照してください。

4.15.6. リリース12.2.5

4.15.6.1. Eメール通知でのOracle E-Business Suite添付のサポート

ワークフロー通知に埋め込まれているOracle Application FrameworkベースのリージョンにOracle E-Business Suiteの添付が含まれている場合は、通知がEメールで送信されるときにこれらの添付を含めることができるようになりました。Eメールを受け取ったユーザーは、これらの添付にアクセスするためにOracle E-Business Suiteにログインする必要がなくなりました。

4.15.6.2. ユーザーまたはロールの複数のEメール・アドレスのサポート

Oracle Workflow通知メーラーは、単一のユーザーまたはロールに複数のEメール・アドレスを定義することをサポートするようになりました。そのユーザーが通知を受け取ると、その通知のコピーがそのユーザー用に格納されている各Eメール・アドレスに送信されます。

4.15.7. リリース12.2.6

4.15.7.1. Eメール通知内のOracle E-Business Suiteへの外部リンク

Oracle E-Business SuiteインスタンスがDMZ構成でセットアップされている場合、Eメール通知の通知詳細リンク添付のリンクが、外部ユーザーとして指定したユーザーの外部Webエントリ・ポイントを使用して生成されるように指定できるようになりました。このようにして、イントラネットにアクセスできない外部ユーザー(サプライヤなど)が、ワークフロー通知からこのOracle E-Business Suiteコンテンツへのリンクにアクセスできます。FND_FRAMEWORK_EXTERNAL_AGENTという新しいプロファイル・オプションを使用して、ワークフロー・メーラーがリンクを生成するために使用する外部Webエントリ・ポイントを指定します。ユーザーを外部ユーザーとして指定するには、新しいロールWF_EXTERNAL_ROLEをユーザーに割り当てます。

4.15.7.2. メーラーのセキュリティ・プロトコルを指定する機能

通知メーラーがSMTPサーバーおよびIMAPサーバーへの接続に使用するセキュリティ・プロトコルを指定できるようになりました。通知メーラー構成ウィザードの新しいインバウンドおよびアウトバウンドの接続セキュリティ・パラメータを使用して、セキュリティ・プロトコルを指定します。選択できるのは、TLSまたはSSLを直接使用する「SSL/TLS」、STARTTLSを使用して暗号化されたTLSまたはSSL接続にアップグレードする「STARTTLS」、または「なし」(セキュリティ・プロトコルを使用しない場合)です。

4.16. Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business Suite

4.16.1. 概要

Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business Suiteを使用すると、保留中の承認要求に応答できます。いつでも任意の場所で電話から、経費、購買依頼、発注、必要要員、オファーなどの承認要求に対してすばやく対応を取ります。

- 送信者またはサブジェクトごとに承認要求をすばやくフィルタ処理します。
- ヘッダー詳細と明細品目詳細、処理履歴およびコメントを一目で確認します。
- コメント付きまたはコメントなしで承認または否認するか、さらに情報を要求します。

Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business Suiteは、Oracle E-Business Suite 12.1.3および12.2.3以上と互換性があります。このアプリを使用するには、ユーザーがワークフロー承認を使用するOracle E-Business Suite製品のライセンスされたユーザーであり、管理者によってサーバー側にモバイル・サービスが構成されている必要があります。

4.16.2. Mobileリリース1.0 - クライアント・バージョン1.0.0

4.16.2.1. 承認要求の処理

Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business Suiteの初期リリースでは、経費、購買依頼、発注、必要要員およびオファーを含む承認要求に対して対応を取ることができます。

4.16.3. Mobileリリース2.1 - クライアント・バージョン1.1.0

4.16.3.1. Mobile Foundationリリース2.1のアップデート

- ログインおよび構成フローの改善
- アプリを再インストールすることなくサーバーURLを変更する機能
- 診断の改善

4.16.4. Mobileリリース3.0 - クライアント・バージョン1.2.0

4.16.4.1. Androidのサポート

以前のバージョンでは、Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business SuiteはiOSデバイスでのみ使用できました。バージョン1.2.0では、Androidデバイスでもアプリを使用できるようになりました。

4.16.4.2. Mobile Foundationリリース3.0のアップデート

- iOSおよびAndroidを同じクライアント・コードでサポートするように変更
- 「接続詳細」ページからサーバーURLを更新する機能

4.16.5. Mobileリリース4.0 - クライアント・バージョン1.3.0

4.16.5.1. 新しい承認タイプ

新しい承認要求タイプであるタイムカード、品目変更および仕入先請求書がサポートされます。

4.16.5.2. 拡張されたデータ・レイアウト

承認ページのサブジェクト、ヘッダーおよび明細レコードのレイアウトが拡張されました。

4.16.5.3. 改善された承認のフィルタリング

スプリングボードの承認タイプの動的リストのかわりに、承認タイプごとに承認保留をフィルタ処理する機能が、「タイプ別承認保留」スプリングボード・エントリに下に表示されるようになりました。ユーザーは、「タイプ別承認保留」ページまたは「保留承認」リスト・ページをアプリのデフォルトの最初のページとして設定するように選択できます。

4.16.5.4. 翻訳のサポート

このアプリは、ポルトガル語(ブラジル)、フランス語(カナダ)、オランダ語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語(ラテンアメリカ)、簡体字中国語およびスペイン語で使用できます。

4.16.5.5. Mobile Foundationリリース4.0のアップデート

- 企業での配布のサポート
- 企業ブランドのカスタマイズのサポート
- 認証をOracle Access Manager (OAM)に委任するためのWeb SSO認証のサポート

4.16.6. Mobileリリース5.0 - クライアント・バージョン1.4.0

4.16.6.1. 新しい承認タイプ

新しい承認タイプは、チャネル収益管理(要求、予算およびオファー)、人事管理(不就業および学習(クラス登録および認定加入を含む))、在庫(移動オーダー)、保守(作業指示、作業要求および作業許可)、受注管理(RMA、受注基本契約および見積)および見積(見積)の機能領域でサポートされます。

4.16.6.2. 添付

承認要求の添付を表示できます。

4.16.6.3. カスタム・ワークフローの追加

カスタム・ワークフローを承認タイプとして追加できるようになりました。

4.16.6.4. 拡張されたタイプ・ページによる承認保留

「タイプ別承認保留」ページには、次の機能拡張が含まれています。

- 改善された承認タイプ・アイコン(無色のアイコン)
- リアルタイムの承認保留数
- 承認保留の承認タイプのみを表示する動的表示

4.16.6.5. 拡張された「詳細」ページ

「詳細」ページには、改善されたサブジェクト・カード・ビューが含まれています。

4.16.6.6. 拡張されたリフレッシュ操作

リフレッシュ操作は同期アイコンのかわりに、プルしてリフレッシュ・ジェスチャを使用するように拡張されました。

4.16.6.7. Mobile Foundationリリース5.0のアップデート

- 管理者のためのユーザー・インストールおよび使用状況のメトリック
- 選択したアプリ操作のアップデートされたルック・アンド・フィール
- Oracle Mobile Application Framework (MAF) 2.2.2の活用

4.16.7. Mobileリリース5.0 - クライアント・バージョン1.4.2

4.16.7.1. Mobile Foundationリリース5.0のアップデート

- iOSデバイスのアプリ内で外部Webサイトへのリンクを開く機能

4.16.8. Mobileリリース6.0 - クライアント・バージョン1.5.0

4.16.8.1. 新しい承認

新しい承認が、人事(個人ステータスの変更)、プロジェクト(プロジェクト、予算)およびサービス契約の機能領域でサポートされます。

4.16.8.2. シードのメタデータをカスタマイズする機能

Oracle Mobile Approvals for Oracle E-Business Suite開発インフラストラクチャを使用すると、開発者はシードの承認メタデータを構成してカスタマイズをサポートできるようになりました。

4.16.8.3. カスタマイズをサポートするための見積承認の機能拡張

見積のシードの承認は、カスタマイズをサポートするために機能拡張されました。

4.16.8.4. 技術的なアップデート

技術的なアップデートには、次のものが含まれます。

- 明細詳細の表示は、パフォーマンスを向上させるために最初の50レコードに制限されています。ユーザーは、Oracle WorkflowワークリストWebページで完全な明細詳細を表示できます。

- 開発者は、承認メタデータを定義するときに、レベル2からレベル3のドリルダウンのための複数のパラメータを構成できます。

4.16.8.5. Mobile Foundationリリース6.0のアップデート

- Android デバイスのアプリ内で外部Webサイトへのリンクを開く機能
- アップデートされたルック・アンド・フィール(iOSデバイスのアクション・シートのネイティブなルック・アンド・フィールを含む)
- 「サインイン」ページのユーザー資格証明フィールドを簡単にクリアする機能
- Oracle Mobile Application Framework (MAF) 2.3.1を活用した技術的アップデート

4.17. Oracle XML Gateway

4.17.1. リリース12.0.3 (RUP3)

4.17.1.1. Oracle XML Gatewayからのエラー通知の改善

システム管理者またはトランザクション管理者、あるいはその両方への通知

ユーザーは各トランザクションに(システム管理者の他に)そのトランザクションのエラー通知を受信するトランザクション管理者を構成できます。必要に応じて、トランザクション管理者はエラー通知に対して対応(再処理/中止)できます。

通知のタイムアウト後のエラー通知の自動再処理

システム管理者が通知タイムアウト期間内に通知に対して明示的なアクション(つまり、中止または再処理)を取らなかった場合、Oracle XML Gatewayエンジンは「最大再試行回数」の制限に達するまで、対応するエラーのトランザクションを自動的に再処理します。「最大再試行回数」は、通知タイムアウト期間後にエンジンが自動的に再処理する回数を制御するプロファイル・オプションです。「最大再試行回数」の制限を超えると、システム管理者またはトランザクション管理者が明示的に再処理を選択するまで、エラーのトランザクションは再処理されなくなります。

再処理中にエラーが発生した場合は、システム管理者またはトランザクション管理者、あるいはその両方に通知が送信されます。

4.17.2. リリース12.2

4.17.2.1. JavaでのOracle XML Gatewayのインバウンド処理

Oracle XML Gatewayは、ECX_IN_JAVA_PROCESSINGプロファイル・オプションに指定されている値に基づいて、Oracle XML Gateway実行エンジンがインバウンド・メッセージをJavaまたはPL/SQLで処理できるようにすることによって、インバウンド処理が拡張されました。以前は、すべてのインバウンド・メッセージはPL/SQLでのみ処理されました。

4.17.2.2. 拡張されたOracle XML Gateway診断

診断機能および潜在的な問題のトラブルシューティングを提供するために、Oracle XML Gateway診断はOracle XML Gatewayの健全性をチェックして検証するXML Gatewayヘルス・チェック、およびドキュメントの詳細の表示と潜在的な問題の根本原因分析の実行を行うことができるドキュメント詳細の取得が含まれるように拡張されました。この機能拡張には、既存の診断

(基本OTA診断テスト、宛先サーバーへのping、およびメッセージ・モニターを含む)の変更されたパラメータも含まれています。

4.17.3. リリース12.2.6

4.17.3.1. 取引先を管理するためのAPI

Oracle XML Gatewayのフォームベースの「取引先の定義」UIページを使用することに加えて、APIまたはWebサービスを使用して取引先を管理できるようになりました。この機能は、Oracle XML Gatewayから取引先情報を作成、更新、削除および取得するための別のオプションを提供します。

取引先セットアップAPI (ECX_TP_SETUP_API)がOracle Integration Repositoryに公開され、統合SOAゲートウェイの職責を使用してそれをWebサービスとして配置できます。